

新堂遺跡

—京奈和自動車道「御所区間」建設に伴う発掘調査報告書—

2015年9月

奈良県橿原市教育委員会

序

ここに新堂遺跡の発掘調査報告書を『橿原市埋蔵文化財調査報告 第12冊』として刊行します。本書は、奈良県橿原市新堂町に所在する新堂遺跡において橿原市教育委員会が実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

橿原市の西部では近年、京奈和自動車道の建設に伴う発掘調査によって、様々ななめざましい発見が相次ぎました。新堂遺跡もその一つで、渡来系要素が多く含まれる古墳時代集落跡の発見など、多数の成果が挙げられています。

本書で報告を行う橿教委2002-2次調査は、新堂遺跡の実態解明の端緒となった調査です。この調査では河道から古墳時代の土器や木製品などの多数の遺物が出土しました。その出土状況は「水辺の祭祀」が執り行われていたことを想起させ、新堂遺跡の重要性を認識させるのに十分足るものでした。

河道からの出土遺物には、広葉樹の小枝を束ねた帯が含まれています。現存する帯としては国内最古の資料です。帯は現在、平成26年度に開館した「歴史に憩う橿原市博物館」において、目玉資料の一つとして常設展示されています。

最後になりましたが、現地の発掘調査並びに本書の刊行にあたって御協力いただいた関係諸氏ならび諸機関に厚く御礼申し上げると共に、本書が多くの方々に活用され、遺跡の重要性を周知する機縁となることを願います。

平成27年9月30日

橿原市教育委員会
教育長 吉本重男

例　　言

- 1 本書は、奈良県橿原市新堂町に所在する新堂（しんどう）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書で報告を行う発掘調査は、京奈和自動車道（御所区間）建設に伴って実施している。国土交通省 近畿地方整備局 奈良国道事務所の委託を受け、奈良県教育委員会の指導のもと、奈良県橿原市教育委員会が発掘調査及び整理・報告作業を担当している。
- 3 発掘調査及び整理・報告作業にかかる費用については、国土交通省 近畿地方整備局 奈良国道事務所が負担している。
- 4 現地調査期間は平成 14（2002）年 9 月 9 日～同年 12 月 26 日である。
- 5 遺物整理・報告書作成期間は平成 23（2011）年度～平成 27（2015）年度である。
- 6 現地調査時の体制は、橿原市教育委員会 文化財課長 佐藤幸一、課長補佐 波部吉伸、係長 齊藤明彦、主任 竹田正則、嘱託 濱岡大輔・川部浩司・柳田治である。現地調査は竹田・濱岡・川部・柳田が担当している。
また、遺物整理時の体制は文化財課長 竹田正則（平成 23～27 年度）、課長補佐 游河弘（平成 23～27 年度）・高瀬友己（平成 23 年度）・中川明彦（平成 24・25 年度）、統括調整員 平岩欣太（平成 24～27 年度）・米田一（平成 26 年度）、保存係長 平岩欣太（平成 23 年度）、事業調整係長 米田一（平成 23～25 年度）・田原明世（平成 27 年度）、主査 松井一晃（平成 23～25 年度）、主査 石坂泰士（平成 24～27 年度）である。平成 23～25 年度の整理作業は松井が、平成 26・27 年度の整理作業は石坂が、主に担当した。
- 7 発掘調査を実施するにあたって、地元各位をはじめ、奈良国道事務所、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所より多大な御協力を得た。記して感謝申し上げたい。なお、紙幅の都合もあり、個人名は省略させていただきます。
- 8 出土遺物をはじめ調査記録は、橿原市教育委員会で保管している。遺物の一部は、歴史に憩う橿原市博物館にて常設展示を行っている。
- 9 下層遺構から出土した有機質遺物の一部については、㈱吉田生物研究所による保存処理をしている。報告中に記載している樹種同定等の分析結果についても㈱吉田生物研究所による。
- 10 本書所収の写真のうち、現場調査写真は調査担当者が撮影を行った。遺物写真はアートフォト右文 佐藤右文氏および橿原市教育委員会が撮影を行った。
- 11 本書の編集及び執筆は、石坂が担当した。

凡　例

- 1 本書で示す方位は座標北を使用した。座標値は世界測地系（平面直角座標第VI系）に基づく。発掘調査（2002年）の基準杭・地区杭打設時には日本測地系を基準として用いており、既往の概報等に記載している本発掘調査の座標値も日本測地系となっている。今回、これらについても全て世界測地系に変換した上で報告を行っている。
- 2 写真図版に掲載している遺物の縮尺率は任意である。
- 3 遺構・遺物の図面縮尺は各図に示している。
- 4 土層名における色調は『新版標準土色帖24版』（小山正忠・竹原秀雄 編著、日本色研事業株式会社 発行）を使用した。
- 5 遺構断面図の標高値はメートル表記である。小数点以下の記述が無い場合、小数点下の値は0である。標高値は東京湾平均海面（T.P.）からの値である。
- 6 遺物実測図の番号は本書全体の通し番号で示した。図版の遺物番号もこれと一致している。
- 7 土器の実測図については、須恵器は断面を黒塗りで、その他の土器は断面を白抜きで、それぞれ表現している。
- 8 土器の拓本図は、左から内面・断面・外面の順で掲載している。内面に文様等の特徴が無い場合は、内面の拓本を省略している図もある。

目 次

序	i
例言	ii
凡例	iii
目次	iv
挿図目次	v
図版目次	vi
第Ⅰ章 調査の経過	
第1節 調査に係る経緯	1
第2節 発掘作業の経過	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第Ⅲ章 調査の成果	
第1節 調査の方法	10
第2節 基本層序	11
第3節 遺構	16
第4節 遺物	32
第Ⅳ章 総括	
第1節 調査成果のまとめ	54
第2節 周辺の遺跡と環境	55
報告書抄録	58
図版	

挿 図 目 次

図1	調査位置図	5
図2	調査地周辺道路地図 ($S = 1/12,500$)	7
図3	調査地周辺の地形と発掘調査地点 ($S = 1/2,500$)	8
図4	調査区北壁 土層断面① ($S = 1/50$)	12
図5	調査区北壁 土層断面②	13
図6	IV・V層断面調査区 南北土層断面 ($S = 1/40$)	14
図7	IV・V層断面調査区 東西土層断面 ($S = 1/40$)	15
図8	上層遺構平面図 ($S = 1/250$)	17
図9	中層遺構平面図 ($S = 1/250$)	18
図10	中層遺構 据立柱建物・塀・溝 上層断面 ($S = 1/20$)	19
図11	中層遺構 調査区西北大型ピット 上層断面 ($S = 1/20$)	20
図12	中層遺構 ピット 上層断面① ($S = 1/20$)	20
図13	中層遺構 ピット 上層断面② ($S = 1/20$)	21
図14	中層遺構 ピット 上層断面③ ($S = 1/20$)	22
図15	下層遺構平面図 ($S = 1/250$)	24
図16	中・下層遺構配置図 ($S = 1/300$)	25
図17	調査区西壁 道構面下土層断面① ($S = 1/50$)	26
図18	調査区西壁 道構面下土層断面②	27
図19	SR02・SX03 大畦土層断面 ($S = 1/40$)	28
図20	SR01 上層断面 ($S = 1/40$)	29
図21	下層遺構 土坑・溝 上層断面 ($S = 1/40$)	30
図22	上層遺構出土 石器 ($S = 1/2$)	32
図23	上層遺構出土 上器 ($S = 1/4$)	32
図24	中層遺構出土 土器 ($S = 1/4$)	33
図25	SR02出土 石製品 ($S = 1/2$)	34
図26	SR02出土 土器① ($S = 1/4$)	35
図27	SR02出土 上器② ($S = 1/4$)	36
図28	SR02出土 上器③ ($S = 1/4$)	38
図29	SR02出土 上器④ ($S = 1/4$)	40
図30	SR02出土 上器⑤・土製品 ($S = 1/4$)	42
図31	SR02出土 瓦の羽口 ($S = 1/4$)	43
図32	SR02出土 瓦器 ($S = 1/1$)	44
図33	SR02出土 木製品① ($S = 1/4$)	45
図34	SR02出土 木製品② ($S = 1/4$)	46
図35	SR01出土 石器・土器 ($S = 1/4$)	47
図36	SR01出土 木製品 ($S = 1/4$)	48
図37	SX03出土 上器 ($S = 1/4$)	49
図38	SD120出土 上器 ($S = 1/4$)	49
図39	SK02出土 上器 ($S = 1/4$)	50
図40	IV層出土 石器 ($S = 1/2$)	50
図41	IV-①層出土 上器 ($S = 1/4$)	51
図42	IV-①層底面出土 上器 ($S = 1/4$)	52
図43	IV-②層出土 上器 ($S = 1/4$)	52
図44	IV-②層底面出土 上器・土製品 ($S = 1/4$)	53
図45	新堂道路・東坊城道跡旧河川復元図 ($S = 1/3,000$)	56

図 版 目 次

図版 1 上	調査区全貌 航空写真(俯瞰、上方)	図版 26 上	SRO2・SX03上層断面(南東から)
図版 1 下	調査地全貌 航空写真(南から)	図版 26 下	調査区西端南端 SRO2上層断面(南東から)
図版 2 上	調査地全貌 航空写真(北から)	図版 27 上	調査区西端西半 SRO2上層断面(北西から)
図版 2 下	調査地全貌 航空写真(東から)	図版 27 下	調査区南端拡張部 SRO2検出状況(北西から)
図版 3 上	調査地遠景 航空写真(東から)	図版 28 上	SRO1上層断面(南東から)
図版 3 下	調査地遠景 航空写真(南西から)	図版 28 下	SRO1底面木製品出土状況(南東から。遺物No.157)
図版 4 上	調査地遠景 航空写真(西北西から)	図版 29 上	SRO1石器出土状況(西から。遺物No.137)
図版 4 下	調査地遠景 航空写真(南東から)	図版 29 下	SRO1土器出土状況(南から)
図版 5 上	調査区全貌 航空写真(西から)	図版 30 上左	SX03土器出土状況(東から)
図版 5 下	調査区全貌 上層道構造状況、中・下層道構造出土状況(南から)	図版 30 上右	SD111検出状況(南東から)
図版 6	調査区南半 下層道構造出土状況(北から)	図版 30 中左	SD113上層断面(北西から)
図版 7 上	調査区西半 上層道構造状況、中・下層道構造出土状況(南から)	図版 30 下左	SD114上層断面(南東から)
図版 7 下	調査区南半 上層道構造状況、中・下層道構造出土状況(北西から)	図版 30 下右	SD113・114完掘状況(北西から)
図版 8 上	調査区西半 上層道構造状況、中・下層道構造出土状況(北から)	図版 31	SD113・114完掘状況(南東から)
図版 8 下	調査区北半 上層道構造状況、中・下層道構造出土状況(西北西から)	図版 32	調査区北半 下層道構造完掘状況(北東から)
図版 9 上	調査区東端部 上層道構造状況、中・下層道構造出土状況(北から)	図版 33 上	SK02検出状況(西から)
図版 9 下	調査区中央部 中層道構造ピット群出土状況(南から)	図版 33 下	SK02最上層土層器出土状況(西から。遺物No.164・165)
図版 10 上左	SRO1検出状況(北東から)	図版 34 上	SK02上層断面(西から)
図版 10 上右	調査区北端部 ピット群出土状況(西から)	図版 34 下	SK03検出状況(南から)
図版 10 下	調査区南半 土坑・ピット完掘状況(北から)	図版 35 上	SK03完掘状況(北から)
図版 11 上	SRO1検出状況(東から)	図版 35 下	SK03下層 墓形物質検出状況(北から)
図版 11 下	SRO1完掘状況(東から)	図版 36 上	調査区北壁 上層断面(南東から)
図版 12 上左	SP051上層断面(東から)	図版 36 下左	調査区北壁西端部 上層断面(南から)
図版 12 上右	SP105上層断面(南から)	図版 36 下右	調査区北壁東端部 上層断面(南から)
図版 12 中左	SP104上層断面(北から)	図版 37	調査区全貌 完掘状況(南から。V層上面検出)
図版 12 中右	SP106上層断面(南から)	図版 38 上	調査区南半 完掘状況(南から)
図版 12 下	調査区西半 下層道構造状況(南から)	図版 38 下	調査区南半 道構面下断削上層断面(南西から)
図版 13	調査区西半 下層道構造状況(北から)	図版 39 上	調査区中央部 道構面下断削上層断面(北西から)
図版 14	SRO1・02完掘状況(北西から)	図版 39 下	調査区南半 道構面下断削上層断面(北西から)
図版 15 上	調査区全貌 下層道構造状況(北から)	図版 40	SRO2出土 ①(遺物No.127)
図版 15 下	調査区北半 下層道構造状況(北西から)	図版 41 上	上層道構(耕作溝)出土遺物
図版 16	SRO2遺物出土状況(南東から)	図版 41 二段目左	中層道構 SK01出土遺物
図版 17	SRO2完掘状況(南から)	図版 41 二段目右	中層道構 SP02出土遺物
図版 18 上	SRO2遺物出土状況(南西から)	図版 41 三段目	中層道構 SK20出土遺物
図版 18 下	SRO2大判以北 遺物出土状況(北から)	図版 41 下	中層道構 SP65出土遺物
図版 19 上	SRO2大判以北有機質層出土状況(南東から)	図版 42	下層道構 SRO2出土遺物①
図版 19 下	SRO2大判以南 遺物出土状況(南東から)	図版 43	下層道構 SRO2出土遺物②
図版 20 上	SRO2遺物出土状況(南から)	図版 44	下層道構 SRO2出土遺物③
図版 20 下	SRO2北端有機質層出土、遺物出土状況(北東から)	図版 45	下層道構 SRO2出土遺物④
図版 21 上	SRO2北端有機質層出土、遺物出土状況(南から)	図版 46	下層道構 SRO2出土遺物⑤
図版 21 下	SRO2鳥形木製品出土状況(東から。遺物No.132)	図版 47	下層道構 SRO2出土遺物⑥
図版 22 上	SRO2木製品出土状況(南から)	図版 48	下層道構 SRO2出土遺物⑦
図版 22 下	SRO2泥質・焼成土状況(北から。遺物No.136・127)	図版 49	下層道構 SRO2出土遺物⑧
図版 23 上	SRO2陶器出土状況(南東から。遺物No.127)	図版 50	下層道構 SRO2出土遺物⑨
図版 23 下	SRO2ナス形木製品出土状況(西から。遺物No.133)	図版 51	下層道構 SRO1出土遺物①
図版 24 上左	SRO2土器出土状況(東から。遺物No.92)	図版 52	下層道構 SRO1出土遺物②
図版 24 上右	SRO2灰陶出土状況(北から)	図版 53 上	下層道構 SD120出土遺物
図版 24 中左	SRO2灰陶出土状況(東から)	図版 53 中	下層道構 SK02出土遺物
図版 24 中右	SRO2木製品出土状況(南西から。遺物No.129)	図版 53 下	縄文時代包含層 IV-①層出土遺物
図版 24 下	SRO2腹出土状況(北西から。遺物No.111)	図版 54	縄文時代包含層 IV-①層出土遺物
図版 25 上	SRO1・02完掘状況(南東から)	図版 55 上	縄文時代包含層 IV-②層出土遺物
図版 25 下	SRO1・02完掘状況(南西から)	図版 55 下	縄文時代包含層 IV-層出土石器

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に係る経緯

本書は、京奈和自動車道建設に伴って実施した新堂遺跡（樅教委2002-2次調査）の発掘調査報告書である。

京奈和自動車道は、京都・奈良・和歌山を結ぶ自動車専用道で、国土交通省により各地で建設が進められている。奈良盆地内の京奈和自動車道は、平成27年度現在、「大和区間」のうち都山下ツ道ジャンクションから樅原北インターチェンジまでが開通し、供用を開始している。また、その南にあたる「御所区間」では樅原高田インターチェンジから御所南インターチェンジまでの間が暫定2車線の形で供用を開始している。

樅原市域における京奈和自動車道建設に伴う本格的な調査は、国道24号線より南において昭和63（1988）年より断続的に実施されてきた。当教育委員会では奈良県教育委員会の依頼を受け、樅原バイパスと国道24号線の接続部から南の御所インターチェンジまでの距離約5kmの区間に対象に、平成13（2001）年度から平成22（2010）年度にわたり発掘調査を実施した。同区間は大和高田バイパスと交差する樅原高田インターチェンジを境として、北が「大和区間」、南が「御所区間」となる。発掘調査を実施する区域の分担については、国土交通省、奈良県教育委員会、奈良県立樅原考古学研究所、大和高田市教育委員会、御所市教育委員会及び当教育委員会の協議の元で決定された。

京奈和自動車道の建設予定地は、これまで本格的な調査が行われておらず、遺跡の詳細が不明、あるいは埋蔵文化財の包蔵地外とされてきた地域が大半であった。しかし京奈和自動車道建設を契機とする発掘調査によって、遺跡の範囲・内容が変更される、あるいは新たな遺跡の存在が認識されるような発見が相次いだ。

当教育委員会では、調査年度を西暦で表し、その年度内に行われた発掘調査名称を年度-調査次数の形で示している。本書で報告を行う調査に対しては、樅教委2002-2次調査という番号を付与している。調査記録や出土遺物には、この番号を記して整理・保管している。なお、樅教委2002-2次調査は計3地点の調査を含むが、本書で報告を行うのはその一つ西新堂地区である。

新堂遺跡は、「大和区間」と「御所区間」にまたがる範間に位置する。本書で報告を行う発掘調査は、現在の樅原高田インターチェンジの南東にあたる位置で実施している。この地点は「御所区間」の北端部にあたる。詳細は後述するように、新堂遺跡が遺跡地图に記載されたのは平成17（2005）年であるが、本報告においては便宜上、新堂遺跡という名称を用いて記述することとする。

新堂遺跡の発掘調査は平成13（2001）年度から平成22（2010）年度にかけて、当教育委員会が実施している。樅教委2002-2次調査は、当教育委員会が「御所区間」において最初に実施した発掘調査である。調査時、調査地点は西新堂遺跡という名称であった。これは調査地に存在していた奈良県土地開発公社現場事務所の建設に先立ち奈良県立樅原考古学研究所によって実施された試掘調査（清水1994）を経て、遺跡地图に記載されていたものである。試掘調査では古墳時代および13世紀頃の遺構・遺物の存在が確認されている。その後、京奈和自動車道建設に伴う発掘調査の成果が積み重ねられ、周辺における遺跡の実態が明らかとなっていた。それらの成果を受けて平成17（2005）

年に西新堂遺跡の名称・範囲・詳細を変更する形で、新堂遺跡として遺跡地図に記載されることとなった。名称の変更が行われたのは、遺跡が橿原市新堂町の中心から東部にかけての範囲に広がっており、現在の地名および遺跡の実態を合わせるためにある。なお、新堂遺跡の範囲は平成 26 年にさらに北西へと広がっている。図 2 の遺跡地図では平成 27 年度時点での範囲を示している。調査地点は新堂遺跡の南東部にあたる。

【参考文献】

清水昭博 1994 「新堂遺物散布地試掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報 1993 年度（第二分冊）』奈良県立橿原考古学研究所

第 2 節 発掘作業の経過

本発掘調査は平成 14（2002）年 9 月 9 日から同年 12 月 26 日までの期間、実施した。実働日数は 70 日を要した。その間、作業員は延べ 900 人を要した。調査の日々の記録は、以下の調査日誌抄録に掲げた。

平成 14 年 9. 9（月）

発掘調査開始。重機 2 台搬入。重機掘削。壁面整形。排水溝掘削。道具小屋設営。元来事務所が設営されていた地点は土壌が改良されており、その上へ建物基礎が設けられている。これらは遺構面に達しているため掘削できない状況であることが判明。建物外の範囲を中心に掘削するよう変更する。

9. 10（火）

重機掘削。壁面整形。排水溝掘削。素掘溝検出。

9. 11（水）

重機掘削。壁面整形。排水溝掘削。素掘溝検出。

9. 12（木）

重機掘削、終了。壁面整形。排水溝掘削。素掘溝、自然河道、土坑、ピットなどを検出。

9. 13（金）

調査区南側の壁面整形と排水溝掘削。遺構精査・検出作業。

9. 17（火）

降雨のため現場調査中止。現場事務所敷地内において土器の洗浄作業。作業は午前中で終了とした。

9. 18（水）

ベルトコンベヤーの設置。調査区北側約 290 m の遺構精査及び遺構検出作業。検出遺構（耕作溝）の掘下げ。南北耕作溝は 2 ~ 3m の間隔で幅 40 ~ 60 cm の溝があるが、これは他の溝より深い。重複して溝が存在するため各溝の遺構剥離部が判りづらい。埋土は概して黄灰色粘土。

9. 19（木）

調査区北側の南北・東西方向耕作溝の掘削。順々に南側へ清掃、遺構精査、遺構検出作業を行う。耕作溝の掘

削時にはそれぞれ珪を残す。

9. 20（金）

耕作溝掘削作業を継続。調査区南側で暗紅色砂を埋土とする北西から南東方向の下層溝を確認。溝には 5 世紀後半の土師器塊が含まれる。下層遺構の確認ベース面には土器が含まれており、縄文時代に遡る可能性がある。南側・東側の排水溝掘下げ。

9. 24（火）

南側・東側の排水溝掘下げ。調査区南側の耕作溝検出、掘削作業。南北方向に並ぶ 4 基の柱穴の存在を確認。調査区南辺より北に 19m 地点と 23m 地点に南東・北西方の河道路を確認。

9. 25（水）

遺構平面図作成のための仮杭打設。耕作溝掘削の続き。調査区南辺より北に 9m 北の地点まで精査・検出・遺構掘削。調査区西側中央部に被っている青灰色砂の漉き取り。

9. 26（木）

耕作溝掘削。調査区南端まで精査・検出・掘削が進む。特に東側は遺構が密で、個々の遺構範囲が明確ではない。南端の杭（西側）より 21m 北、東へ 2m の地点、幅 40 cm の耕作溝において鉄製品出土。北から順に遺構平面図を作成。

9. 27（金）

降雨のため作業中止。昼間、風が強く壁面シートのピン留め、遺構面のシートの張りなおしを行う。

9. 30（月）

10 時まで台風対策の作業を行う。以降は調査区南端部の遺構掘削作業。下層遺構の検出作業。

10. 1 (火)
台風対策作業。ベルトコンベヤーの移動やポンプ増設など。現場事務所敷地内の片付け。10時で作業終了。
10. 2 (水)
降雨の後処理作業（シート干し、水抜き）。調査区北側から上層掘り残しの確認をしつつ下層遺構確認を行う。遺構ベース層に繩文土器が含まれている。
10. 3 (木)
調査区の清掃、下層遺構検出作業。明日写真撮影できるところまで進む。調査区南の流路2条の間で盛りのよう青灰褐色砂がある。調査区壁面シート除去。
10. 4 (金)
調査区周辺の清掃。上層遺構完掘・下層遺構検出写真の撮影。
10. 7 (月)
調査区北側の再清掃。上層遺構完掘・下層遺構検出写真の撮影。
10. 8 (火)
写真撮影に向けて清掃を行うも、雨が強くなり遺構面の状態が悪化したので11時で作業打ち切り。
10. 9 (水)
清掃後、各遺構の検出写真撮影。
10. 10 (木)
各遺構の検出撮影。記録後、半裁作業に入る。耕作溝の畦除去。測量業者によるメッシュ杭打設。
10. 11 (金)
耕作溝の畦除去。西側・北側排水溝の掘下げ。遺構掘削。SK02・03・04はかなり深くなると考えられる。井戸か。
10. 15 (火)
SK02 畦の崩落土除去。底面より古墳前期の土師器壺。各遺構断面の記録作業。南から詳細平面図を作成。北側遺構検出写真の再撮影に向けての清掃。
10. 16 (水)
調査区東突出部と北側の清掃。SK03・02 完掘（底より2個目の土師器壺出土）。南側ピット群の土層図、平面図作成。
10. 17 (木)
調査区北部、ピット検出状況撮影。調査区南端のピット群記録作業。
10. 18 (金)
SK02 完掘写真撮影。南側ピット群完掘写真撮影。
10. 21 (月)
降雨のため作業中止。現場巡視、異常なし。
10. 22 (火)
降雨後処理。SK01 から出土した瓦器塊の取り上げ。SR01・02・SX03 の掘削開始。輪郭を明らかにするため、全体に5cm程度の掘下げ。SR01・02 に大畦を設定。SR01 からは完形の土師器、須恵器、骨などが出土。SR02、SX03 は土の判別が難しい。
10. 23 (水)
調査区南端の柱穴記録写真。SR01 の掘削。大畦は深さがそれほどないことから幅を狭くする。
10. 24 (木)
SR01 摂取、大畦より西側はほぼ完掘。ピットの記録作業。SR02・SX03 付近から出土する須恵器には1世紀程度の時期幅が見られる。
10. 25 (金)
SR01・02・SX03 摂取。SR02 検出面から下に60cmの付近からは土師器壺、須恵器壺、骨片、桃核、木片葉、種子などが出土。
10. 28 (月)
SR01・02・SX03 摂取。SR01 大畦の記録作業。
10. 29 (火)
SR01 摂取、終了。SX03 土器溜りの清掃作業。SR02 大畦西側の有機物堆積層上面で遺物出土状況写真撮影。
10. 30 (水)
SX03 遺物出土状況記録。SR02 大畦西側の有機物堆積層の除去。大畦東側の摂取。検出面から下に65cm前後の深度で土器、馬歯、骨が多く出土。
10. 31 (木)
SR02 遺物出土状況の写真撮影、図面作業。明日の降雨に備え、十二分に養生を行う。
11. 1 (金)
降雨により現場作業無し。現場巡視異常なし。遺物洗浄作業。
11. 5 (火)
SR02 記録作業。遺構西側の有機物堆積層及び炭層の摂取。大畦直下で帶状の遺物が出土。保存処理に向けて現場にて協議。
11. 6 (水)
SR02 出土の木製品（帯・泥除）の写真撮影。記録後、取り上げを行う。帯は薬品で固定を行う。SR02 東側の掘下げ。
11. 7 (木)
SR02 大畦東側の遺物出土状況記録作業。
11. 8 (金)
降雨のため作業中止。現場事務所で水器などの洗浄と一時保存の為の作業を行う。
11. 11 (月)
SR02 大畦土層写真撮影に向けての作業。SX03 の摂取。
11. 12 (火)
SR02 大畦写真撮影後、図面作業に入る。周辺の摂削は一時中断し、土器、木器の洗浄を進める。
11. 13 (水)
SR02 大畦土層断面図作成。
11. 14 (木)
SR02、SX03 土層断面図作成。図面作業終了後、SR02、SX03 大畦の除去に入る。出土した完形土器の記録作業。
11. 15 (金)
SR01・02 の大畦除去。SK02 崩土の除去、整形、記

- 縄文作業。
11. 18（月）
SR02の大畦除去。除去は8割が完了。
11. 19（火）
SR02の大畦除去終了。掘下げ後の壁面崩落対策。
11. 20（水）
空中写真撮影に向けての清掃作業。測量業者による空撮指標の設置。
11. 21（木）
古墳時代遺構完掘段階で空中写真撮影。空撮終了後、地上写真撮影に入る。
11. 22（金）
古墳時代遺構完掘状況写真撮影。写真撮影終了後、壁面などの養生作業。
11. 25（月）
降雨のため、現場事務所にて土器洗浄作業。
11. 26（火）
図面作成。縄文包含層の調査開始。全体の掘削に先行して断面調査を行う。
11. 27（水）
縄文包含層の掘下げ。まず包含層上層を面的に掘下げ、下層上面の遺構確認を行なう方向で作業を進めていく。
11. 28（木）
縄文包含層、調査予定範囲北半部の掘下げ。
11. 29（金）
縄文包含層上層の掘下げ。
12. 2（月）
縄文包含層上層の掘下げ。
12. 3（火）
縄文包含層上層の掘下げ。調査範囲の北半には包含層上層の底面で灰黄色粘土の溜りが認められる。
12. 4（水）
午前、天候不順のため、事務所にて遺物整理。降雨後の処理を終えてから、午後より縄文包含層上層の掘下げ。
12. 5（木）
縄文包含層上層の掘下げ。3層上面で遺物を含む粘土の溜りを複数検出。
12. 6（金）
縄文包含層上層の掘下げ。
12. 9（月）
調査区北東隅のピット断面調査。一部、遺構ではなかったことも確認される。縄文包含層上層の掘下げ。
12. 10（火）
調査区北半のピットの記録作業。縄文包含層下層の掘下げ。土層断面の検討から、縄文包含層1層と2層は一括りで捉えるべきであることを確認。
12. 11（水）
縄文包含層下層の掘下げ。調査区壁面の記録作業。
12. 12（木）
縄文包含層断面及び調査区壁面の記録作成。
12. 13（金）
縄文包含層下層の掘下げ。調査区壁面の記録作業。
12. 16（月）
縄文包含層下層の掘下げ。調査区壁面の記録作業。
12. 17（火）
調査区壁面及び遺構の記録作業。調査区壁面のうちSR02該当部分から遺物を抜き取る。
12. 18（水）
調査区壁面及び遺構の記録作業。重機による埋め戻し開始。調査区南西隅に拡張区を設定。埋め戻しと並行して調査を行う。
12. 19（木）
拡張区の調査。SR02を検出。拡張区全体がSR02内に収まっており、河道の対岸（左岸）は調査区外に位置することを確認。当初調査区の埋め戻しはほぼ終了。
12. 20（金）
拡張区 SR02 の掘削は時間の都合上、部分的にのみ行う。縄羽口、鉄滓が出土。
12. 24（火）
拡張区も含め、埋め戻し終了。
12. 25（水）
調査地の清掃作業。出土遺物の洗浄作業。
12. 26（木）
調査地の整理。全現場作業を終了。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

橿原市は奈良盆地の南部に位置し、北は田原本町・広陵町、東は桜井市、南は高市郡明日香村・同高取町、南西は御所市、西は大和高田市に接している。新堂遺跡の所在する橿原市新堂町は、橿原市域の西辺沿い中央付近に位置しており、調査地点から西に数百mほど移動すると大和高田市域に至る。

橿原市の南～南東部には龍門山地から派生する丘陵地が広がっており、北に向かって緩やかに下降する斜面地形を経て、北に肥沃な沖積地が広がっている。調査地はその沖積地に位置している。調査地から東南東に約2kmの地点には名勝大和三山のひとつ、畝傍山が所在する。

調査地周辺の標高は、盆地の中北部に向かって、おおむね南から北に向かってなだらかに低くなる。調査地周辺における現在の水田面の上面標高は約63～64mである。調査地から東に約600mの距離には曾我川が、西に約1kmの距離には葛城川が、いずれも北流している。曾我川は龍門山地西部に、葛城川は金剛山地に源流をもつ。調査地は現在、この二つの河川の中間に位置する微高地となっている。しかし、河川の位置も時代と共に大きく変化しており、かつては調査地近辺にも河川が存在していたことが現地形の観察や発掘調査によって明らかとなっている。

調査地は北西の新堂集落と南東の東坊城集落の間に位置する耕作地帯であったが、近年は京奈和自動車道建設を筆頭に造成工事が進められており、かつての景観は今まさに大きく変化しつつある。『大和国条里復元図』による調査地の小字名は「折柳」である。

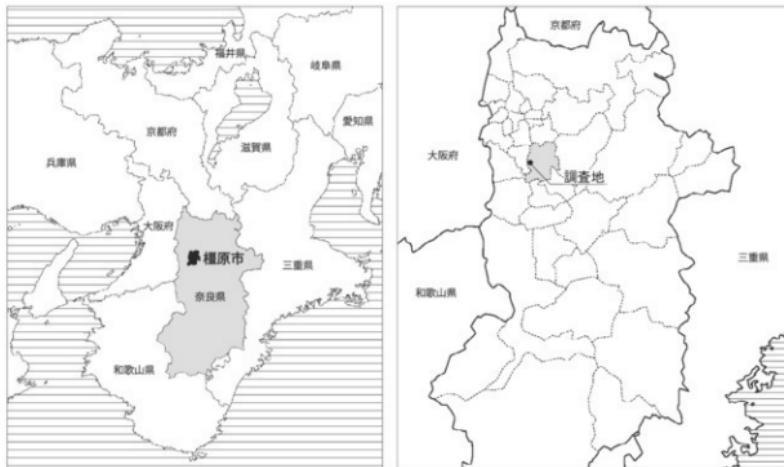


図1 調査地位置図

第2節 歴史的環境

樅原市の西部から南西部にかけての地域は、従来、遺跡が確認されていない地域であったが、京奈和自動車道建設に伴う一連の発掘調査により、路線沿いに新たな遺跡が多数発見されている。路線沿いからさらに周辺への遺跡の広がりが想定される調査成果も挙げられている。得られた成果は主に縄文時代以降の各時代にわたり、奈良盆地南西の低地部における遺跡の様相が大幅に更新されたと言える。調査地周辺は近年の開発行為によって遺跡地図が次々と書き換えられつつある地域である。

調査地の含まれる新堂遺跡の近辺に目を向けると、北に曲川遺跡、南に東坊城遺跡が所在する。これらの樅原市域の西部に位置する遺跡は、曾我川と葛城川に挟まれた平地に立地し、南北約2.0 km・東西約0.8 kmの範囲で南北に並ぶ。なお、京奈和自動車道路線沿いから東西に離れた地域については、現在のところ調査例に乏しく実態は不明である。しかし新堂遺跡の西方一帯など、遺物散布地は複数確認されており、今後、遺跡の範囲がさらに広がっていく可能性も高い。以下に、これらの遺跡の調査成果を軸に調査地近辺における各時代の様相に触れる。

調査地周辺において遺構・遺物の存在が明確になり始めるのは、縄文時代後期以降のことである。曲川遺跡では晩期中葉から末にかけての土器棺墓が約80基検出されている。これは西日本有数の規模である。他、貯蔵穴や住居跡も確認されている。新堂遺跡では本書でも報告を行うように、後期から晩期にかけての遺物が出土している。東坊城遺跡では縄文時代後期後半から晩期の遺物が出土する河川や晩期の土坑の存在が確認されている。遺物については後期前半に遡る土器も含まれる。京奈和自動車道沿線でさらに南に目を向けると、觀音寺本馬遺跡や川西根成柿遺跡で後期以降の遺構が確認されている。觀音寺本馬遺跡では人工的に管理されたと想定される晩期のクリ林も検出されている。また、この周辺の遺跡からは前期および中期の遺物も出土している。

弥生時代には曾我川流域や葛城川流域において多くの遺跡が形成されるようになることが知られている。京奈和自動車道沿線の地域でも前期の大規模水田や環濠集落、中期の方形周溝墓群などが確認されている。その中においては、新堂遺跡の一帯は比較的弥生時代の遺構・遺物が疎な地域であると言える。ただし竪穴建物や土坑などの弥生時代の遺構は少量ながら存在するため、完全な空白であるというわけではない。また、曲川遺跡の北部においては中期の周溝墓群も確認されている。

弥生時代末頃から古墳時代初頭になると、新堂遺跡周辺では遺構・遺物といった活動痕跡が増加し始める。新堂遺跡では、この時期の水田や土坑、溝などが確認されており、遺構からの出土遺物量も多くなる。この時期には河川及びそれに繋がる溝（水路）に設置された井堰も存在し、積極的な土地開発に乗り出していることがうかがえる。遺構は古墳時代前期を通じて見られる。曲川遺跡では前期後半以降、曲川古墳群が形成されていく。曲川古墳群は墳丘が削平されたいわゆる埋没古墳で、一辺10~18 mの方墳10基が検出されている。古墳の築造は中期にかけて続く。

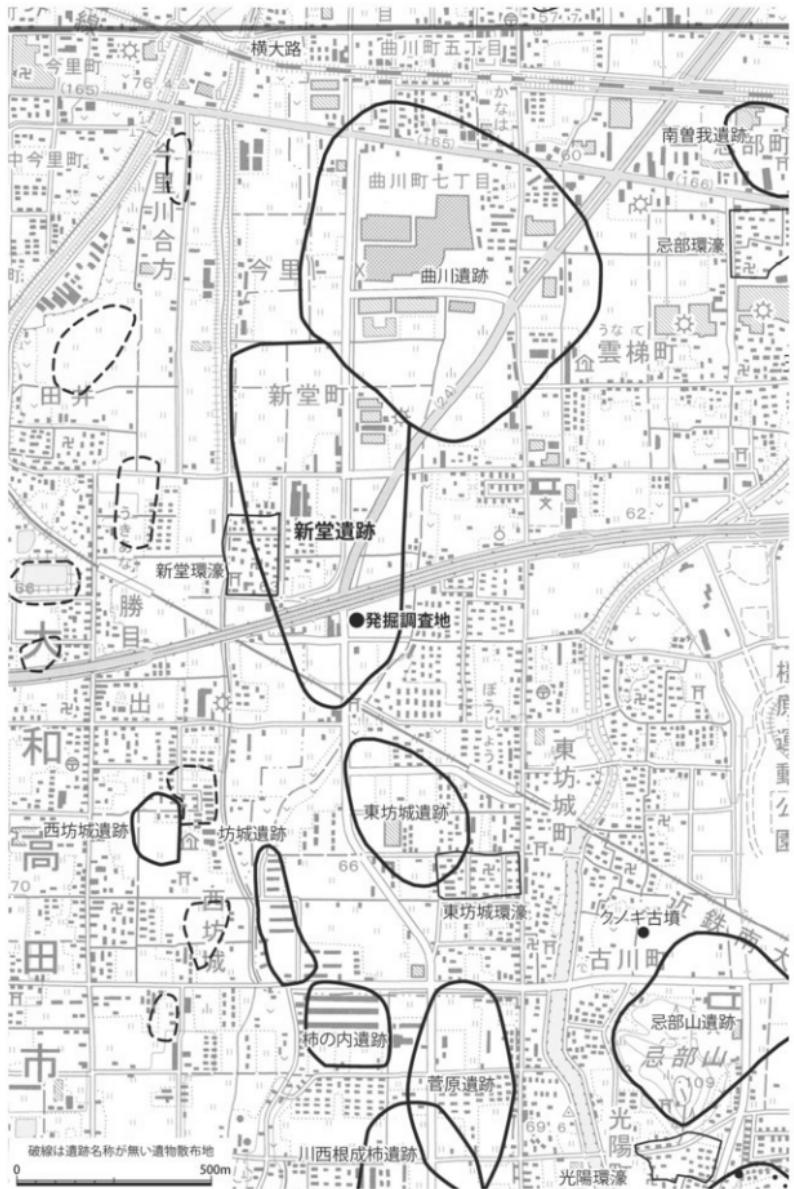
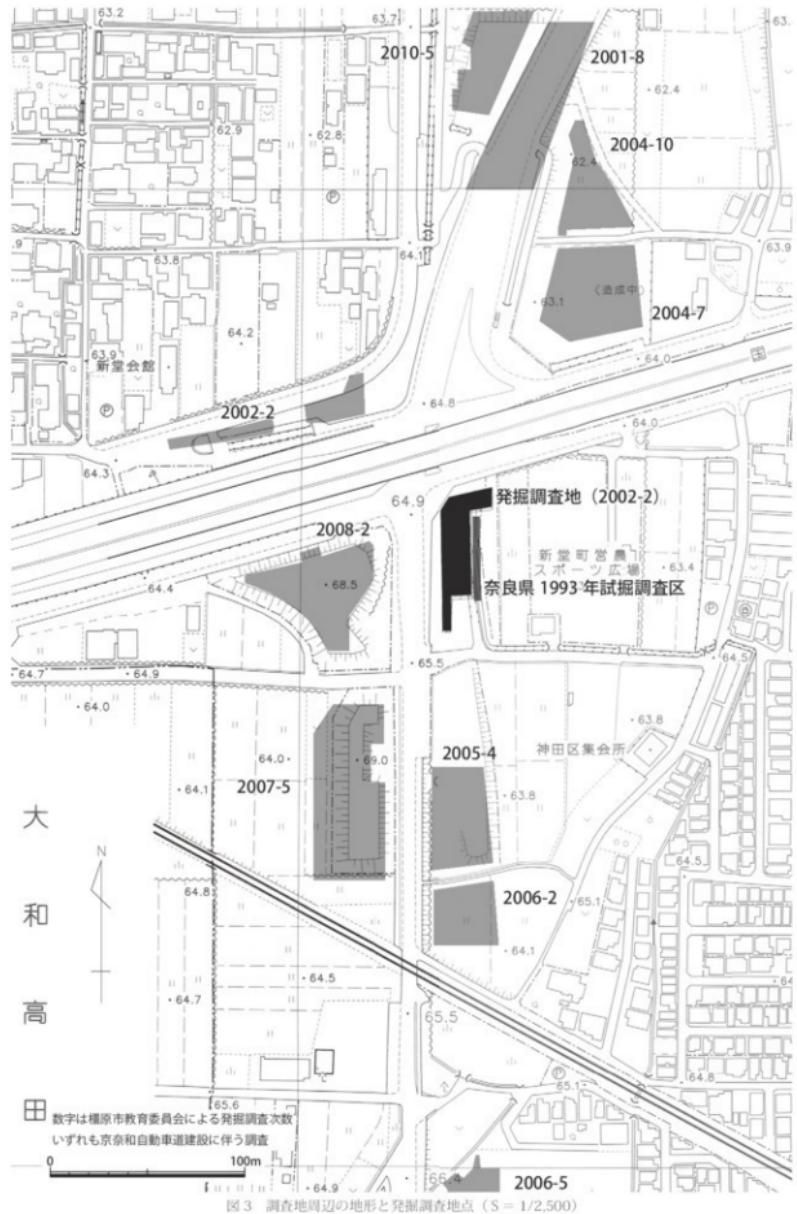


図2 調査地周辺遺跡地図 (S = 1/12,500。遺跡範囲は2015年度当初の内容)



古墳時代中期は調査地周辺での遺跡形成が非常に盛んになる時期である。東坊城遺跡では1991年度の発掘調査において中期の大溝から土師器、初期須恵器、韓式系土器に加え、鉄滓・輪の羽口・砥石といった生産関連遺物や鋳造鉄斧が出土しており、以前から注目されてきた。近年の調査によって新堂遺跡と曲川遺跡からも陶質土器・韓式系土器といった渡来系遺物をはじめとする土器や生産関連遺物、祭祀具などが多数出土し、渡来系遺物を多く含む中期（一部は後期前半まで続く）の集落がこの一帯に展開していることが明らかとなっている。中期の遺構は土坑や河川が主であり明確な建物跡は確認されていないが、遺構からの遺物出土量は多く、近隣に集落の本体が存在する可能性は高いと考えられる。橿原市中央部の四条遺跡周辺や、飛鳥地域の遺跡などとともに、古墳時代の奈良盆地における渡来要素の受容過程を知ることのできる重要な地域と言える。

曾我川の下流域では古墳時代中期後半から後期前半にかけての大規模な玉作り遺跡である曾我遺跡が形成される。曾我川の上流、調査地から南南東に約2kmに位置する新沢千塚古墳群も、この時期に造墓活動の最盛期を迎える。

古墳時代後期後半から古代にかけての時期には、新堂遺跡周辺では遺構の存在が希薄になる。その後、再び遺構が多く確認されるようになるのは12世紀頃である。

新堂遺跡では12世紀頃の区画溝を作り屋敷地の存在が確認されている。その周辺においても12世紀から13世紀前半の井戸や土坑墓が存在している。このような平安時代末から鎌倉時代前半にかけての遺構は曲川遺跡と東坊城遺跡にも存在するが、量は新堂遺跡がもっとも多い。この時期の遺構は新堂遺跡と東坊城遺跡の境界付近を北流する旧河道の左岸沿いで多く検出されている。この河道は発掘調査で確認されているほか、条里地割の乱れ、また堤防状の高台として現地形でも確認することができる。河川の埋没時期は中世であると考えられる。遺構はこの河川との関係の中で築かれたと考えられ、河川堆積土からも平安時代末から鎌倉時代の遺物が出土する。その中には仏画木簡や温石、木製人形などの特徴的な遺物も含まれる。これ以降の時期は、曲川遺跡において室町時代の建物跡がわずかに検出されている程度で、他は耕作地としての利用が主となったようである。

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査の方法

調査区の位置

調査区は敷地（旧奈良県土地開発公社 京奈和自動車道用事務所跡地）の西半に設定している。調査前まで事務所が存在していた敷地の東半は、建物基礎下の広範囲に遺構面まで達する地盤改良工事が行われていることが調査開始時に判明したため、それを避けた敷地西半に調査区を設定することとなった。地盤改良工事は敷地西半でも遺構面付近の深度まで行われており、工事以前の耕作層が調査区壁面で確認できる範囲は調査区の北端付近のみであった。

奈良県立橿原考古学研究所による試掘調査区は、敷地の中央部、今回の調査区の東に接する地点の付近に位置する（図3）。

調査区の形状

南北約55m・東西約15mの南北に長い長方形に、北辺沿いに東に向かって南北約12m・東西約13mの突出部をもつ調査区を設定している。調査の終盤には調査区南西に南北約17m・東西約5mの拡張区を設けている。調査区の合計面積は約1,000m²を測る。

調査の手順

上層遺構面直上まで重機（バックホウ）による掘削を行い、以降の掘削・記録作業は人力で行っている。下層遺構面（古墳時代）の調査を終えた後、調査区の南側約3分の2の範囲において、その下層の縄文時代包含層の掘削および遺構確認作業を実施している。調査の終盤には調査区南西に拡張区を設定し、主として古墳時代河道の調査を行っている。

遺構名

遺構種と遺構番号は、その種別を示す通有の2字のアルファベット、数字の順で組み合わせて記録・報告している。遺構番号は遺構種ごとに、それぞれ1から主に検出順に番号を付与している。遺構名は基本的に調査時のものをそのまま使用して報告を行っているが、本報告段階で一部、遺構種を変更して番号も新たな数字を与えた遺構が存在する。変更を行った遺構については、各遺構の項でその旨を明記している。

写真撮影

写真撮影は各遺構面の検出・完掘状況の他、調査区及び遺構の土層断面や遺物の出土状況など、調査の過程で記録が必要な段階で行っている。

撮影の際に使用したフィルムは、主に4×5インチサイズの白黒フィルムとカラーポジフィルムである。また、バックアップ用に35mmサイズの同フィルムを使用している。

第2節 基本層序

基本層序は以下のとおりである。ただし調査地の大部分の範囲において、宅地造成および建物工事に伴う地盤改良や基礎工の影響（I層）が遺構面（IV層）直上付近にまで及んでいたため、以下の基本層序の全体を断面確認できたのは調査区北辺東半付近のみの非常に限られた範囲である（図4）。そのため、調査区中央以南におけるII～III層の詳細な状況は不明である。なお、IV・V層については調査区南半において遺構面下の断面確認調査を行っている（図6・7）。

I層：現代造成土（上面高は標高約64.6m。厚さ約1.4～1.8m）

II層：耕作土（現代。宅地造成前の耕作面。上面高は約63.2m）

III層：旧耕作土（中世以降の耕作層。厚さ約0.3～0.4m。上面高は約63.1m）

IV層：遺構基盤層（縄文時代後期～晩期の遺物包含層。厚さ0.05～0.30m。上面高は約62.7～62.8m）

V層：地山（上面高は約62.3～62.7m）

I層は調査地全体に広がる造成土である（図4では省略）。奈良県土地開発公社の事務所建設（1993年）に伴う宅地造成時の盛土が主である。宅地造成時に地盤改良が広範囲で施されている。その影響は調査区の大部分で遺構面（IV層上面）付近にまで及んでいる。わずかに調査区北端付近で造成工事前の水田耕作層の状況を確認することができる。

II層（図4-1・2層）は宅地造成前の水田耕作土である。時期は現代である。灰オリーブ色砂質粘土からなる。上面の標高は約63.2mであるが、宅地造成時に上面が若干削平されている。

III層（図4-3～124層）は中世以降の耕作土である。中世から近世にかけての耕作活動の累積によって形成された層である。いわゆる素掘り耕作溝の埋土もここに含まれる。III層上層部分は現代耕作層の床土となる。主として黄褐色・灰オリーブ色・暗灰黄色の砂質土・粘質土・粘土などからなる。中世に遡ると考えられる下層部分には鉄分およびマンガンの沈着が見られる。

IV層（図4-130～144層）は縄文時代後期から晩期の遺物包含層である。同時に弥生時代から中世までの遺構基盤層である。上面の標高は約62.7～62.8mである。主として暗黄灰～黄灰色・暗褐色の砂質土・砂質粘土からなる。IV層は調査区南半ではIV-①層（黄褐色砂質粘土）とIV-②層（黄灰色砂質土）に分かれ（図6）。IV-②層は調査区南半にのみ存在する。調査区南側が厚く、最大で約0.5mを測る。調査区北端では層全体が東から西に向かって緩やかに傾斜する。調査区北東隅付近では後世の耕作によって削平されたためか、非常に薄くなる。IV-①層からは後期中葉を中心に、後期前葉～後葉、晩期後半の遺物が出土する。数的には晩期後半の遺物は非常に少ない。IV-②層からは後期前葉～中葉の遺物が出土する。

V層（図4-145～192層）は縄文時代後期以前の堆積層である。遺物を含まない。主として灰色・黄灰色系の微砂質粘土・砂、暗オリーブ灰色シルトからなる。上面の標高は約62.3～62.7mである。調査区中央から南の範囲では、IV層を除去してV層上面で遺構の確認作業を行っている。

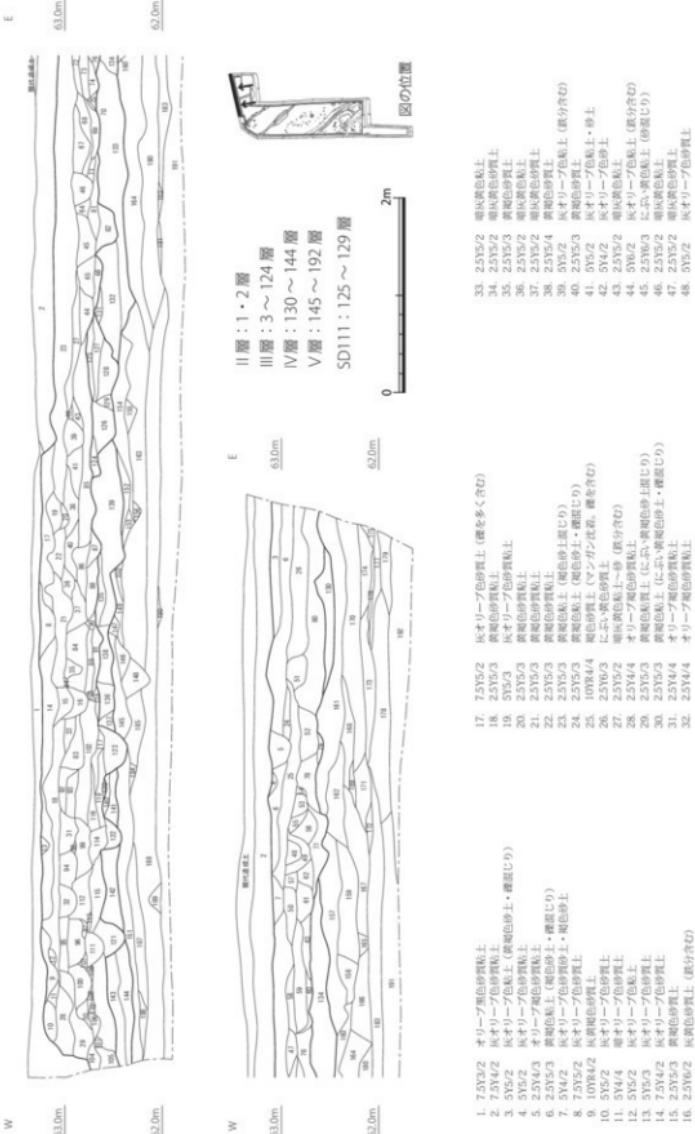


図4 調査区北壁 土層断面① (S = 1/50)

99	2,574/4	黄褐色地面上。(壁面) (壁面)
97	2,705/3	黄褐色地面上。(壁面) (壁面)
98	2,574/2	にぶい、黒褐色の質上。
99	2,575/3	灰褐色の質上。
100	2,575/3	灰褐色の質上。
101	2,574/3	オリーブ褐色地面上。
102	2,575/3	にぶい、黒褐色の質上。
103	107R4/3	黄褐色地面上。(マンガン沈じり)
104	2,575/3	黄褐色地面上。(赤い、黒褐色色地上。)
105	2,574/3	にぶい、黒褐色地面上。
106	2,574/3	黄褐色地面上。
107	107R4/3	にぶい、黒褐色地面上。
108	2,575/2	灰褐色地面上。
109	2,575/2	灰褐色地面上。
110	107R4/3	にぶい、黒褐色地面上。(マンガン沈じり)
111	2,575/3	黄褐色地面上。
112	2,574/4	オリーブ褐色地面上。
113	315/1	灰褐色地面上。(赤い)
114	2,574/2	灰褐色地面上。
115	2,575/3	灰褐色地面上。
116	2,575/2	オリーブ褐色地面上。
117	315/1	灰褐色地面上。
118	315/1	灰褐色地面上。
119	2,574/2	灰褐色地面上。(マンガン多量沈じり)
120	315/1	灰褐色地面上。
121	107R4/3	灰褐色地面上。
122	2,574/2	灰褐色地面上。
123	2,573/3	灰褐色地面上。
124	2,573/3	灰褐色地面上。
125	2,573/2	灰褐色地面上。
126	2,573/2	灰褐色地面上。
127	2,573/3	灰褐色地面上。
128	2,573/2	灰褐色地面上。
129	2,573/2	灰褐色地面上。(壁面) (壁面)
130	2,574/2	灰褐色地面上。
131	107R4/3	灰褐色地面上。(壁面) (壁面)
132	2,574/2	灰褐色地面上。
133	2,575/3	灰褐色地面上。
134	2,574/2	灰褐色地面上。
135	2,574/2	灰褐色地面上。
136	2,574/2	灰褐色地面上。
137	2,574/2	灰褐色地面上。
138	2,574/2	灰褐色地面上。
139	2,575/3	灰褐色地面上。
140	107R4/3	にぶい、黒褐色地面上。
141	2,574/2	灰褐色地面上。
142	107R4/3	灰褐色地面上。
143	2,574/2	灰褐色地面上。
144	107R4/3	灰褐色地面上。(壁面) (壁面)

図5 調査区北壁 十層断面②

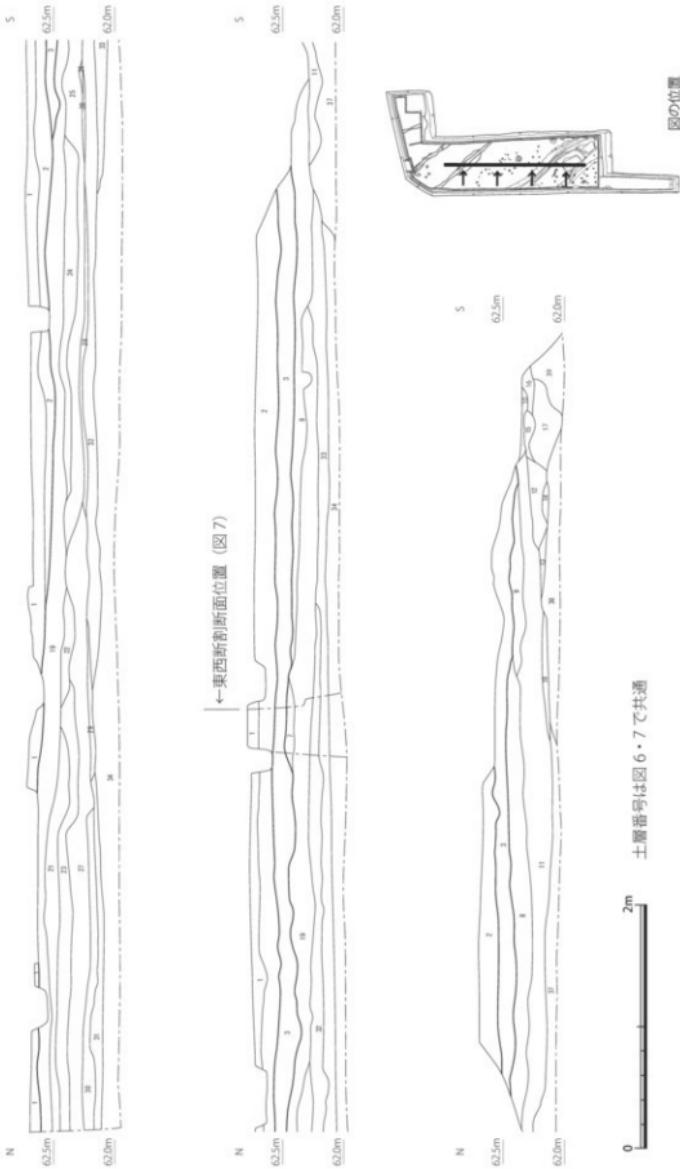
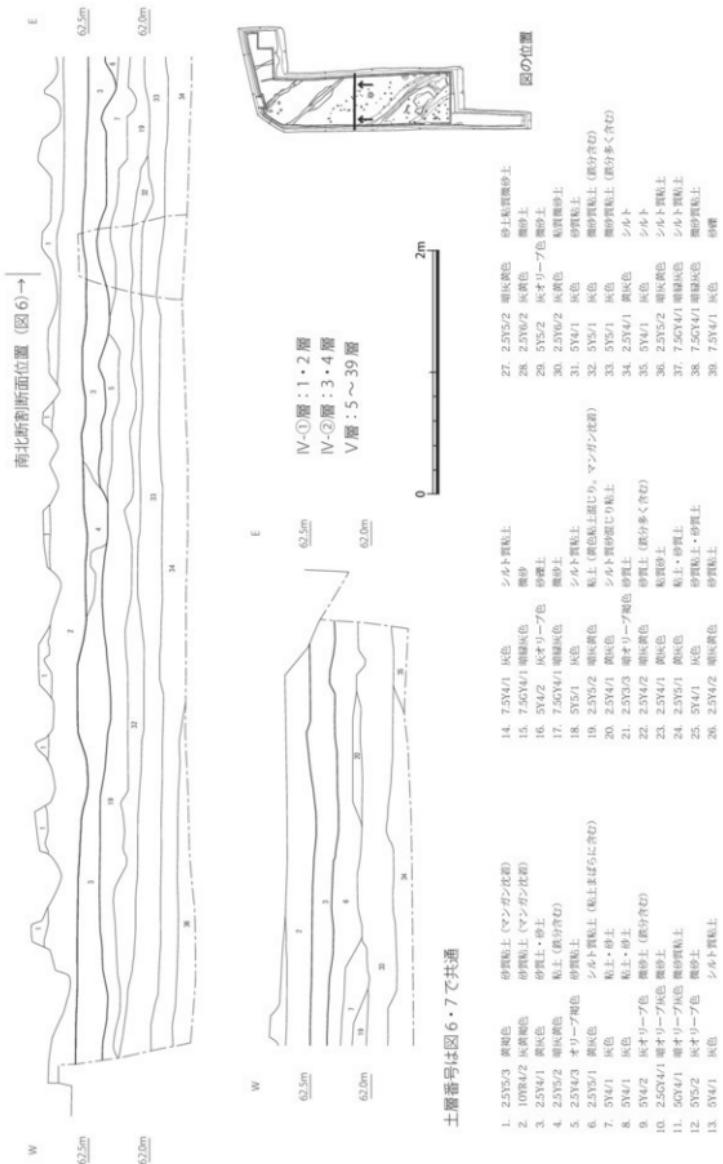


図6 IV・V層断面調査区 南北土層断面 ($S = 1/40$)



第3節 遺構

遺構は大きく3時期に分かれる。便宜上、上層遺構・中層遺構・下層遺構としてまとめる。いずれも検出面はIV層上面である。

上層遺構（図8）

耕作活動によって形成されたと考えられる、幅約0.2~0.4mの素掘り溝群である。

溝の方向は東西方向と南北方向がある。溝は調査区のほぼ全域に密に存在する。調査区西側中央付近には空白があるが、これは後世の削平の結果であると考えられる。

東西方向よりも南北方向の溝のほうが新しい遺構である。南北方向の溝は条里に沿ってほぼ正方位に伸びるものと、座標北に対して東に5~10°程度振れるものとがある。この両者では正方位の溝のほうが新しい遺構である。

溝の断面形はいずれもU字形である。検出面からの遺構の深さは、正方位の南北溝が約0.05~0.15m、東に振れる南北溝が約0.2~0.3m、東西溝が0.1m前後である。

上層遺構からは瓦器、土師器、須恵器が出土している。いずれも細片が中心である。正方位の南北溝からの出土量がもっとも多い。中層・下層遺構に由来すると考えられる遺物も含まれる。

上層遺構の時期は出土遺物から、13世紀以降を中心とすると考えられる。

中層遺構（図9）

中層遺構は、上層の耕作溝群よりも古く、下層の古墳時代遺構よりも新しい時期の遺構群である。遺構の時期は12世紀後半~13世紀前半を中心であると考えられるが、小規模な遺構が大半を占め出土遺物も限られることから具体的な時期比定が困難な遺構も多く、本来は上層遺構もしくは下層遺構と同時期の遺構を含んでいる可能性がある。

中層遺構には掘立柱建物・塀、土坑、溝、ピットがある。

SBO1は調査区南東隅に位置する南北2間の掘立柱建物である。建物西辺を検出している。掘方一辺約0.6~0.7mの平面方形の柱穴が南北に3基並ぶ。建物規模は南北6.0mを測り、建物の東への広がりは不明である。掘方の残存深度は最大でも約0.25mと平面規模に比して浅く、上部はかなり削平されている可能性がある。掘方埋土からの出土遺物には瓦器と土師器の細片がある。

SAO1とSAO2は調査区南端に位置する2条の掘立柱列である。直径約0.3~0.4mの円形ピットが東西方向に並ぶ。どちらも柱列の軸は東でやや北に振れており、併行する。ただし柱間距離にばらつきがあり、柱の通りも乱れが見られることから、一連の構造物ではない可能性も残るが、ここでは比較的簡素な塀のような施設であった可能性を指摘しておく。SAO2東のSP02からは13世紀の瓦器片が出土している。

SK01は調査区南西部に位置する土坑である。遺構の西半は調査区外に存在する。直径約3m以上の円形土坑であると考えられる。断面の形状は弧を描き、深さ約0.4mを測る。底面から12世紀後半の瓦器塊（図24-№7）が出土している。

SK20は調査区南西の拡張区で検出した土坑である。SK01と同様、西半部は調査区外に位置する。

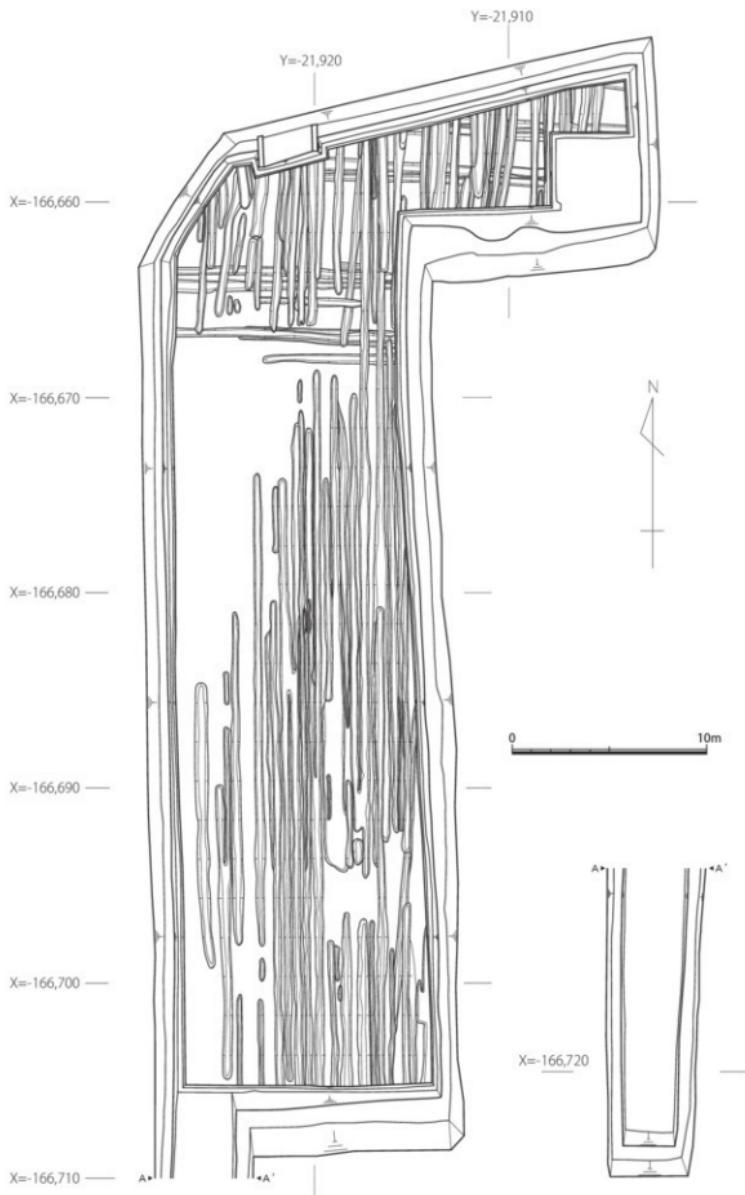


图 8 上层遗构平面图 ($S = 1/250$)

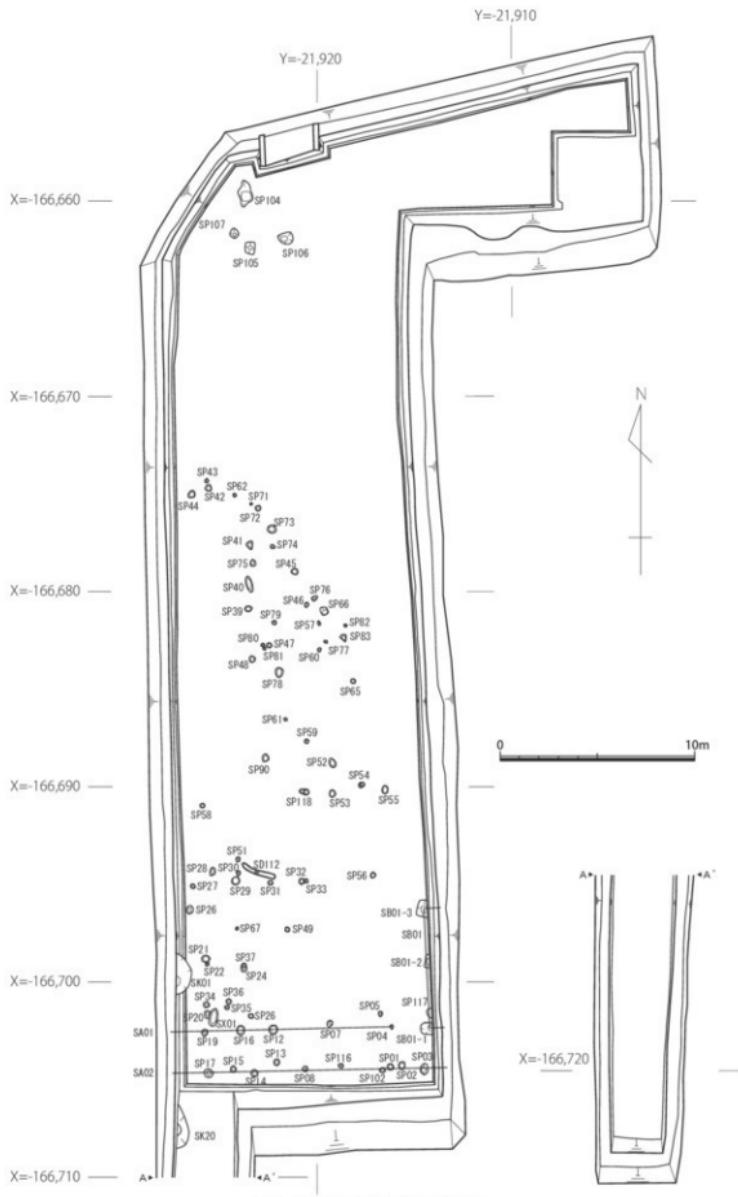


図9 中層造構平面図 (S = 1/250)

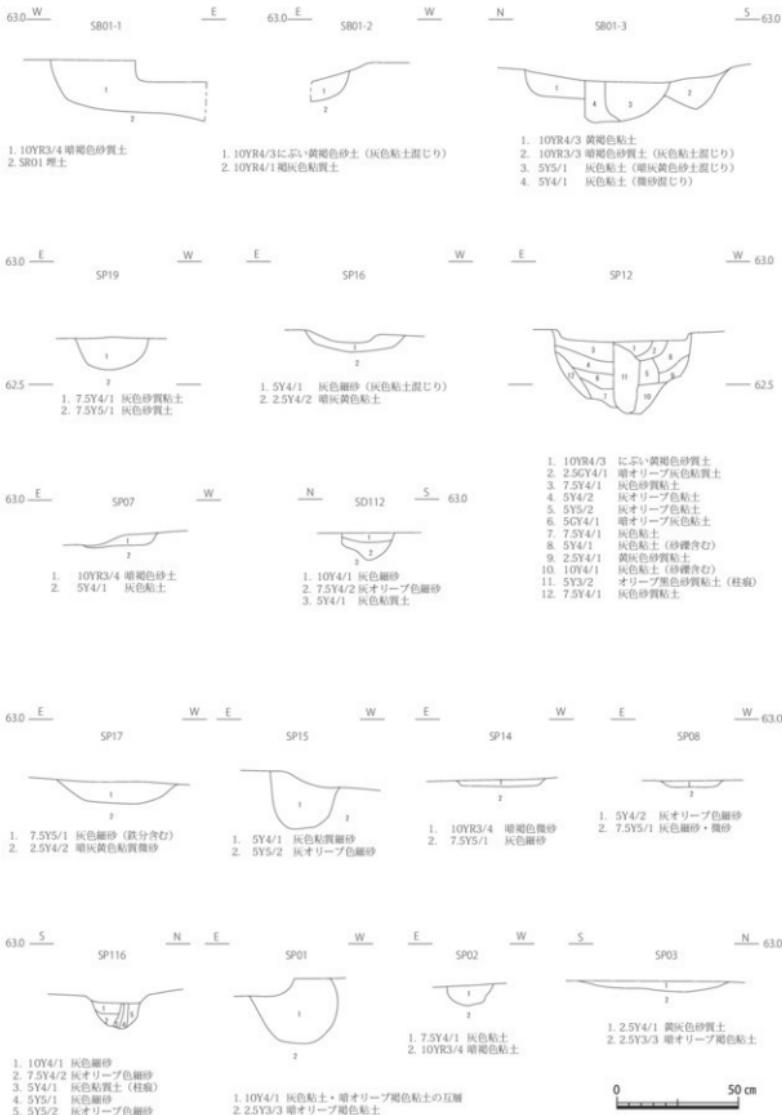


図 10 中層遺構 挿立柱建物・堀・溝 土層断面 (S = 1/20)

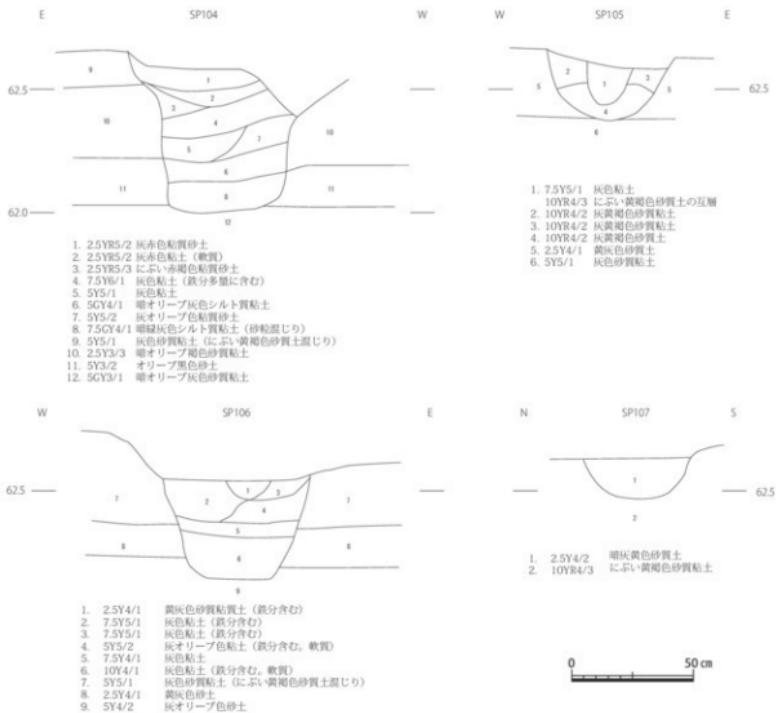


図 11 中層遺構 調査区北西大型ピット 土層断面 ($S = 1/20$)

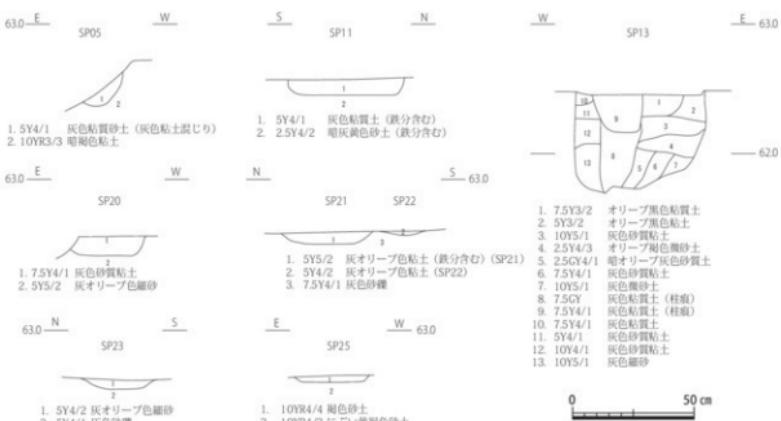


図 12 中層遺構 ピット 土層断面① ($S = 1/20$)

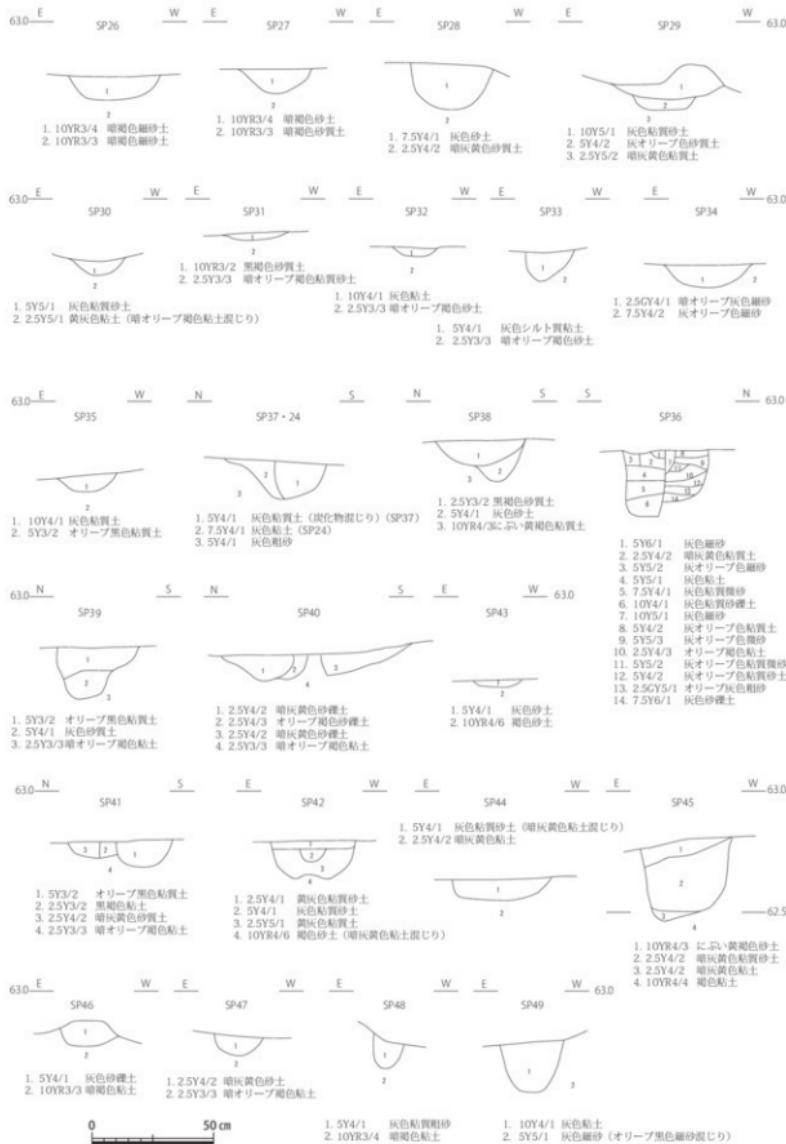


図 13 中層遺構 ピット 土層断面② (S = 1/20)

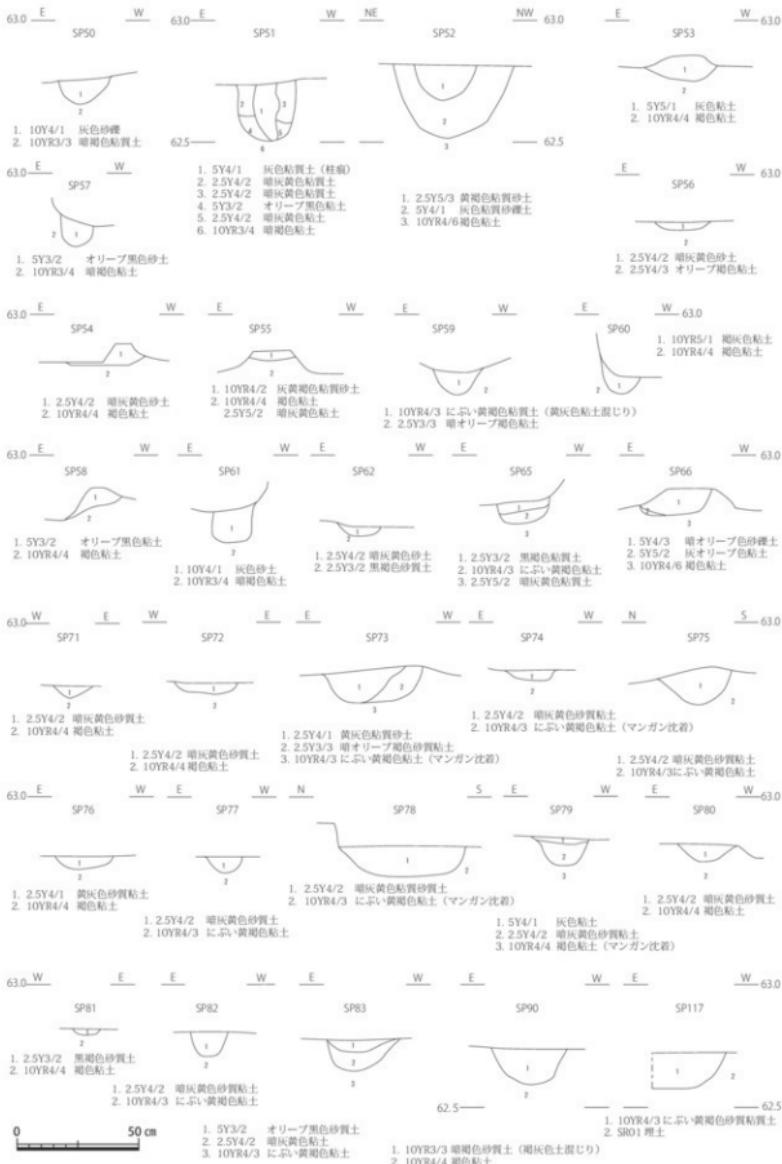


図 14 中層遺構 ピット 土層断面③ (S = 1/20)

平面形は楕円形と考えられ、検出長は南北約2.0mを測る。瓦器片と種子1点が出土している。

SD112は調査区南半に位置する素掘りの溝である。長さ1.9m、幅約0.2m、深さ約0.2mを測る。東西方向に伸び、西側がやや北に屈曲する。出土遺物には瓦器と土師器の細片がある。

この他、ピットが複数存在する。ピットの分布範囲には偏りがあり、おむね調査区南部・中央部・北端部に分かれて存在する。調査区南部および中央のピットは直径約0.3m未満の不整形なものが中心である。出土遺物は少なく、図化できるものとして、SP24から出土した瓦器塊、SP65から出土した縄文土器片がある。縄文土器は遺構基盤層であるIV層に含まれていた遺物と考えられる。調査区南部の遺構は下層の古墳時代河道や溝よりも後に構築された遺構であることが明白である。一方、調査区中央付近のピット群は下層遺構との重複関係が無い。むしろ河道・溝の隣に広がる空閑地にあたる位置に集中して存在しており、下層遺構と同時期の遺構である可能性もある。これらのピットからの出土遺物は少量の土師器や縄文土器の細片ばかりで、時期を明確にし難い。調査区北端には比較的大きいピット4基(SP104~107)が存在する。SP105とSP106は平面丸形で一辺約0.5m以上、深さ約0.3~0.5mを測る柱穴である。SP104は平面不整形、直径約0.6m、深さ約0.6mを測る。断面の形状はコの字形で上部は開く。その規模から、これらのピットが建物を構成する可能性を考慮し、周辺の精査を行っているが他に遺構は確認されなかった。SP104とSP105からは土師器の細片が出土している。

下層遺構(図15)

古墳時代の遺構を下層遺構とする。下層遺構には河道、溝、土坑などがある。遺構の時期は、前期の土坑1基を除くと中期後半から後期である。

河道(SR01・02)は調査区の南西に位置する。古墳時代の遺物が多量に出土しており、この調査における主要遺構に位置付けられる。なお、自然河道に対する遺構記号としてNRを用いることが多いが、河道に人為的な行動の痕跡が残る点や、調査時の記録およびその後の公表時にSRを用いている点を踏まえ、ここでは調査時から用いているSRをそのまま使用することとする。

SR02は調査区の南部で東岸(右岸)を検出した河道である。周辺地形や埋土の堆積状況から北流することが確認できる。調査区南西の拡張区は、SR02西岸の確認を主たる目的として設定したものであるが、西岸は検出されず、調査区のさらに西まで河道が続くことを確認している。河道の幅は8m以上である。調査区保護の制限上、河道の底面までは確認できていない。深さは約1.9m以上を測る。

調査区西壁(図17)および流路に直交する形で設定した大畦断面(図19)で堆積状況を確認している。遺構検出面に接する最上層付近では微砂層の堆積が多く確認される。これは河道埋没の最終段階における窪地部分への溜まりであると考えられる。概して河道堆積層の上層部分ほど微砂層が多く、下層ほど径の大きな砂礫層が増える傾向にある。

SR02からは土器、木製品をはじめとする有機質遺物、鉄滓などが出土している。遺物量は調査全体の半数以上を占める。土器が非常に多く、土師器、須恵器、韓式系土器、陶質土器、製塩土器がある。木製品は手斧の柄、泥除け、帯などの製品の他、板状・棒状の加工木、燃えさしなどが存在する。その他、有機質遺物では種子類(モモ・ヒヨウタンなど)、獸骨、昆虫の羽などがある。

土器は完形もしくはそれに準じる状態で遺存しているものが多く存在する。また、遺物は表面に流

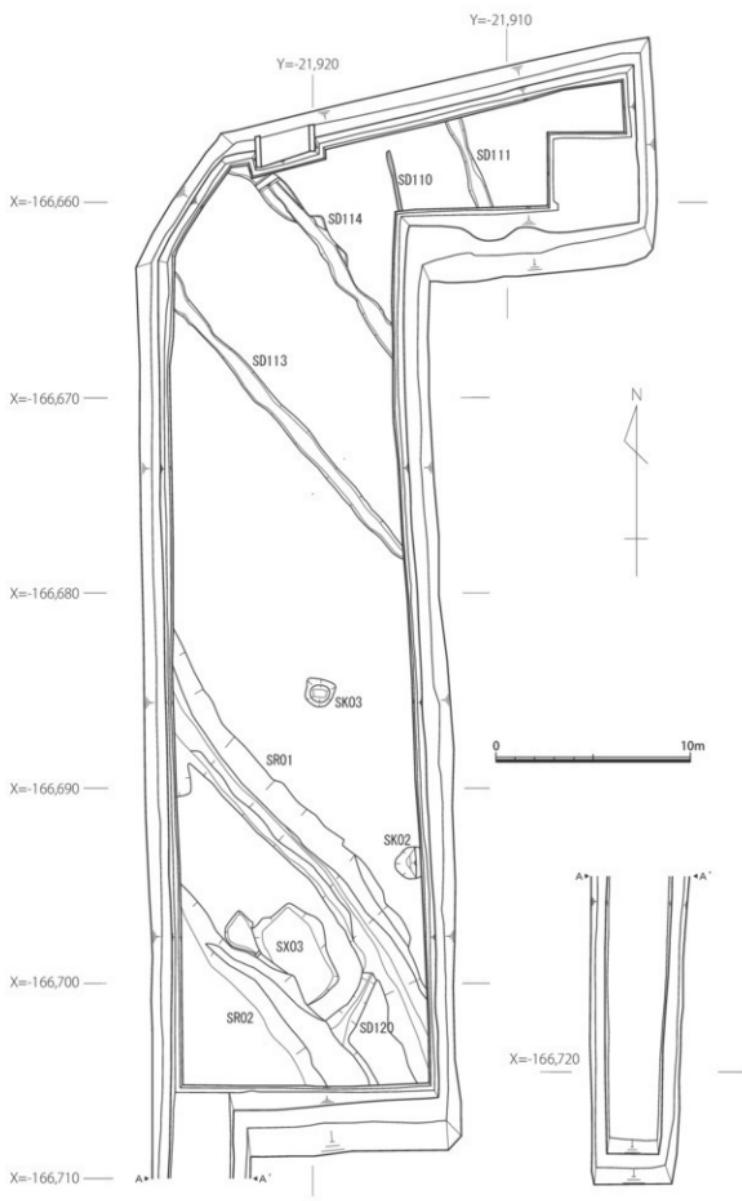


図 15 下層造橋平面図 (S = 1/250)

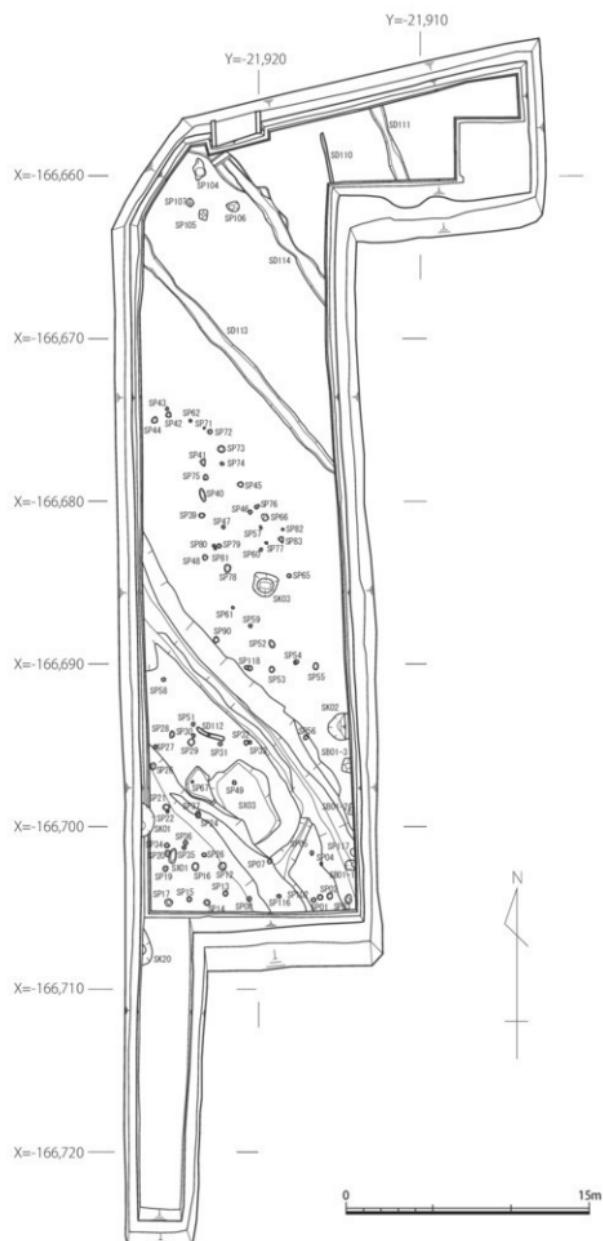


図16 中・下層遺構配置図 (S = 1/300)



図 17 調査区西壁 遺構面下土層断面① (S = 1/50)

1. 2535/4	黄褐色土上(樹根じり)	113. 73Y5/2	灰土色面地シルト質土上
2. 2535/3	赤土色・オーブ色土上(樹根じり)	114. 51Y6/2	灰土色・オーブ色土上
3. 515/2	赤土色・オーブ色土上(樹根じり)	115. 51Y6/1	灰土色・オーブ色土上
4. 515/1	赤土色面地土上(樹根じり)	116. 51Y6/1	灰土色・オーブ色土上
5. 515/1	赤土色面地土上(樹根じり)	117. 51Y6/1	灰土色・オーブ色土上
6. 514/2	赤土色面地土上(樹根じり)	118. 51Y6/1	灰土色・オーブ色土上
7. 513/2	赤土色面地土上(樹根じり)	119. 24Z6/41	灰土色・オーブ色土上
8. 23D5/1	黄褐色土上(樹根じり)	120. 51Y6/2	灰土色・オーブ色土上
9. 515/1	赤土色土上	121. 23Y5/2	黄褐色面地
10. 514/1	赤土色土上	122. 31Y5/2	黄褐色面地
11. 23D5/3	黄褐色土上(樹根じり)	123. 31Y5/2	黄褐色面地
12. 23D5/3	黄褐色土上(樹根じり)	124. 31Y6/1	黄褐色面地
13. 23D5/3	オーブ面地土上(樹根じり)	125. 31Y6/1	黄褐色面地
14. 515/1	赤土色面地土上(樹根じり)	126. 31Y5/2	黄褐色面地
15. 514/2	赤土色面地土上(樹根じり)	127. 31Y6/1	黄褐色面地
16. 514/2	赤土色面地土上(樹根じり)	128. 31Y6/1	黄褐色面地
17. 515/1	赤土色土上	129. 31Y5/2	黄褐色面地
18. 515/1	赤土色土上	130. 31Y6/2	黄褐色面地
19. 515/1	赤土色面地土上	131. 31Y5/2	黄褐色面地
20. 23D5/2	黄褐色面地土上	132. 31Y5/2	黄褐色面地
21. 23D5/2	黄褐色面地土上	133. 24Z6/31	黄褐色面地
22. 23D5/2	黄褐色面地土上	134. 31Y6/1	黄褐色面地
23. 23D5/2	黄褐色面地土上(樹根じり)	135. 31Y6/1	黄褐色面地
24. 23D5/2	黄褐色面地土上(樹根じり)	136. 31Y6/1	黄褐色面地
25. 23D5/2	黄褐色面地土上(樹根じり)	137. 31Y5/1	黄褐色面地
26. 23D5/2	黄褐色面地土上	138. 73Y5/2	灰土色面地
27. 23D5/2	黄褐色面地土上	139. 51Y6/1	黄褐色面地
28. 23D5/2	黄褐色面地土上	140. 51Y6/3	黄褐色面地
29. 516/1	赤土色面地土上	141. 31Y6/2	黄褐色面地
30. 514/2	赤土色面地土上	142. 31Y6/1	黄褐色面地
31. 23D5/2	黄褐色面地土上	143. 24Z6/41	黄褐色面地
32. 23D5/2	黄褐色面地土上	144. 23Y5/1	黄褐色面地
33. 73Y5/2	明褐色面地	145. 24Z6/51	オーブ面地
34. 23Y5/2	明褐色面地(真分木くむ)	146. 50Y5/1	オーブ面地
35. 515/1	赤土色面地土上(樹根じり)	147. 10Y4/1	灰土色面地
36. 515/1	赤土色面地土上(樹根じり)	148. 31Y5/2	黄褐色面地
37. 514/1	赤土色面地土上(樹根じり)	149. 73Y5/41	黄褐色面地
38. 514/1	赤土色面地土上	150. 73Y5/41	黄褐色面地
39. 515/1	赤土色面地土上	151. 50Y5/1	黄褐色面地
40. 515/2	オーブ面地	152. 50Y5/1	黄褐色面地
41. 515/2	オーブ面地土上	153. 50Y5/1	黄褐色面地
42. 23Y4/2	明褐色面地土上(樹根じり)	154. 50Y5/1	黄褐色面地
43. 514/1	赤土色面地土上(樹根じり)	155. 24Z6/31	黄褐色面地
44. 10Y3/24	明褐色面地土上	156. 24Z6/51	黄褐色面地
45. 23Y5/2	明褐色面地土上(樹根じり)	157. 50Y5/1	黄褐色面地
46. 516/1	赤土色面地土上(樹根じり)	158. 50Y5/1	黄褐色面地
47. 515/1	赤土色面地土上(樹根じり)	159. 73Y5/41	黄褐色面地
48. 23Y4/2	明褐色面地土上(樹根じり)	160. 23Y5/2	黄褐色面地
49. 31Y5/2	明褐色面地(真分木くむ)	161. 10Y4/4	灰土色面地
50. 514/2	赤土色面地土上	162. 10Y4/4	灰土色面地
51. 514/1	赤土色面地土上(樹根じり)	163. 10Y4/5	灰土色面地
52. 23Y5/2	明褐色面地(真分木くむ)	164. 10Y4/3	灰土色面地
53. 515/2	赤土色面地土上(樹根じり)	165. 10Y4/3	灰土色面地
54. 10Y3/44	赤土色面地土上	166. 10Y4/3	灰土色面地
55. 23Y5/2	明褐色面地	167. 10Y4/2	灰土色面地
56. 23D5/2	明褐色面地	168. 23Y5/4	灰土色面地
57. 23D5/2	明褐色面地(真分木くむ)	169. 23Y5/4	灰土色面地

図 18 調査区西壁 遺構面下土層断面②

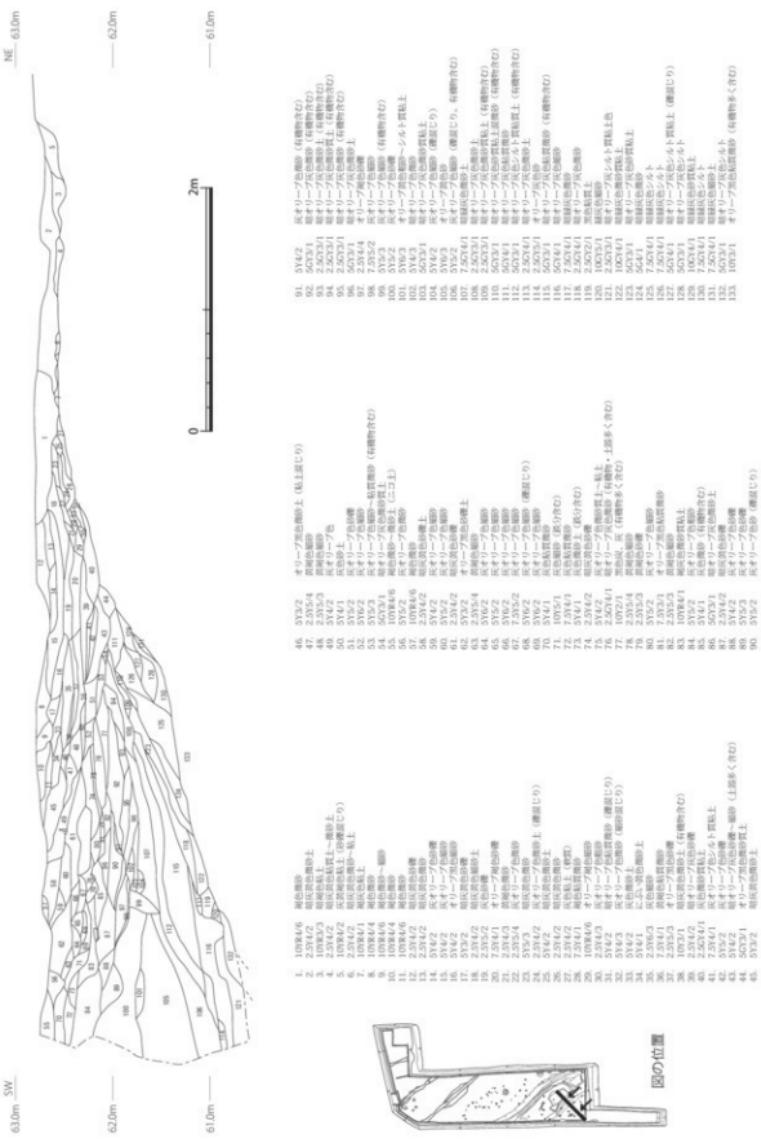


図 19 S02・SX03 大塙土層断面 ($S = 1/40$)

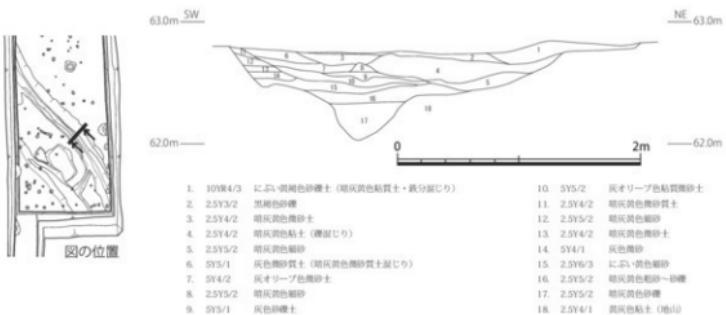


図 20 SR01 土層断面 (S = 1/40)

水の影響をあまり受けっていないものが多い。遺物の時期は古墳時代中期後半から後期にかけての範囲が中心である。数的には中期後半から後期初頭の遺物が特に多い。

遺物の出土位置は、平面的には調査区拡張前のほぼ全域に広がって出土している。これは河岸から約 6 m 以上の範囲となる。層位的には、検出面から約 0.6~0.8 m の深度の微砂を主体とする層（図 19~19~98 層付近）からの出土量が非常に多い。この付近には炭化物をはじめとする有機物を多く含む層が互層状に堆積している。出土状況や遺物の状態から、これらの遺物は比較的水流が安定した時期に意図的に河の中に置かれた、あるいは河岸から投げ込まれたものが多く含まれていると考えられる（写真図版 16・18~20）。

河道の右岸は縄文時代遺物包含層（IV 層）を侵食しており、遺構の斜面で縄文土器が散見される。

SR01 は調査区南半に位置し、SR02 右岸と併走するような形で北西流する流路である。幅約 2.2~3.2 m を測り、左岸北端は南に溢れ出す形となる。断面は左右に段を有し中央部が深く落ち込む形状である。深さは中央で約 0.8 m を測る。SR02 右岸とは約 2.4~4.5 m の距離が離れている。

出土遺物は古墳時代中期後半から後期の土器を中心とする。数的に後期の土器を中心とする点が SR02 と異なる。遺構の時期と位置関係から、SR02 から分かれた支流に手を加えた遺構であると考えられる。あるいは導水路として人口的に掘削された溝である可能性もあるが、SR02 との直接の分岐点が調査区外に位置するため、正確には不明である。

SX03 は SR02 の右岸に接する直径 5 m 程度の不整形な落ち込み状遺構である。深さは最大で 0.2 m である。SR02 と SR01 の間に位置する。暗黄灰色微砂土が堆積し、古墳時代中期後半から後期前半の土器が出土している。SR02 の右岸が侵食されて広がった溜まりの部分であると考えられる。作業場として利用していた可能性なども考えられる。

溝は 5 条ある（SD110・111・113・114・120）。なお過去の報告では、SD113 は SR03、SD114 は SR04 として示しているが、本報告では溝として新たな遺構番号に改めている。

SD110・111・113・114 は調査区北半に位置する直線的な溝である。他の古墳時代遺構埋土との

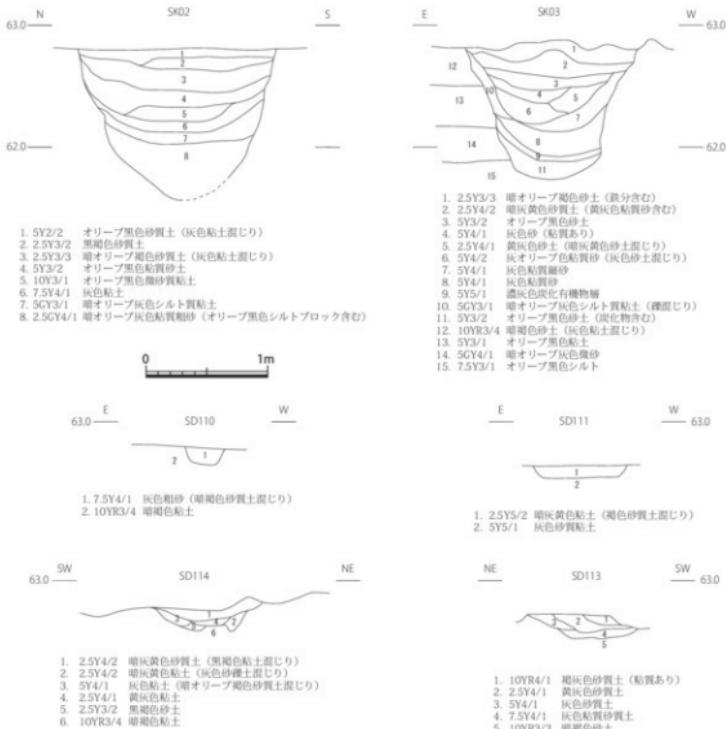


図 21 下層遺構 土坑・溝 土層断面 (S = 1/40)

共通性や少量ながら出土した土器の細片から、これらの溝の時期は古墳時代中期から後期であると考えられる。溝の方位は、南東—北西方向の SD113・114 と南南東—北北東方向の SD110・111 とに分かれる。溝の規模は前者のほうが大きい。また、前者の方位は SRO1・SRO2 右岸と概ね併行する。SD110 は幅約 0.3 m、深さ約 0.15 m を測る。小規模な溝であり、遺構の北側は後世の耕作溝によって削平されたと考えられる。SD111 は幅約 0.4～0.8 m、深さ約 0.1 m を測る。溝の幅は中央部が狭くなる。断面は台形状を呈する。SD113 は幅約 0.6～0.9 m、深さ約 0.2 m を測る。検出総長は約 18 m である。溝の幅のぶれが小さい直線的な溝である。南東端で東に屈曲するようなラインを見せる。SD114 は幅約 0.6～1.4 m、深さ約 0.25 m を測る。直線的な溝ではあるが両岸の乱れは SD113 も大きい。

SD120 は調査区南東隅、SRO2 と SRO1 を繋ぐ位置に掘られた溝である。SRO2 から SRO1 への導水路であると考えられる。幅約 0.7～1.5 m、深さ約 0.3 m を測る。取水口と考えられる SRO2 側 (南西側) の幅が広い。溝の底面付近から古墳時代後期の土器師器が出土している。

土坑は2基ある（SK02・03）。

SK02は調査区南半の東壁沿いで検出している。直径約1.6mの円形土坑である。断面形は砲弾形で、深さは約1.3mである。最下層から古墳時代前期の土師器壺の完形品が2点並んで出土しており（図版33下）、この時期の井戸であると考えられる。

SK03は調査区中央に位置する、直径約1.5mの不整円形の土坑である。断面形は下半がU字状、上半は外に開く。深さは約1.1mである。埋土下半（図21-9層）からは炭化した纖維質植物が5～10cm厚で面的に広がって出土している。その他、土師器・須恵器の小片が出土している。古墳時代中期もしくは後期の遺構であると考えられる。

縄文時代遺物包含層

遺構基盤層であるIV層は、縄文時代後期および晩期の遺物包含層である。上～下層遺構の埋土からもIV層に由来すると考えられる縄文時代の遺物が出土している。IV層からの出土遺物には縄文土器、土製品、石器、サヌカイトの剥片などがある。

調査時には縄文時代の遺構が存在する可能性を考え、調査区南半においてIV層を除去したV層上面で遺構の検出作業を行っている。その結果、顕著な遺構は存在しないことを確認している。V層上面の小規模な落ち込みに、包含層と同質の黄色系粘土が溜まっている状況を5ヶ所で確認したのみである。この溜まりからは比較的多くの遺物が出土する傾向にある。

IV層は調査区南半ではIV-①層（上層。黄褐色砂質粘土）とIV-②層（下層。黄灰色砂質土）に分かれる。IV-②層は調査区南半にのみ存在する。IV-①層からは縄文時代後期前葉～後葉および晩期後半の遺物が出土している。数的には後期中葉が最も多く、後期前葉・後葉が次ぐ。晩期後半の遺物はわずかである。IV-②層からは後期前葉～中葉の遺物が出土する。IV-①層よりも後期前葉の遺物の比率が高い。

第4節 遺物

出土した遺物には、石器、土器（縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・韓式系土器・陶質土器・瓦器・製塩土器など）、鍛冶関連遺物、木器、有機質遺物などがある。

出土遺物の量はコンテナ約85箱分である。量的に古墳時代の土師器・須恵器が最も多く、出土遺物の半数以上を占める。また、完形品およびそれに準じる資料も多い。次いで縄文土器の数が多いが、いずれも破片資料であり、土器の全体像が分かる資料は無い。

遺構別では、古墳時代の河道であるSR02からの出土が最も多く、SR02と繋がる遺構であるSR01およびSX03からの出土量がこれに次ぐ。

以下に各遺構、層序ごとに出土遺物について述べる。

上層遺構（図22・23）

上層遺構は中世以降の耕作溝である。上層遺構からの出土遺物には、石器、縄文土器、土師器、須恵器、瓦器がある。いずれも細片が主であり、全体像の分かる資料は小型の遺物に限られる。瓦器と土師器の一部以外は、下層の遺構及び包含層に由来する遺物が、耕作活動によって巻き込まれたものと考えられる。

図22・23に示した資料は正方位に沿う南北方向の耕作溝群から出土している。これらの溝群よりも古い、北で東にやや振れる南北溝群と東西溝群からの出土遺物は量が非常に少ないが、細片資料から判断できる限りでは正方位の南北溝群との明確な時期差は見出しづらい。

1～3はサヌカイトの石鐵で、いずれも凹基無莖鐵である。1は長さ1.7cm・幅1.2cm・厚さ0.25cm・重さ0.31gを測り、今回出土した石鐵の中では最も小型である。2は長さ2.9cm・幅1.9cm・厚さ0.32cm・重さ1.60gを測り、縁辺の屈曲が明瞭で基部の抉りが深い。3は長さ2.8cm・幅1.9cm・厚さ0.30cm・重さ0.78gを測る。基部の抉りは比較的浅いが、かえしの端部は鋭い。この他、上層遺構からはサヌカイトの剥片も出土している。

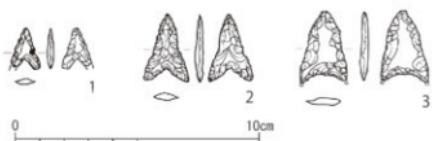


図22 上層遺構出土 石器 (S = 1/2)

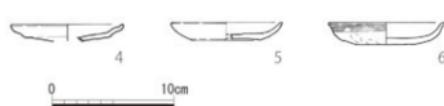


図23 上層遺構出土 土器 (S = 1/4)

4・5は土師器の皿である。いずれも明橙色を呈する。4は口径9.0cm・器高1.4cmを測る。口縁部に軽い面取りを施す。5は口径8.9cm・器高1.4cmを測る。内外面とも丁寧なナデ調整で仕上げ、底部には糸切り痕が残る。

6は瓦器の皿である。口径9.3cm・器高1.8cmを測る。端部は外反する。外面上半に細かいヘラミガキを施す。

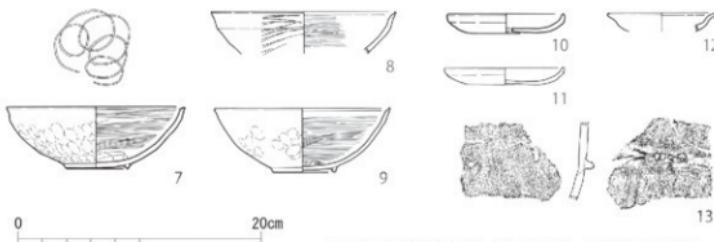


図 24 中層遺構出土 土器 ($S = 1/4$)

中層遺構（図 24）

中層遺構は 12~13 世紀頃を中心とする時期の遺構で、柱穴を含むピット、土坑、溝がある。上層遺構とほぼ同時期の遺構が含まれる可能性がある。中層遺構からの出土遺物には縄文土器、土師器、須恵器、瓦器がある。

図 24 は中層遺構出土遺物のうち比較的残存状況が良い資料である。土坑およびピットからの出土資料である。

7~9 は瓦器塊である。7 は SK01 から出土した完形品である。内面は全体にヘラミガキを施す。外面下半には指頭圧痕が多数残り、上部には横方向のナデ調整を施す。8 は SP24 から出土した上半部の破片である。内外面ともにヘラミガキを施すが、外面は間隔と方向が乱雑である。9 は SP02 から出土し、全体の 6 割が遺存する。内面全体と見込みにヘラミガキが施される。

10~12 は土師器の皿である。10・11 は SK20 から出土している。いずれもにぶい黄橙色を呈し、全体を丁寧なナデ調整で仕上げる。口縁は上方に立ち上がる。12 は SP36 から出土した口縁部の破片である。口縁の形状は屈曲がゆるやかな、「て」の字状である。色調は 10・11 と同様ににぶい黄橙色を呈する。

13 は SP65 から出土した縄文土器片である。外面には刻み目を施した貼り付け突帯がある。突帯の一部は落削している。

下層遺構（図 25~39）

下層遺構の時期は古墳時代である。今回の調査でもっとも遺物の出土量が多い時期である。下層遺構からの出土遺物には古墳時代の須恵器、土師器、韓式系土器、陶質土器、石製品、鍛冶関連遺物、木製品などがある。この他、河道（SR01・02）からは少量ながら縄文時代および弥生時代の土器や石器も出土している。

SRO2 出土遺物（図 25~34）

SRO2 は今回の調査で遺物出土量が最も多い遺構である。石製品、須恵器、陶質土器、土師器、韓式系土器、製塩土器、輪羽口、木製品、獸骨、種子類が出土している。出土遺物の時期は古墳時代の中期後半から後期前半が中心で、数的には中期末頃が主である。一部、中期前半の上器も含まれる。

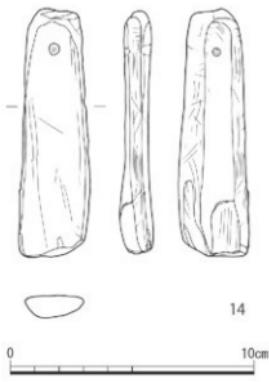


図 25 SR02 出土 石製品 (S = 1/2)

その他、少量ながら弥生時代および縄文時代に遡る土器や石器の細片も出土している。出土遺物のうち遺存状況の良い資料を図示している(図 25~34 -No. 14~136)。

遺物の出土位置では、遺構検出上面より約 0.4~1.0 m の深度(標高 61.9~62.5m 付近)からの出土が多い。これらの地点からの出土遺物には完形品及びそれに準じる遺物が多く含まれる(写真図版 18~20)。

14 は炭化物層内から出土した扁平な棒状石製品で、砥石として用いられた可能性がある。両面に約 1.5~2.8 cm 幅の平坦面があり、非常に平滑に磨かれている。幅が広い方の面は中央部に向かって窪む。上部に直径約 3 mm 大の孔が両面から穿たれているが貫通はしていない。重さは 50.58g を測る。

15~50、53~62 は須恵器である。須恵器の中にはいわゆる初期須恵器の範疇に含まれる資料も存在する。51・52 は陶質土器である。

15~23 は壺蓋である。15 は口径 12.2 cm・器高 4.3 cm を測る。頂部を欠くが、わずかに平坦な面をもつと考えられる。肩部は稜が明瞭である。16 は口径 13.0 cm・器高 4.5 cm を測る。肩部の上にやや太く深い沈線が巡る。17 は口径 13.0 cm・器高 5.4 cm を測る。ヘラケズリ、ナデ調整ともにロクロによる強い回転痕が残る。18 は口径 14.2 cm・器高 4.6 cm を測る完形品である。口縁端部外面は全体にハケ調整が施される。19 は復元口径 14.4 cm・器高 3.3 cm を測るが、全体に歪みの大きな破片資料であり、数値は変化する可能性がある。18・19 は形状や法量などから、古墳時代後期の遺物であると考えられる。20 は口径 13.8 cm・器高 4.8 cm を測る完形品である。外面には焼成時に融着した別個体の剥離痕が 2ヶ所にあり、まだら状の自然釉などの付着物も多い。21 は口径 14.2 cm・器高 5.4 cm を測り、約 8 割が遺存する。外面に回転ヘラケズリを施す際に砂礫を引き摺って生じた溝が非常に目立つ。22 は口径 14.6 cm・器高 5.2 cm を測る。肩部の下に幅 3 mm のにぶい凹線が巡る。23 は口径 14.6 cm・器高 4.4 cm を測る。胎土中には炭化物が混ざる。

24~43 は壺身である。24 は口径 10.7 cm・器高 4.5 cm を測る完形品である。底部外面中央にはメ字状のヘラ記号がある。また、体部外面には朱色の塗着物が見られる。25 は口径 12.5 cm・器高 5.8 cm を測り、約 5 割が遺存する。底部外面にヘラ記号が存在するが、一部は欠失している。26 は口径 11.8 cm・器高 5.2 cm を測る完形品である。色調は他の個体よりも濃い灰色を呈する。体部外面には全体に釉が付着する。27 は口径 11.3 cm・器高 5.3 cm を測る。口縁端部の段は低い位置に浅く存在する。28 は口径 10.4 cm・器高 6.0 cm を測る。体部上半の膨らみが大きい。29 は口径 10.8 cm・器高 4.7 cm を測る完形品である。成形は全体に丁寧であるが焼成は不良で、ほぼ全体が浅黄橙色を呈する。30 は口径 11.0 cm・器高 5.3 cm を測る。31 は口径 10.4 cm・器高 4.7 cm を測る。30・31 は全体の約 5 割が遺存する。32 は口径 10.4 cm・器高 5.7 cm を測る完形品で、今回出土した壺身の中でもっとも小型である。胎土中には 1~2 mm 大の小礫が目立つ。33 は口径 12.0 cm・器高 5.5 cm を測る、ほぼ完形品である。受部内側の溝が深い。34 は口径 11.4 cm・器高 5.3 cm を測る。外周寄りのヘラケズリが強めに施されている。35 は口径 12.8 cm・器高 5.0 cm を測る。36 は口径 9.2 cm・器高 4.9 cm を測る。

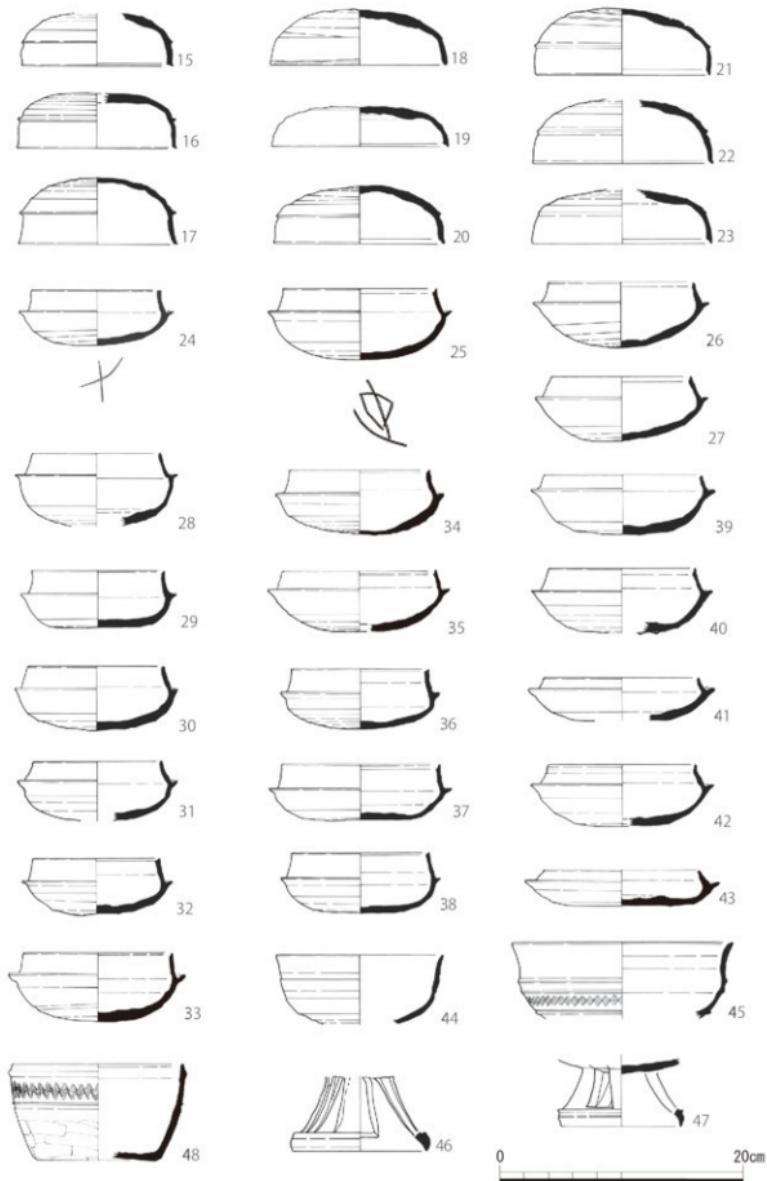


図 26 SR02 出土 土器① (S = 1/4)

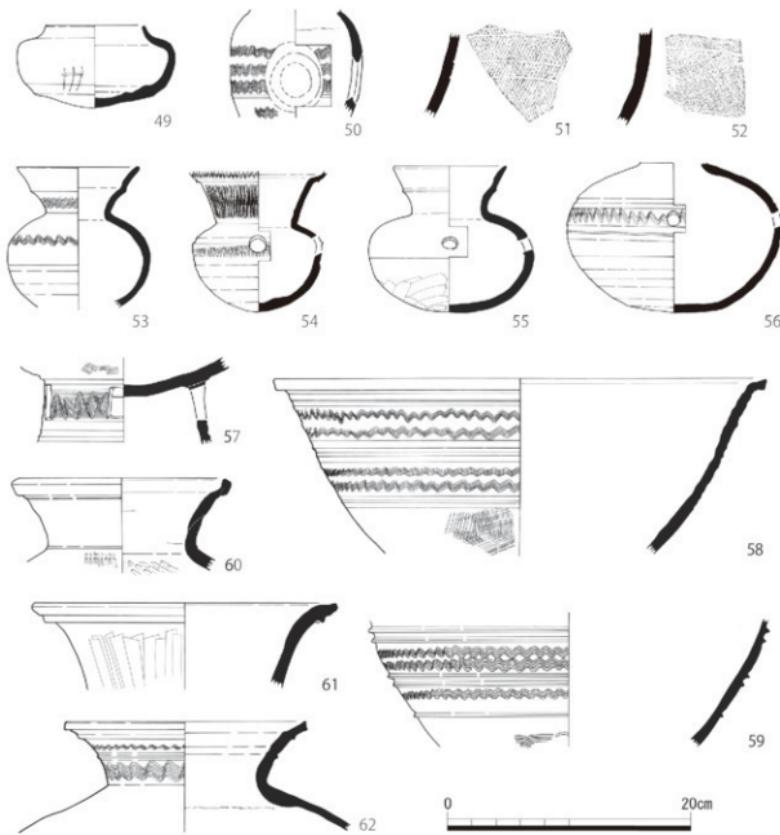


図27 SR02出土 土器② (S = 1/4)

口縁部高に比して体部高が低く、やや古手の様相を示す。37は口径12.8cm・器高4.5cmを測る完形品である。底部は平坦である。38は口径11.3cm・器高4.9cmを測るほぼ完形品である。焼成がやや不良で外面は淡灰色、内面は赤灰色を呈する。39は口径12.8cm・器高4.8cmを測り、約3割が遺存する。底部中央はヘラケズリに削り残しが見られる。40は口径12.0cm・器高5.2cmを測る。底部に他個体の剥離痕が残る。41は復元口径12.6cm・器高3.5cmを測る。42は口径12.0cm・器高5.0cmを測る。口縁端部は細く上方に立ち上がる。43は口径12.6cm・器高2.8cmを測る。全体に扁平な形状である。

44～47は高環である。44は無蓋高環の環部である。体部のヘラケズリ・ナデの境に生じた稜が、口縁部下の稜と同様の形状を呈しており、あたかも二段口縁であるかのように見える。45は無蓋高

坏の环部である。口径 17.8 cm と、やや大型である。体部外面には波状文が施される。46・47 は高环の脚部である。46 は破片資料であるが、台形の透かしが 3 方向にあったと考えられる。47 は脚部が完存しており、方形 3 方向透かしを有する。脚部高は 46 よりも低い。

48 は塊で、把手が付属していたと考えられる。約 4 割が遺存する。体部下半と底面にはケズリが施されている。ケズリにロクロは用いていない。

49 は短頸壺である。蓋と合わせて焼成されたようで、頸部周辺は色調が異なる。体部下半にはヘラケズリが強く施されている。底部中心が突出しており、座りは悪い。体部外面に卅字状のヘラ記号がある。

50 は樽形甌あるいは瓶類の体部と考えられる破片である。頸部の剥離部分が遺存しており、剥離面を正面に向けた状態で図化を行っている。体部には波状文が並行して施されている。断面の色調は、瓶類にしばしば認められる淡赤灰色を呈する。

51・52 は陶質土器と考えられる破片資料である。いずれも甌の体部と考えられ、外面に縄蓆文タキを有する。内面にはナデ調整を施す。色調は 51 が灰色、52 がぶい灰色混じりの赤灰色である。

53～56 は甌である。53 は全体の約 4 割が遺存しており、壺である可能性もある。細い頸部に直線的に聞く口縁をもつ。体部と頸部にそれぞれ波状文を施す。色調は全体に淡赤灰色を呈す。54 は頸部と口縁部に細かい波状文、体部中央に列点文を施す、全体に精緻な作りの甌である。55 は体部下半にケズリの痕がわずかに残るが、全体に丁寧なナデ調整を施している。今回出土した甌の中では最も古いと考えられる。56 は口頸部を欠くが、大型の体部は完存する。底部にはやや広めの平坦面がある。

57～59 は器台である。57 は頸部の破片で、脚部上端で直径 13.0 cm を測る。上端部では 6 方向に透かしを有すると考えられる。色調から、58・59 とは別個体である。58 は坏部の破片である。外面上半には計 4 組の波状文、下半にはタキが施される。59 は坏部の破片で、外面上半には波状文、下半にはいわゆる組紐文が施される。文様はいずれも彫りが深く明瞭である。

60～62 は甌の口縁部である。60 は頸部が外反し、口縁端部は上方に立ち上がる。内面には粘土紐の痕が残る。61 は全体に釉が付着する。外面には縱方向のケズリが施される。62 は体部への口縁部の貼り付けが確認できる。

63～118 は土師質の土器である。大半は土師器であるが、一部に韓式系土器である可能性をもつ資料を含む。韓式系土器については、その都度、言及する。

63～72 は坏である。全体にナデ調整で仕上げを行うが、外面下半もしくは内外面にケズリの痕が残る個体も多い。63 は復元口径 12.0 cm・残存高 4.4 cm を測る。口縁端部はわずかに外に折れる。器壁は上半部が他の坏よりも薄い。64 は口径 12.4 cm・器高 4.8 cm を測る。口縁はほぼ真っ直ぐ立ち上がり、端部は内側に面をもつ。65 は口径 13.6 cm・器高 5.4 cm を測る。底部外面には径約 4 mm・深さ約 2 mm の不整形な窪みが 2ヶ所に存在する。66 は口径 12.8 cm・器高 4.0 cm を測る完形品である。67 は口径 12.8 cm・器高 5.0 cm を測る。表面の磨滅が激しく、詳細な調整は不明である。68 は口径 12.8 cm・器高 5.5 cm を測る完形品である。口縁には内側に幅 8 mm の面をもつ。外面下半のケズリは粗い。底部外面の中央には黒斑が残る。69 は口径 12.7 cm・器高 4.7 cm を測る完形品である。口縁はわずかに内湾する形状である。70 は口径 13.2 cm・器高 4.8 cm を測る。外形はきれいな塊形を描く。

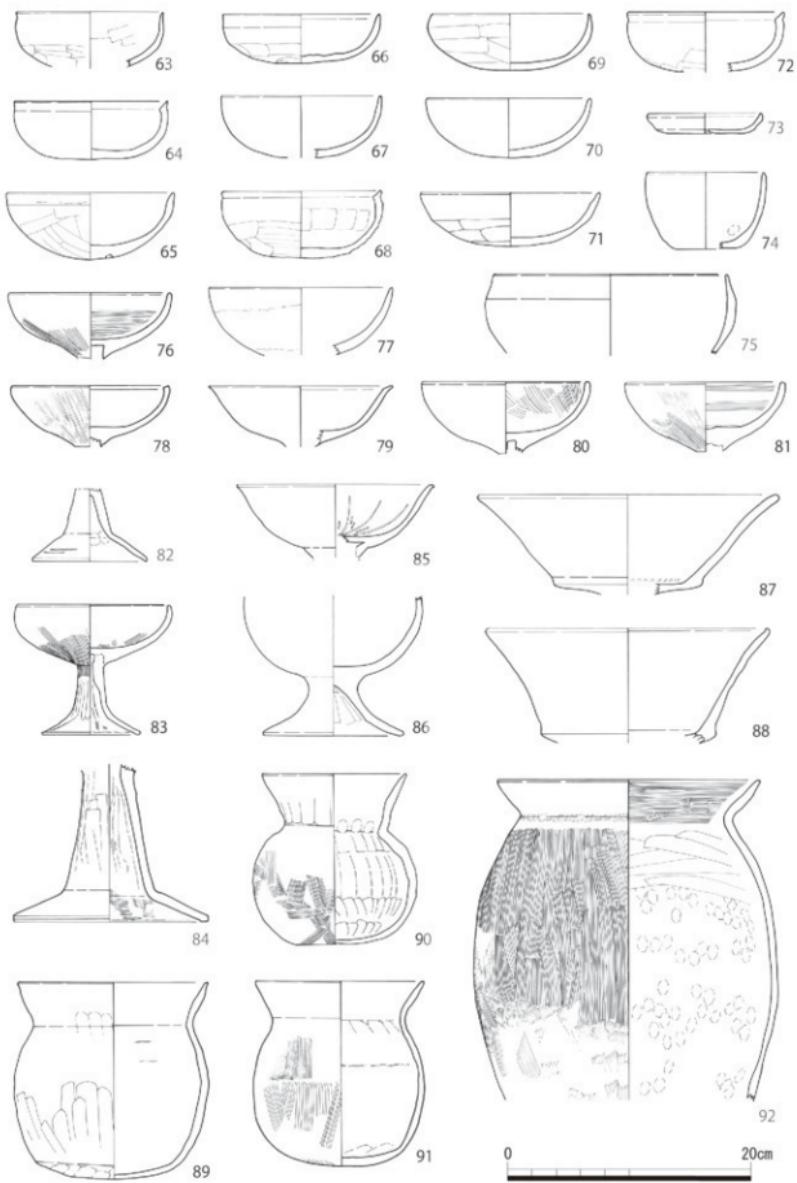


図28 SR02 出土 土器③ (S = 1/4)

71は口径 14.6 cm・器高 4.4 cmを測る。72は口径 12.8 cm・器高 4.8 cmを測る。口縁の形状は 68 と同様である。

坏の色調は大きく 2 種に分かれる。63・64・68・69・71 は明るい橙～黄橙色を呈し、65～67 は黄褐色を呈する。70・72 は両者がグラデーション的に混ざり合う。

73 は口径 9.1 cm・器高 1.6 cm の小型の皿である。底部には指頭圧痕が残る。

74 は塊である。全体をやや粗いナデ調整で仕上げる。体部は丸みを帯びるが、底面は平らに作り出す。75 は鉢であると考えられる。復元口径 18.8 cm を測る。肩部は外側に薄く粘土を貼り付けて肥厚させているようで、一部に剥離痕が認められる。

76～88 は高坏である。76 は塊形高坏の坏部である。内外面の広範囲に黒斑がある。内面には横方向のミガキが施される。差し込まれていた脚部がそのまま抜け落ちた状態で出土している。77 は塊形高坏の坏部である。外面には粘土紐痕が残る。78 は塊形高坏の坏部である。口縁端部はやや丸みを帯びた面を有し、やや内傾する。外面には放射状にハケ調整を施す。79 はわずかに外反する坏部である。下端は脚部との接続部に向かって厚くなる。80 は塊形高坏の坏部である。口縁端部はやや厚い。表面の磨滅の為、全容は不明であるが内外面に薄く朱が塗られていたと考えられる。81 は塊形高坏の坏部である。外面には放射状に強いハケ調整を施し、上部はナデ調整で仕上げる。内面には横方向のミガキを施す。82 は高さ 6.0 cm のやや小型の脚部である。裾部は上方に向かってわずかに膨らむ形状である。83 は脚部と坏部が別個に出土したが、合わせると完形品となる塊形高坏である。口径 12.2 cm・器高 10.6 cm を測る。脚部を坏部底に接続、周間に粘土を貼り付けた後に、脚部側から内面に棒状の刺突を加えて両者の接合を仕上げている。外面は脚上部から坏部下半にかけてハケ調整を施す。坏部内面はハケ調整の後、強めの回転ナデ調整を施す。脚部内面にはしづり痕や裾部の粘土を内面に折り返した痕がそのまま残る。84 は脚部で、残存高 12.9 cm を測る大型の高坏である。残存部の上端から坏部が広がると考えられる。成形時のしづり痕が外面にもわずかに残る。85 は坏部の破片である。全体の形状はわずかに外反する。内面中央から幅約 2 mm の太いヘラミガキが放射状に施される。86 は塊形高坏である。坏部上端を欠くが、口縁端部がわずかに欠けているだけと考えられる。表面の調整は磨滅の為、不明である。脚内部の形状は山形を呈する。87 は大型高坏の坏部である。復元口径 24.2 cm・坏部内面の深さ 7.2 cm を測る。坏底部外面には稜をもつ。坏部は端部にかけてわずかに外反する。内外面ともにナデ調整で仕上げる。坏底部にはミガキを施す。88 は大型高坏の坏部である。復元口径 22.6 cm・坏部内面の深さ 8.7 cm を測る。上半部は外反し、口縁端部は内側に小さくつまみ上げる。内外面をナデ調整で仕上げるが、成形時の指押さえによる凹凸が外面に残る。

90 は直口壺である。頸部下の稜は不明瞭である。体部外面には細かなハケ調整を施す。内面にはケズリ痕や指頭圧痕が残る。

89 はほぼ完形の甕で、口径 15.4 cm・器高 16.1 cm を測る。底部はわずかに丸みを帯びるもの、体部の形状は平底鉢に近い。内外面をナデ調整で仕上げるが、外面にはケズリの痕が残る。91 は口径 13.5 cm・器高 15.1 cm を測る完形品の甕である。全体の形状は概ね 89 と同様である。体部外面には縱方向のハケ調整を施す。

92 は長胴甕である。体部中央より上部が遺存しており、口径 21.5 cm・残存高 26.1 cm を測る。下半部を欠くが、体部中央よりやや上に最大径が位置すると想定される。直線的に伸びる口縁部は中ほ

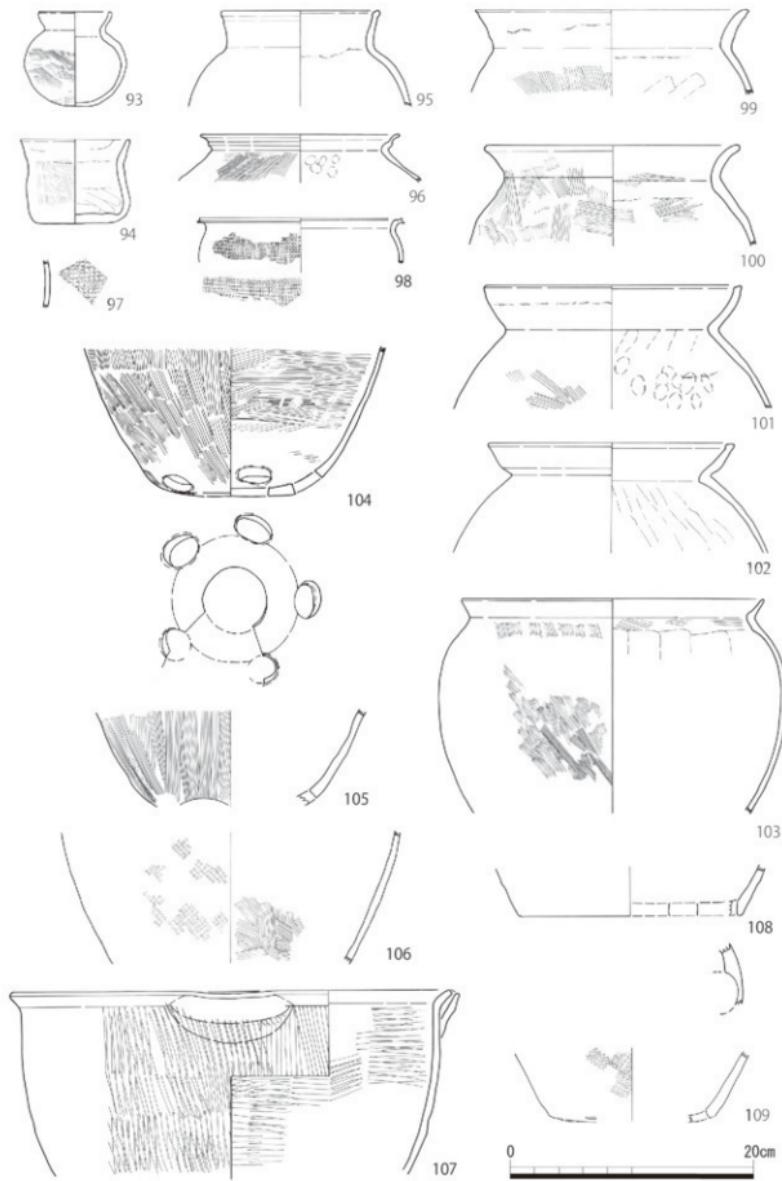


图 29 SR02 出土 土器④ (S = 1/4)

どが最も厚く、端部は丸く取める。外面には幅約 1.2 cm を一単位とする縦方向のハケ調整を施す。頸部付近より上はナデ調整で仕上げる。内面は、口縁部に横方向のハケ調整、肩部付近にケズリ痕、体部中央より下には指頭圧痕が認められる。

93 は小形の壺である。完形品である。形状は全体に丸みを帯びる。外面には細かなハケ調整やわずかにケズリの痕が残るが、内外面とも全体に平滑に仕上げられている。

94 は平底鉢である。作りは全体に粗く、内面下半はほぼ未調整のまま残される。

95 は直口壺である。口縁端部は肥厚させ外側に折り返す。外面の色調は他と異なり、赤褐色を呈する。

96 は東海系のいわゆる S 字彫の破片である。復元口径 16.0 cm を測る。頸部下に深い沈線は巡らず、口縁部内外面と同様のナデ調整で仕上げられている。

97・98 は格子タタキが施されており、韓式系土器に含まれる。97 は壺ないし鉢の体部の破片である。

98 は彫の口縁部片である。復元口径 16.5 cm を測る。外側に折り返した口縁の端部は下端がさらに突出する。体部の格子タタキは残存範囲内では縦方向に整然と並んで施されている。

99～102 は壺である。99 は復元口径 22.2 cm を測る。長胴壺であると考えられる。内外面とも頸部下の稜が不明瞭である。100 は復元口径 20.2 cm を測る。やや強めのハケ調整を内外面に施す。口縁部は外反する。101 は復元口径 20.8 cm を測る。口縁部は内湾し、端部は内側に傾斜する面をもつ。102 は復元口径 20.0 cm を測る。口縁部の内外面と体部外面はナデ調整で仕上げる。

103 は壺もしくは鍋の破片である。復元口径 24.5 cm を測る。復元される形状から、把手付の鍋である可能性が考えられる。細かなハケ・ナデ調整で仕上げる。体部の厚さは約 5.0 mm と比較的薄い。

107 は鍋である。復元口径 35.7 cm を測る。片口鍋であり、把手が存在していたと考えられる。口縁部は外側に折り返す。内外面とも間隔の広いハケ調整を施す。方向は外面が縦、内面が横である。

104～106・108～115 は甌である。104 は甌の下半部である。底面から体部下半はなめらかに接続し、明確な稜は無い。底面中央は平坦になる。底面には中央の正円形孔の周囲に梢円形の孔が 5 つ配される。内外面ともにハケ調整を施す。内面と外面でハケの方向は異なるが、工具は同一のようである。105 は体部下半の破片である。底部の形状は 104 と同様であると考えられる。106 は体部下半の破片である。外面には格子タタキが施され、韓式系土器の範疇に含まれる。タタキの後、弱いナデ調整が施されたと考えられ、タタキの表面付近は漬れ気味である。内面はハケ調整の後、ナデ調整で仕上げる。108 は底部の破片である。復元底径 18.0 cm を測るが、破片が小さいため数値は変化する可能性がある。底面外側に正円形に近い孔が穿たれる。109 は底部付近の破片である。外面に格子タタキが施される韓式系土器である。体部下端付近はタタキの後、横方向のケズリで成形されている。104 よりも底面の平坦部は広いと想定される。正円形の孔が 2 ヶ所、約 2 cm 離して穿たれている。

110 は格子タタキが施される韓式系土器の甌である。遺存しているのは全体の約 3 割のみであるが、底部中央を除く全体がほぼ復元可能である。復元口径 27.7 cm・復元底部径 12.3 cm・器高 22.6 cm を測る。口縁は直線的に立ち上がり、端部には面をもつ。体部上半には幅 3～4 mm・深さ 0.5 mm 未満の浅い四線が並行して巡る。タタキは斜め方向に施される。把手の切り込みは上下に貫通する。内面はハケ調整の後、ナデ調整で仕上げられたと考えられ、一部にハケ調整の痕が残る。111 は全体の約 4 割が遺存する。復元口径 30.6 cm・底部径 14.8 cm・器高 26.5 cm を測る。口縁は外側に折り返し、外側に

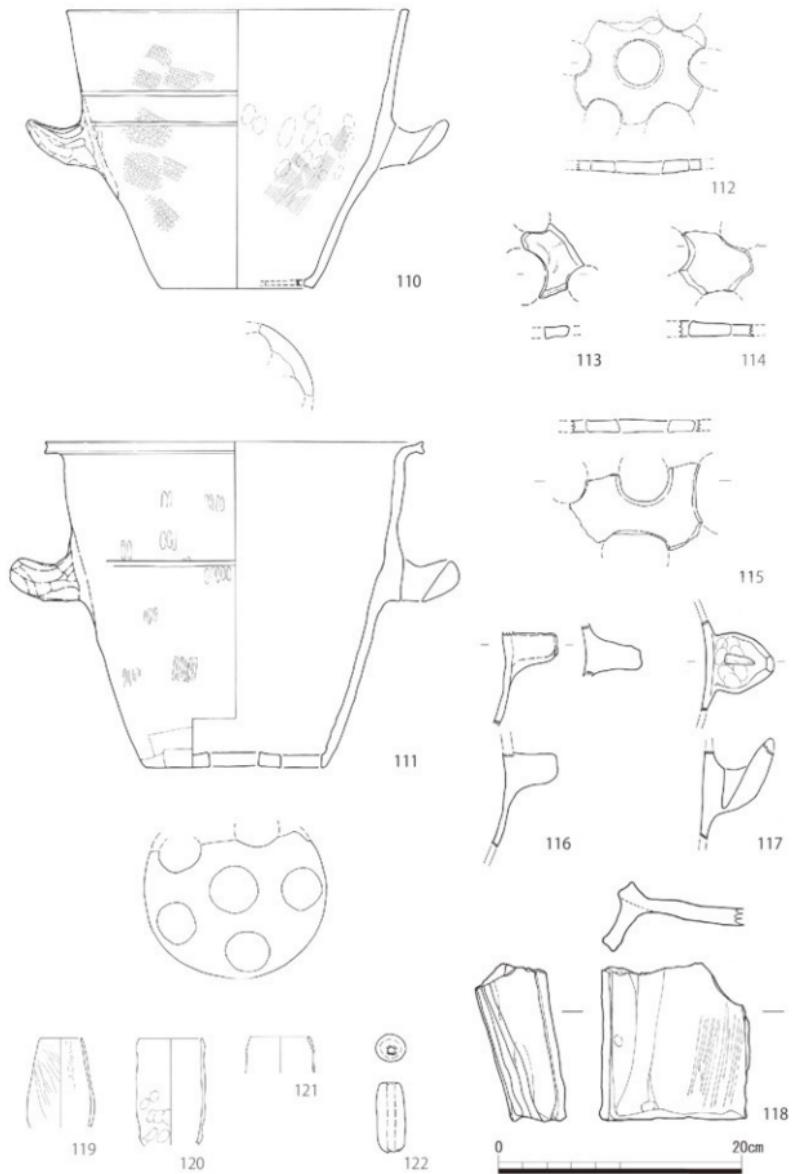


図30 SR02出土 土器⑤・土製品 (S = 1/4)

向く面は中央がわずかに窪む。外面には縦方向のタタキを施すが、その後のナデ調整で大部分が消えている。内面も全体をナデ調整で丁寧に仕上げている。底面は平坦で、周囲の稜も明瞭である。直径3.3～3.8cmの円形孔が6つ配され、中央の孔がわずかに他より大きい。把手の断面は円形で、上下に貫通する切れ込みをもつ。

112～115は瓶の底部片である。112は直径3.9cmの中央孔の周囲6ヶ所に、それよりやや小型の円形孔が配される。113・114も112とほぼ同様の底部片である。115は中央の正円形孔の周囲に長梢円形孔が4ヶ所配されると推測される。

116・117は瓶あるいは鍋の把手である。116は接続する体部の丸みが強く、鍋である可能性が高い。横断面形は隅丸方形である。117は先端が上方に伸びる把手で、上部からの切り込みは深いが貫通はしない。

118は付け底系の甌である。焚口下端の破片であると考えられ、板状の底が付く。内面下半には熱を受けた痕が見られる。

119～121は製塙土器である。いずれも縦長の円筒状で、厚さ約1～2mmと薄手だが硬質に焼かれている。119は下半部が膨れる形状で、復元口径3.2cm・最大径5.5cmを測る。外面には斜方向の線が複数ある。120はほぼ垂直の器壁をもち下端部が丸みを帯びる。外面には指頭圧痕や指紋が明瞭に残る。121は内傾する口縁部の破片である。内外に指紋が残る。

122は円筒状の土製品で、土錘であると考えられる。長さ5.7cm・直径2.4cm・重さ27.5gを測る。円筒状ではあるが形状は全体に丸みを帯びる。中軸に直径6mmの円形孔があり、棒に粘土を巻き付けて制作されたと考えられる。

123～125は鞴の羽口である。図31は送風口側を右として図化している。123は先端（図の左）が溶解し、付着物も多い。送風孔の復元径は2.8cmである。124は羽口の中程の破片で、外面の先端側が淡灰色に変色する。送風孔の復元径は3.0cmである。125は胎土に径3mm以下の小石が他より多く含まれる。

126～136は木製品である。図化した資料はいずれも保存処理を施して保管している。不明木製品

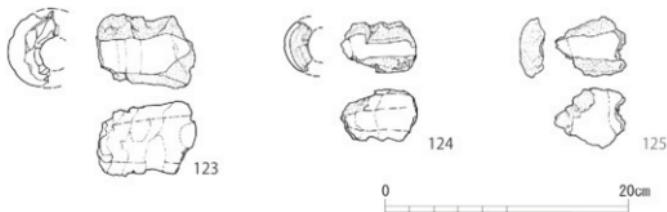


図31 SRO2出土 鞍の羽口 (S = 1/4)

の説明については、便宜上、図の上下左右を用いて表記する部分がある。

126は堅櫛の棟部である。イネ科タケ亜科の植物を基本素材として編み上げ、外面に漆膜を塗布する。塗膜前の下地は確認されず、素地の上に直接漆層が重なる。計12本の串をU字にして束ね上げている。歯を固定する帶は絹糸である可能性がある。

127は帯である。詳細な樹種は不明であるが、広葉樹の小枝を筒状に束ねて作られている。ほぼ全体像を保った状態で出土している（図版23上）。全長約45cm・中央付近で直径約3cmを測る。図の左が先端側、右が柄側となる。それぞれの枝端の位置は、柄側は概ね揃うが、先端側はばらつきが大きい。中心付近で組状の皮を巻き付けて束ね上げている。正確な用途は不明であるが、いわゆる手帯にあたると考えられる。現時点において、現存する帯としては国内最古の資料である。

128は棒状木製品である。木材はヒノキ科アスナロ属である。各部に面取り加工がなされている。上部は長さ約4cmの範囲が細くなり、そのさらに上部は再び太くなる。

129は手斧の柄である。サカキの枝材の二股部を利用している。斧装着部の断面形は、柄の主軸に対して横長の三角状であり、横斧が装着されていたと考えられる。柄下半の斧側（握った際に指が当たる部分）は若干平坦になるよう加工されている。

130は刀形木製品である。木材はコナラ属アカガシ亜属である。厚さ5~8mmの板材で、図の下端は幅が狭く、上端は片側が尖るように加工されている。表面は全体に摩耗している。

131は盾形木製品である。木材はヒノキ科アスナロ属である。厚さ5~7mmの板材で、上部が羽子板状に四角く幅広になる。厚さは上部ほど薄くなる傾向にある。最下端と盾部の片側辺中央がそれれ抉れている。盾部片面の中央には長軸と直交する横方向の線刻が認められる。

132はツバキ製の木製品で、形状から鳥形木製品である可能性が考えられる。表面は加工が行われているが、磨滅や欠失部分が多い。

133はいわゆるナスビ形木製品と呼ばれる曲柄又鍔である。木材はコナラ属アカガシ亜属である。刃部の半身と柄の上部が失われている。刃部と軸部の境界は、抉って明瞭な肩を作り出している。

134・135は棒状木製品である。いずれも木材はヒノキ科アスナロ属である。134は断面形が方形を呈し、先端（下側）のみが銳利になるよう加工されている。135も先端部は角を削り落として銳利に加工されている。上部は片側に屈曲が見られ、上端から約4cm下の部分には刃物による加工痕が残る。

136は泥除である。コナラ属アカガシ亜属の板目材である。横幅34.5cm・縦幅14.1cmを測り、幅広の横鍔と共に取り付けて使用したと想定される。片面はほぼ平坦であるが、もう片面は稜が比較的明瞭な立体的な加工が施されている。両面に加工痕が残る。最長辺の片側に偏した位置に2ヶ所、直径約4mmの孔が穿たれている。

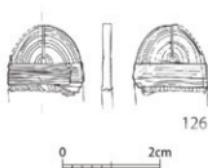
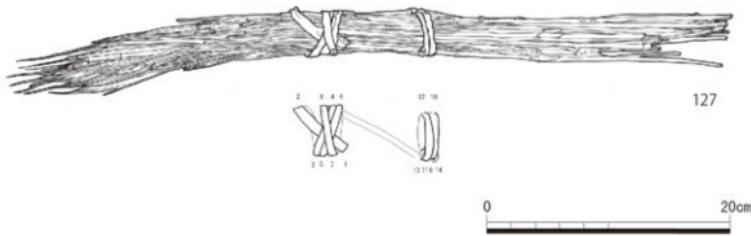


図32 SR02出土 堅櫛 (S=1/1)

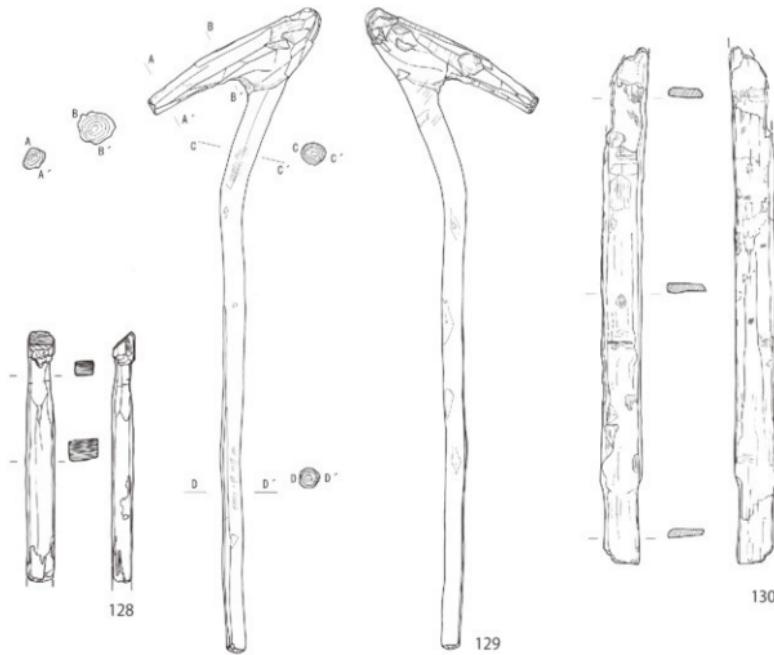
この他、木製品としては用途不明の板材や棒材といった端材が出土している。また、長さ約5~10cm・直径約1cm程度の燃えさしが30点程度出土しており、他にも炭化した端材が存在する。

木製品以外では獸骨があり（図版24右上）、中には馬の骨が含まれる。また、種子類ではモモの種子やヒョウタンの種子が多い。モモの種子は直径1.5~2.7cm程度のものが約100点



127

20cm



128

129

130

図33 SR02出土 木製品① (S = 1/4)

出土している。ヒョウタンは長さ1cm強・幅0.5cm程度のものが約90点出土している。他、ウリ類の種子も少数ながら認められる。ヒョウタンについては果実の皮も1点出土している。

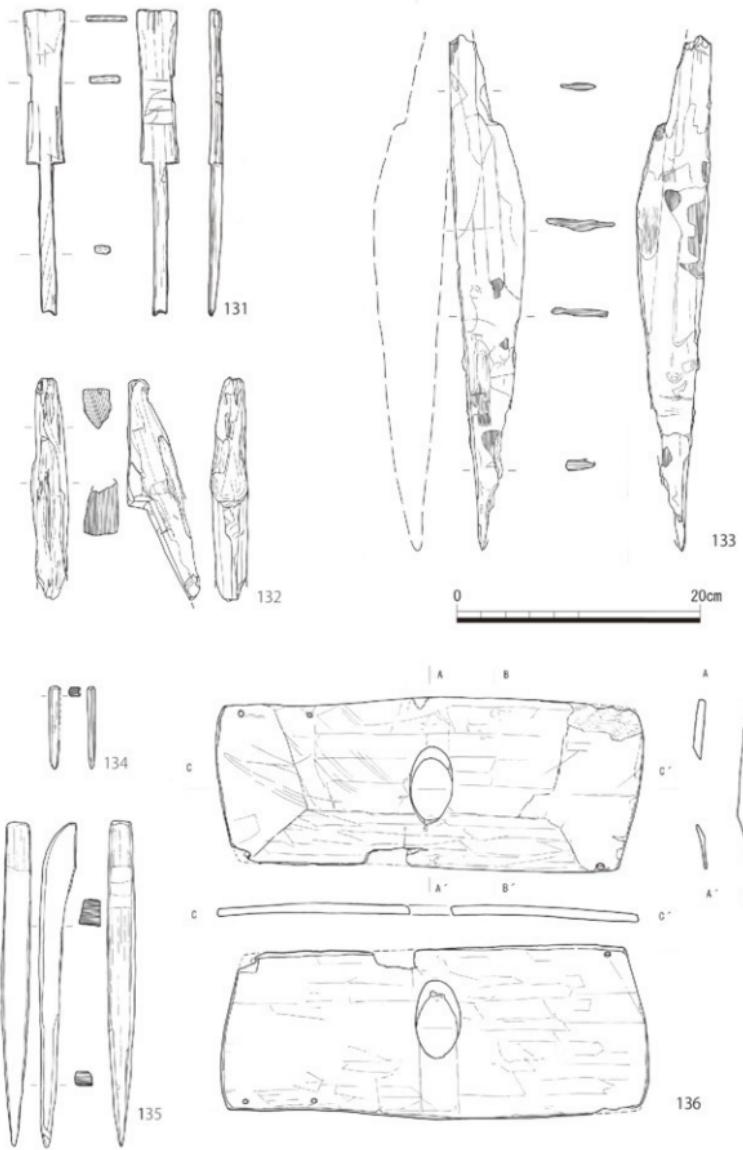


図34 SRO2 出土 木製品② (S = 1/4)

SRO1 出土遺物 (図 35)

SRO1 は SRO2 右岸と併走するような形で北西流する流路である。出土遺物は古墳時代の須恵器と土師器を中心とする。これらの土器の時期は SRO2 と同様に古墳時代中期から後期にかけてであるが、後期に属す土器が多い点が SRO2 とは異なる。その他、木製品や鉄滓、弥生時代以前の土器や石器が出土している。

137 は緑色片岩製の磨製石包丁である。SRO1 の検出面付近から出土している。直径 0.6 cm の円形孔が 2ヶ所、両面から穿たれている。138 はサヌカイト製の石槍である。長さ 8.5 cm・幅 3.5 cm・厚さ 0.8 cm・重さ 24.59g を測る。中軸上の厚さは先端部を除くとほぼ均一である。

139 は縄文土器の注口部であると考えられる。胎土は周辺で出土している縄文土器と共に通する。外面はナデで整える。中空の土製品である可能性も考えられる。

140 は弥生土器の甕の底部である。底部外面の中央は断面形が山形に窪む。体部外面には右上がりのタタキが施される。

141~145 は須恵器である。141 は壺蓋の完形品である。口径 14.0 cm・器高 3.9 cm を測る。表面はヘラケズリとやや強めのナデ調整で全体に平滑に仕上げられている。142~144 は壺身である。

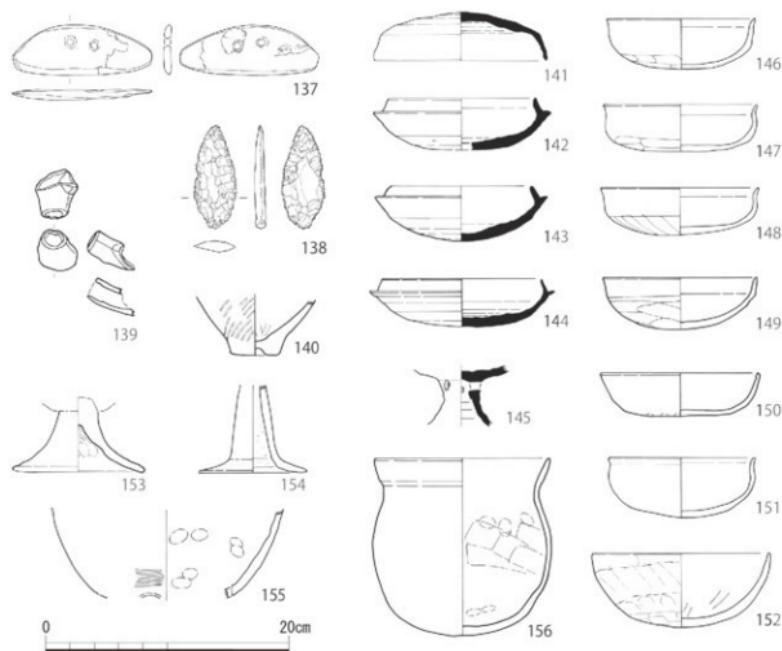


図 35 SRO1 出土 石器・土器 (S = 1/4)

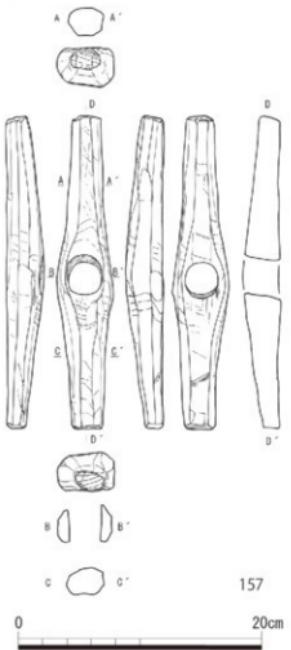


図 36 SRO1 出土 木製品 (S = 1/4)

4.0 cm を測る。口縁は直線的に外側に開き、皿に近い形状である。底部には指頭圧痕が残る。151 は全体の約 7 割が遺存しており、口径 12.0 cm・器高 4.9 cm を測る。内外面ともに全体にナデ調整を施す。

152 は環の延長線上にある器であると考えられるが、ここでは塊として扱う。全体の約 3 割が遺存する。復元口径 14.4 cm・器高 5.8 cm を測る。外面にはヘラケズリ・ヘラナデ・ナデ調整を施している。粘土紐の接合痕が明瞭に残り、粘土紐を螺旋状に積み上げたことがうかがえる。内面はナデ調整で仕上げるが、下半にはヘラの痕が残る。

环・塊の色調は SRO2 出土資料と同様、2 種に分かれれる。146～148・152 は明橙色を呈し、149・150 は黄灰褐色を呈する。151 は両者の中間であり、底部外面に黒斑が残る。

153・154 は高環の脚部である。153 は上端に环部との接合の為の刻み目が残る。154 は筒部内面の上方まで回転ヘラケズリを施す。

155 は櫃の体部下半の破片である。外面の底面との境の稜は不明瞭である。156 は甕である。体部の形状は平底鉢に近いが、底部は丸みを帯びる。表面の磨滅の為、詳細な調整は不明であるが、内面にはヘラナデの痕や指頭圧痕が残る。

157 は棒(かせ)の腕木と考えられる木製品である。紡錘で紡いた糸を掛けて巻き取る道具である。SRO1 の底面から出土している(図版 28 下)。木材はコナラ属アカガシ亜属で、イチイガシやアカガ

142 は口径 12.0 cm・器高 4.2 cm を測る。口縁は外反気味に上方に立ち上がる。143 は口径 11.4 cm・器高 4.5 cm を測る。142・143 は SRO1 中層からの出土である。144 は SRO1 最下層から出土した环身の完形品である。口径 13.0 cm・器高 3.9 cm を測る。上半部の器壁は厚さ 0.2～0.3 cm と薄い。145 は高環である。脚部上端に 3 方向の円形透かしが穿たれる。透かしのうち一つは内面まで貫通していない。焼成はやや不良で、环部の断面はにぶい赤褐色を呈する。

146～156 は土師器である。146～151 は环で、うち 146～150 は完形品である。146 は口径 12.0 cm・器高 4.1 cm を測る。全体をナデ調整で平滑に仕上げている。底部外面には径 0.2～0.4 cm 大の小窪を除去した痕が多く確認できる。147 は口径 12.4 cm・器高 3.8 cm を測る。口縁は小さく外反するが、ほぼ垂直に立ち上がる部分も存在する。底面は強いケズリによって平坦に作り出されている。148 は口径 12.8 cm・器高 3.9 cm を測る。磨滅によって表面の調整は不明な範囲が多いが、外面下半はケズリによる稜が認められる。149 は口径 12.4 cm・器高 4.3 cm を測る。外面下半は強いケズリを施して器形は全体に丸く仕上げる。150 は口径 12.8 cm・器高

シ、シラカシなどの可能性がある。四方柱材であると考えられる。長さ25.6cm・厚さ1.4~3.0cmを測る。中心から両端に向かって細くなる棒状で、中央に直径2.5~3.0cmの楕円形孔が穿たれている。表面は細かな面取り加工がなされている。

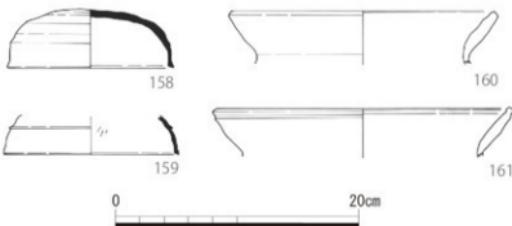


図37 SX03出土 土器 (S = 1/4)

SX03(図37)

SX03はSR02の右岸に接する直径5m程度の不整形な落ち込みで、SR02と一体の遺構であると言える。出土遺物には須恵器・土師器・製塩土器がある。出土遺物の時期から、SR02・01よりも早く埋没したと考えられる。

158・159は須恵器の坏蓋である。158は全体の約7割が遺存する。肩部上に幅広の窪みが巡る。159は肩部下の破片で、稜は外側に強く飛び出す。内面には一般的なヘラ記号よりも細い、川の字状の線刻が認められる。

160・161は甕の口縁部である。いずれも長胴甕である可能性が考えられる。160は復元口径22.0cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整を施す。161は復元口径23.6cmを測る。端部は内面につまみ上げ、外面には細い凹線が巡る。外面下半には表面の粘土の剥がれが多く認められる。

SD120(図38)

SD120はSR02とSR01を繋ぐ溝で、導水路のような役割であったと考えられる。162・163は土師器の坏である。いずれも口縁は直線的に外側に開き、端部は丸く收める。外面の調整は内面よりも粗い。

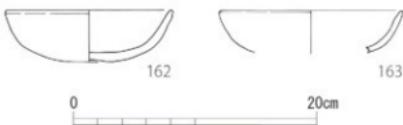


図38 SD120出土 土器 (S = 1/4)

SK02(図39)

SK02は古墳時代前期の井戸であると考えられる土坑である。

164・165は土師器の甕で、遺構底面付近から並んで出土した完形品である(図版33下)。164は口径13.2cm・器高19.4cm・体部最大径19.6cmを測る。体部はわずかに縱長の球形で、中央やや上の径が最大となる。体部外面にはハケ調整を施す。内面には全体に指頭圧痕が残る。体部下半と底部付近にそれぞれ1ヶ所ずつ穿孔がなされている。165は口径11.8cm・器高15.6cm・体部最大径16.5cmを測る。体部はほほ球形である。体部は内外面ともやや幅広のハケ調整を施す。器壁は164よりも厚い。

166は土師器の高坏である。調整は磨滅の為、不明である。

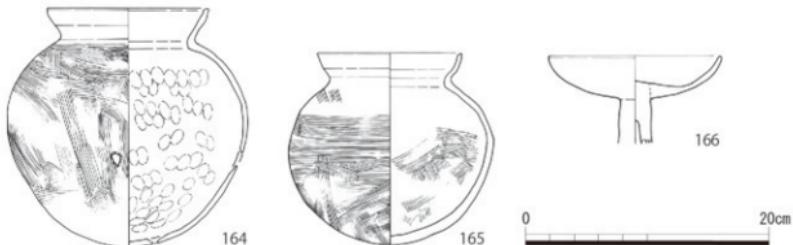


図39 SKO2出土 土器 ($S = 1/4$)

基本層序IV層 (図40~44)

上・中・下層遺構の遺構基盤層である基本層序IV層は、縄文時代後～晚期の遺物包含層である。IV層は大きくIV-①層（上層）とIV-②層（下層）とに分けて調査を行っている。

出土遺物には縄文土器と石器がある。土器の中には他の土製品である可能性をもつ資料も含まれる。IV-①層の出土遺物の時期は、縄文時代後期中葉を中心に、後期前葉・後葉および晚期後半がある。晚期の資料はごく少量である。IV-②層の出土遺物の時期は、縄文時代後期前葉を中心に、一部に後期中葉が含まれる。本来は後期前葉→後期中葉→後期後葉→晚期後半という時期変遷と層位とが対応していた可能性もあるが、調査時に詳細な把握はできていない。

IV-①層 (図40~42)

167はサヌカイト製の石鏃である。長さ2.6cm・幅2.1cm・厚さ0.35cm・重さ1.58gを測る。かえしは左右でバランスが悪い。茎を作り出す過程である可能性もある。

IV-①層からは他にサヌカイトの剥片が出土している。

169~195は縄文土器である。このうち189~195は、IV-①層底面からの出土である（図42）。縄文土器は破片の出土数が多いが、全体像を復元しうる資料は無い。

169・177は口縁の破片で、いずれも端部の外側に凸帯が貼り付けられている。凸帯の断面形は、やや潰れた三角である。169の凸帯には1cm間隔で刻み目が施されている。169・177は晚期後半の土器であると考えられる。表面の色調も他と異なり、灰色混じりの橙色である。

170~173・175・176は口縁の破片である。時期は171・172が後期後葉で、他が後期中葉である。

170は口縁に並行する2条の凹線が描かれる。171は口縁外側の平坦面に2条の凹線が描かれ、その中に貝殻によると考えられる円形の刺突が組み込まれる。口縁端部の内面には粘土を貼り付け肥厚させる。172は粗製の深鉢と考えられ、内外面に貝殻条痕が認められる。173は口縁の一部を盛り上げ、直径1.1~1.4cmの縱長円形の孔を作り出している。口縁部および体部には凹線で文様を描く。175は深鉢と考えられ、上方に粘土を盛り上げた後、太い凹線を描いている。176は円形の文様が描

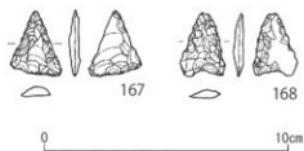


図40 IV層出土 石器 ($S = 1/2$)

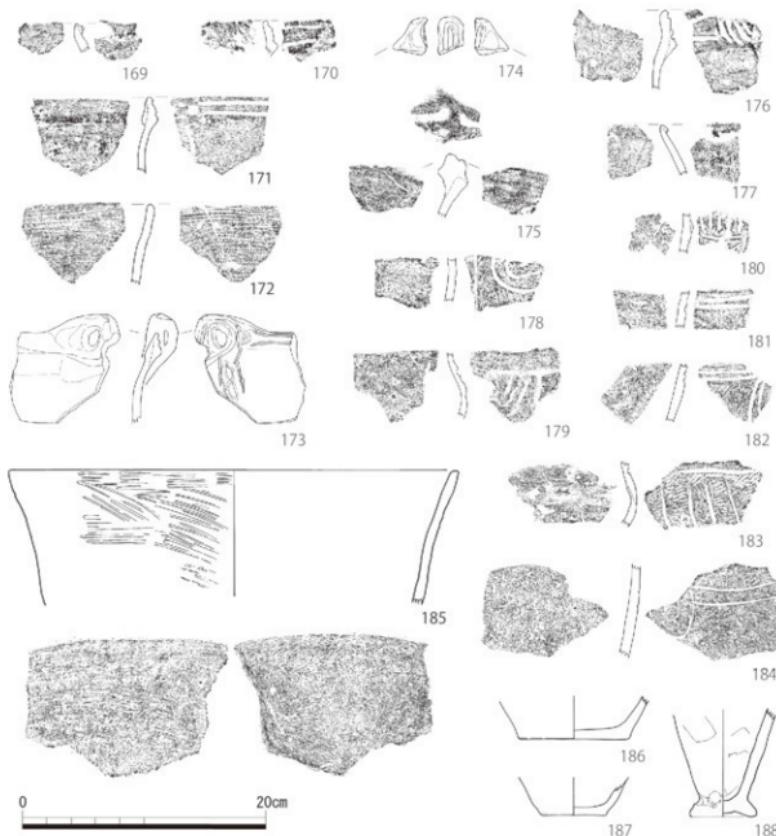


図 41 IV-①層出土 土器 (S = 1/4)

かれている。

174 も口縁を構成する可能性のある耳状の塊であるが、他の土製品の可能性もある。U字状の太い凹線が立体的に描かれる。

178~184 は体部の破片である。180・181 は後期中葉、178・179・182~184 は後期前葉の土器であると考えられる。

178・179 は直線と曲線を組み合わせた磨消繩文が施される。179 は深鉢体部の屈曲部分であると考えられる。180・181 は直線的な凹線が描かれる。182・183 は磨消繩文が施された破片である。183 は胴部の屈曲部にあたる。本来無文部分であるべき範囲にも部分的に繩文が残っている。184 も同様の磨消繩文が施されるが、表面の磨滅の為、繩文はほぼ消失てしまっている。

185 は粗製の深鉢である。今回出土した繩文土器の中で最も大きな破片である。復元口径 36.7 cm

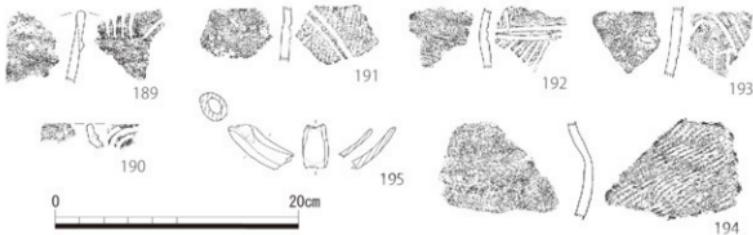


図 42 IV-①層底面出土 土器 (S = 1/4)

を測る。外面にはわずかに二枚貝条痕が残る。

186・187は底部の破片である。186は復元底部径8.8cmを測る。187は復元底部径5.3cmを測り、内外面にわずかに指頭圧痕が残る。

188は上方に開く小型の土器の底部である。小片のみ、他の土製品である可能性もある。胎土や色調は他の縄文土器と同様である。

189～195はIV-①層底面から出土した縄文土器である。時期は189～192が後期中葉、193が後期前葉であると考えられる。

189は口縁端部から下方に向かって凹線が描かれる。190は凹線が並行して弧状に描かれる。191は凹線の外に縄文が認められる。192は表面が比較的良好な状態の破片で、凹線が明瞭に確認できる。193は磨消縄文が施される。194は外面に縄文が残る。195は注口土器の口である。厚さ0.3～0.7cmを測る。口は内径が約0.8～1.0cmの梢円形である。

IV-②層 (図 40・43・44)

168はサヌカイト製の石鏃である。四基無茎鏃で、長さ2.6cm・幅1.3cm・厚さ0.35cm・重さ1.31gを測る。先端は鋭利ではない。

IV-②層からは他にサヌカイトの剥片が出土している。

196～206は縄文土器および土製品である。このうち204～206はIV-②層底面 (V層上面) の

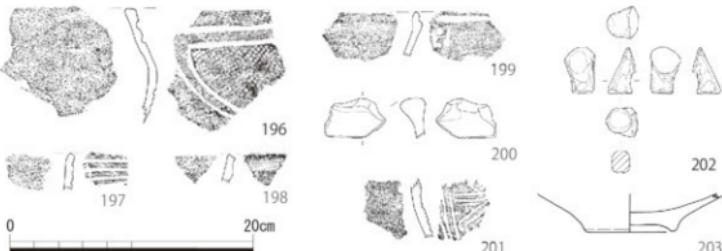


図 43 IV-②層出土 土器 (S = 1/4)

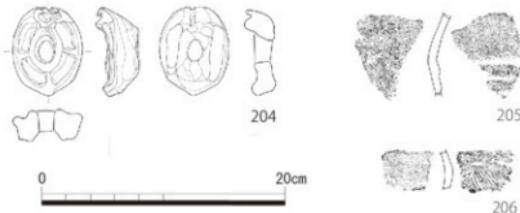


図44 IV-②層底面出土 土器・土製品 (S = 1/4)

粘土の溜まり部分からの出土である。

196は鉢の口縁部で磨消縄文を施す。比較的広い範囲に縄文を施す。197~200は口縁の破片である。197は口縁と並行する3条の凹線が描かれる。198は口縁端部をわずかに窪ませる。199は上端から1cm下に円形の刺突が施される。200は口縁端部を内外に肥厚させる。口縁は山形となる可能性がある。201は体部の破片で、比較的幅の狭い凹線で文様を描く。

202は平坦な接地面をもつ土製品である。土偶の脚などの可能性が考えられるが詳細は不明である。接地面は中心がわずかに窪む。

203は土器の底部で、体部下半は大きく外に開く形状である。

204は土製品もしくは土器の装飾の一部である。長径7.2cm・短径5.7cm・厚さ1.5cmを測る。中心部には卵形の円孔がある。背面には縦に長い剥離痕が2条存在する。また、表面の上端部も一部欠失している。色調はにぶい橙色を呈する。全体に丁寧なナデ調整で仕上げられている。女性器を模した土製品である可能性も考えられる。

205・206は体部の破片で凹線と縄文が施される。

第IV章 総括

第1節 調査成果のまとめ

今回の発掘調査成果は、時代別では縄文時代、古墳時代、中世の3時期に大きく分かれる。本報告中の下層遺構が古墳時代、中層遺構・上層遺構が中世の遺構である。縄文時代については明瞭な遺構は存在しないが、上～下層遺構の基盤層（基本層序のⅣ層）が縄文時代遺物包含層であり、一定量の縄文土器や石器が出土している。以下に上層から順に、調査の成果をまとめる。

上層遺構は、いわゆる素掘り耕作溝群である。調査区のほぼ全域に存在する。時期は13世紀以降であると考えられる。調査地はこれ以降、中世から近世にかけて耕作地としての利用が継続している。耕作溝群の方向は、南北方向と東西方向がある。南北方向の溝は、ほぼ正方位に伸びるものと、座標北に対して東に5～10°程度振れるものとに分かれる。東西溝群が最も古く、正方位の南北溝群が最も新しい。

中層遺構は上層の耕作溝群よりも古く、下層の古墳時代遺構よりも新しい時期の遺構群である。遺構の時期は12世紀後半～13世紀前半を中心であると考えられるが、小規模な遺構が多く出土遺物も限られることから具体的な時期比定が困難な遺構も多く、本来は上層遺構もしくは下層遺構と同時期の遺構をここに含んでいる可能性がある。遺構には掘立柱建物・塀、土坑、溝、ピットがある。遺構の分布は調査区の中央～南半に集中する。調査区南端付近に掘立柱建物1棟と塀2条がある。調査区西辺沿いには比較的大型の土坑2基が存在する。

下層遺構は古墳時代の遺構である。遺構の時期は前期の土坑1基を除くと、中期から後期である。中期後半から後期前半にかけてが中心であり、その前後の遺物が少量ながら存在する形となる。

遺構には河道・溝・土坑がある。中期以降の遺構は、調査区南端に位置する河道(SR02)を中心に、河道に接続する流路や溝、及び、これらと距離を取って並行する溝などから構成される。これらの遺構は主として中期後半から後期前半にかけての時期に機能し、一部は後期後半にまで継続する。

SR02は幅約8m以上・深さ約1.9m以上を測る河道で、右岸（東岸）を確認している。左岸は調査区よりさらに西に存在する。SR02からは上師器、須恵器、韓式系土器、陶質土器、製塩土器、木製品をはじめとする有機質遺物、鉄滓など多数の遺物が出土している。遺物量は調査全体の半数以上を占める。出土遺物の中には完形もしくはそれに準じる状態で遺存しているものが多い。また、遺物の表面も流水の影響をほとんど受けおらず、出土状況と合わせて、これらの遺物は比較的水流が安定した時期に意図的に河の中に置かれた、あるいは河岸から投げ込まれたものが多く含まれていると考えられる。いわゆる「水辺の祭祀」の存在が想起される状況である。

SR02からは大量の土器が出土しており、それらの中には韓式系土器と陶質土器が含まれる。数的に陶質土器はごく少量であるが、韓式系土器はある程度の量が存在する。有機質遺物には、帯・手斧

の柄・鍼・泥除などの木製品、獸骨、種子類などがある。この中で帯は、国内で現存する帯としては最古の資料であり、特に注目される。帯は広葉樹の小枝を筒状に束ねて作られている。法量は全長約45cm・直径約3cmを測り、使用感は手帯に近いと考えられる。出土状況と合わせて、祭祀に用いる道具であった可能性が考えられる。なお、この他で現存する帯としては、平城宮内の発掘調査で8世紀中頃の土坑から出土した草簾・蘆簾や、758年正月三日に初子の日の儀礼が執行された際に蚕室を掃いたとされる正倉院宝物・子日目利帯むのひのとせばきがある。

SRO2と溝(SD120)によって接続されるSRO1も注目される。SRO1はSRO2右岸と並行しており、水利目的で開削された可能性がある。出土遺物から、下層遺構の中で最も後の段階まで機能していたと考えられる遺構である。

遺構基盤層であるIV層からは縄文時代後期前葉～後葉、晩期後半の遺物が出土している。IV層は大きくIV-①層（上層）とIV-②層（下層）とに分けて調査を行っている。出土遺物には縄文土器、土製品、石器がある。土器・土製品はいずれも破片資料であり、全体像を復元できる資料は無い。

IV-①層の出土遺物の時期は、縄文時代後期が主で、とくに後期中葉が多い。次いで後期前葉・後葉が多く、晩期後半はわずかである。IV-②層の出土遺物の時期は、縄文時代後期前葉～中葉である。

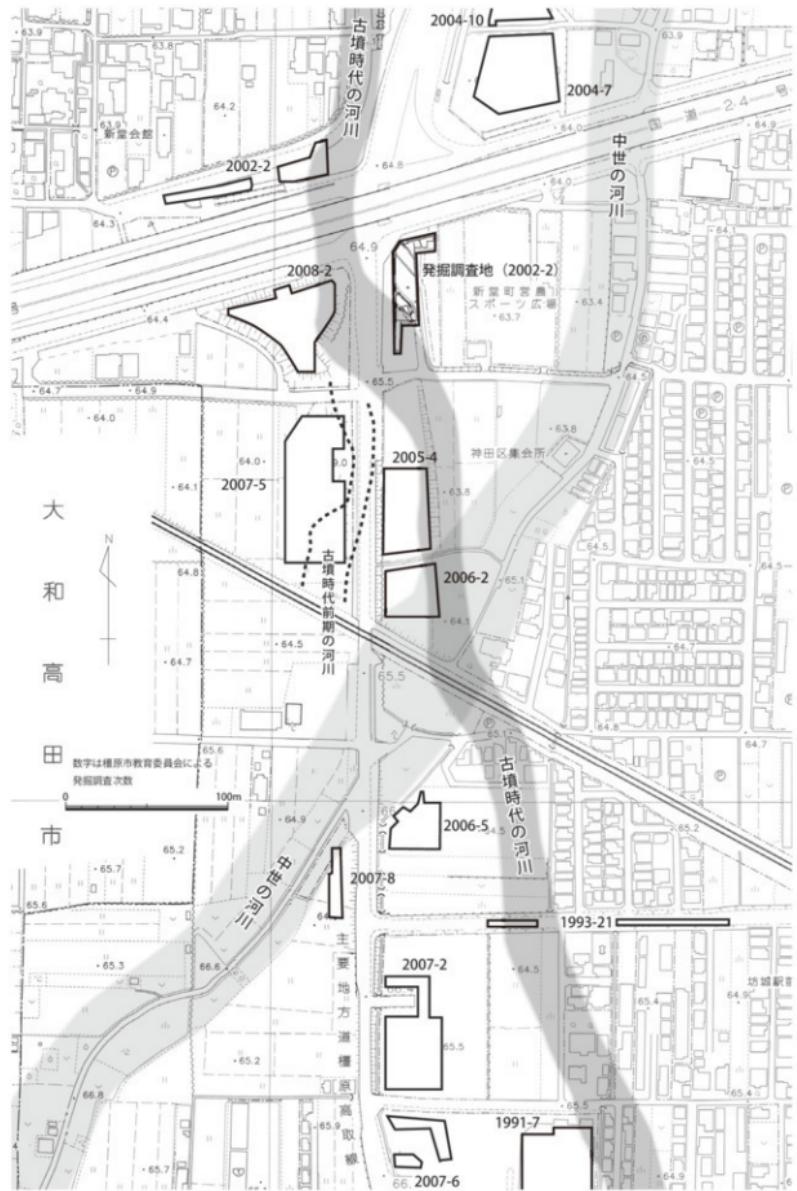
遺構は存在していないが、遺物の出土量や周辺の調査成果を踏まえると、調査地周辺で生活が営まれていたと考えられる。本来は後期前葉→後期中葉→後期後葉→晩期後半と層位的に変化を追える可能性もあるが、調査時に把握は出来ていない。

第2節 周辺の遺跡と環境

今回の調査では縄文時代、古墳時代、中世の各時期の様相を把握することができた。これらの時期を中心に、周辺の発掘調査成果や地形などから得られた情報と合わせて、調査地周辺の歴史を概説する。

調査地周辺で縄文時代の遺構・遺物の存在が明確になり始めるのは後期以降のことである。今回の調査で出土した縄文時代後期前葉～中葉の土器は、その早い段階での資料となる。後期の遺構は数が限られるものの、調査地から南の東坊城遺跡や川西根成柿遺跡に存在している。今回の調査地周辺を含めた、これらの一帯が生活圏に含まれていたと考えられる。晩期には畠傍山東麓の樅原遺跡をはじめとして、樅原市域及び周辺において遺跡の形成が活発となる。京奈和自動車道沿線では、調査地から南に離れた觀音寺本馬遺跡や玉手遺跡の一帯、北に位置する曲川遺跡において多数の遺構が確認されている。新堂遺跡では曲川遺跡に近接する位置にあたる樅教委2010-5次調査において晩期後葉の土器棺墓や水場遺構が確認されている。

弥生時代末頃～古墳時代には新堂遺跡周辺に集落が形成される。新堂遺跡および東坊城遺跡では、これまでの調査によって古墳時代の河川が発見されており（図45）、河川の両岸沿いで古墳時代の遺構・遺物が多数発見されている。また、堰の設置や導水路の掘削など、河川自体に手を加える行為が



行われており、堆積土中からも多数の遺物が出土している。細かな流域変化を繰り返す河川に対応しつつの生活であったと考えられる。今回の調査で確認した水辺の祭祀の存在からも、河川と密着した生活の在り方が窺える。

新堂遺跡周辺における古墳時代の集落は、弥生時代末～古墳時代前期と古墳時代中期後半～後期前半とに大きく分かれ、とくに後者は多量の遺物が出土している。出土遺物では中期前半及び後期後半の資料もある程度存在する。樋教委 2003-12 次・2007-5 次調査では前期の竪穴建物を確認している。一方、中期～後期については明瞭な建物跡は発見されておらず、集落のうち居住空間は遺跡西部などといった調査の行われていない地点に存在すると考えられる。ただし、平地式住居や掘立柱建物といった相対的に遺構の残りにくい住居形態も考慮すべきではある。

中期以降には陶質土器や韓式系土器などの渡来系遺物が出土するようになる。これは樋原市域及び周辺で広く見られる傾向であるが、新堂遺跡周辺は特にその傾向が顕著であり、出土量が多い。また、鍛冶関連遺物の出土も見られる。隣接する曲川遺跡と東坊城遺跡と合わせて、渡来系要素の濃い地域であると言える。

新堂遺跡で古墳時代に統一して遺跡の形成が顕著になる時期が中世である。周辺の発掘調査では、12～13世紀頃の区画溝を伴う屋敷地の存在が複数確認されている。その他、輸入陶磁器や多量の土師器が出土する土坑や井戸などの遺構が存在する。

新堂遺跡の南～東辺付近には12世紀後半頃に埋没した河川（旧・葛城川と想定される）が北流する。この河川は条里地割の施工後に埋没した為、現在も地形にその痕跡を残している。南西は大和高田市根成柿付近から、北東は樋原市の曲川環濠付近まで、その痕跡を追うことが出来る。中世の屋敷地は、この河川の左岸（西岸）際にも構築されている。

そのような中、今回の調査地は中世以降、主に耕作地として利用されていたことが明らかとなった。比較的良質な地盤をもつ耕作地として、周辺に存在する屋敷地の主の管理下にあった可能性があると言える。

報 告 書 抄 錄

ふりがな	しんどいせき 一けいなわじどうしゃどう「ごせくかん」けんせつにともなうはつくちょうさほうこくしょー							
書名	新堂遺跡 一京奈和自動車道「御所区間」建設に伴う発掘調査報告書一							
シリーズ名	橿原市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第12冊							
編著者名	橿原市教育委員会 石坂泰士							
編集機関	橿原市教育委員会事務局 生涯学習部 文化財課							
所在地	〒 643-0826 奈良県橿原市川西町 858-1 TEL 0744-22-4001 FAX 0744-26-1114							
発行年月日	西暦 2015年9月30日							
所取遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
しんどい 新堂遺跡	ならけん 奈良県 かしはらし 橿原市 しんどいじゅう 新堂町	29205	14C545A	34° 29' 51"	135° 45' 41"	2002/9/9 ~ 2002/12/26	1,000 m ²	京奈和 自動車 道建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
新堂遺跡	集落	縄文時代 後期～晩期 古墳時代前期 古墳時代 中期～後期 中世	遺物包含層 土坑 河道・溝・土坑 土坑・柱穴・耕作溝	繩文土器・石器 土師器 土師器・須恵器・ 韓式系土器・陶質土 器・木製品ほか 土師器・瓦器			橿教委 2002-2 次調査	
要約	<p>古墳時代の集落の存在を確認している。河道及び溝、土坑から、古墳時代中期～後期の遺物が出土している。遺物の時期は古墳時代中期後半～後期前半が中心で、その前後の時期が少量含まれる。調査区南端で右岸を検出した河道(SR02)からは、土師器・須恵器・韓式系土器・陶質土器・製塩土器・木製品などの遺物が多量に出土している。とくに広葉樹の小枝を束ねて作られた串(ほうき)は、国内に現存する最古の資料として注目される。河道から出土した遺物の多くは、その出土状況や資料の状態から、意図的に河の中に置かれた、あるいは河岸から投げ込まれたものが多く含まれると考えられる。いわゆる「水辺の祭祀」の存在が想起される。その他、古墳時代前期の土坑1基が存在する。</p> <p>中世は掘立柱建物・堀を含む柱穴群や土坑の存在を確認している。13世紀以降は耕作地としての利用が中心となる。</p> <p>古墳時代～中世の遺構基盤層は縄文時代後期～晩期の遺物包含層であり、縄文時代後期前葉～後葉および晩期後半の土器・石器が出土している。数的には後期の資料が主である。</p>							



調査区全景 航空写真（俯瞰。土が西）



調査地全景 航空写真（南から）

図版 2



調査地全景 航空写真（北から）



調査地全景 航空写真（東から）



調査地遠景 航空写真(北東から。中央やや下が調査地。正面奥は金剛山)



調査地遠景 航空写真(南西から。右奥は耳成山)

図版 4



調査地遠景 航空写真（西北西から。中央は歎傍山）



調査地遠景 航空写真（南東から。正面奥は二上山）



調査区全景 航空写真（西から）



調査区全景 上層遺構完掘状況、中・下層遺構検出状況（南から）

図版 6



調査区南半 下層遺構検出状況（北から）



調査区西半 上層遺構完掘状況、中・下層遺構検出状況（南から）



調査区南半 上層遺構完掘状況、中・下層遺構検出状況（北西から）

図版 8



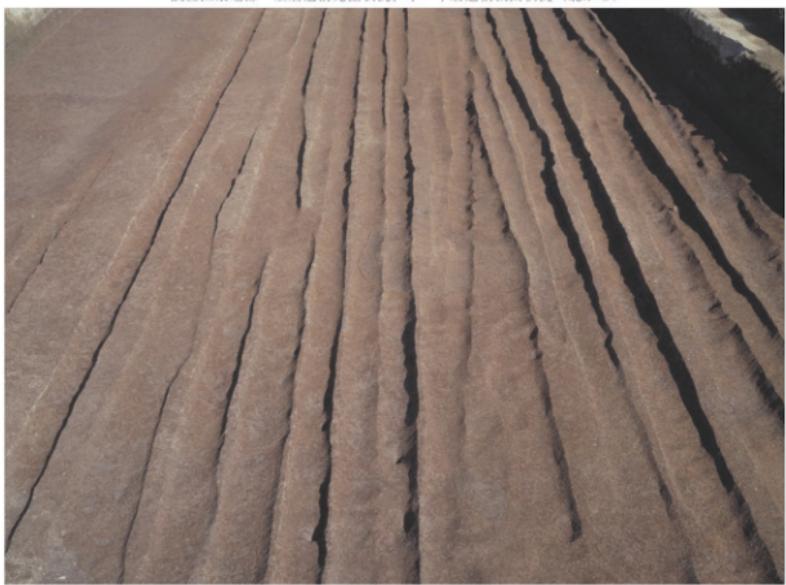
調査区西半 上層遺構完掘状況、中・下層遺構検出状況（北から）



調査区北半 上層遺構完掘状況、中・下層遺構検出状況（西北西から）



調査区東端部 上層遺構完掘状況、中・下層遺構検出状況（北から）



調査区中央部 中層遺構ピット群検出状況（南から）

図版 10



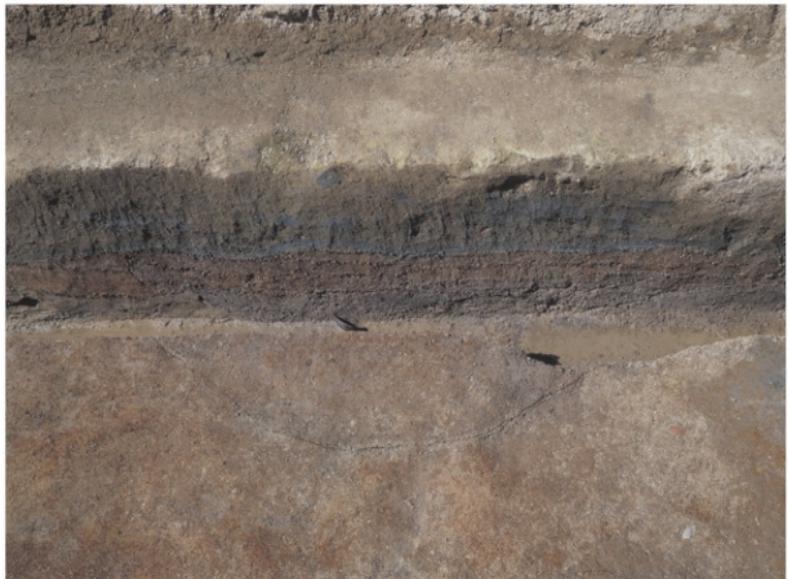
SB01 検出状況（北北東から）



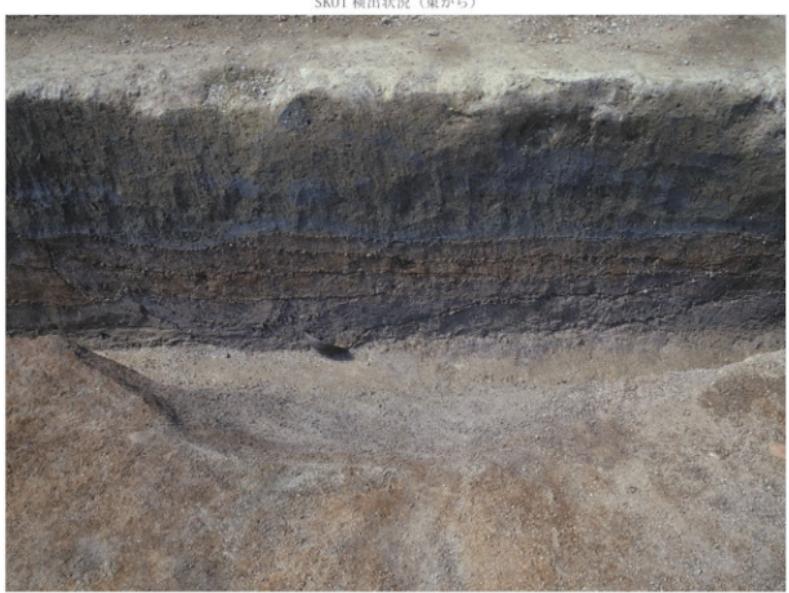
調査区北西部 ピット検出状況（西から）



調査区南半 土坑・ピット完掘状況（北から）



SK01 検出状況（東から）



SK01 完掘状況（東から）

図版 12



SP051 土層断面（東から）



SP105 土層断面（南から）



SP104 土層断面（北から）



SP106 土層断面（南から）



調査区西半 下層遺構完掘状況（南から）



調査区西半 下層遺構完掘状況（北から）

図版 14



SR01・02 完掘状況（北西から）



調査区全景 下層遺構完掘状況（北東から）



調査区北半 下層遺構完掘状況（北西から）

図版 16



SR02 遺物出土状況（南東から）



SR02 完掘状況（南東から）

図版 18



SRO2 遺物出土状況（南西から）



SRO2 大駐以北 遺物出土状況（北から）



SR02 大甕以北 有機質層検出状況（南東から）



SR02 大甕以南 遺物出土状況（南東から）

図版 20



SR02 遺物出土状況（南西から）



SR02 北端 有機質層検出・遺物出土状況（北東から）



SRO2 北端 有機質層検出・遺物出土状況（南から）



SRO2 鳥形木製品出土状況（東から。遺物No.132）

図版 22



SR02 木製品出土状況（南東から）



SR02 泥除・壙出土状況（北西から。遺物№ 136・127）



SR02 穴出土状況（南東から。遺物№ 127）



SR02 ナスピ形木製品出土状況（西から。遺物№ 133）

図版 24



SRO2 土師器出土状況（東から。遺物№ 92）



SRO2 骨骨出土状況（北から）



SRO2 骨骨出土状況（東から）



SRO2 大甃内 木製品出土状況（南西から。遺物№ 129）



SRO2 壺出土状況（北西から。遺物№ 111）



SR01・02 完掘状況（南東から）



SR01・02 完掘状況（南西から）

図版 26



SR02・SX03 土層断面（南東から）



調査区西壁南端 SR02 土層断面（南東から）



調査区南壁西半 SR02 土刷断面（北西から）



調査区南端拡張区 SR02 検出状況（北西から）

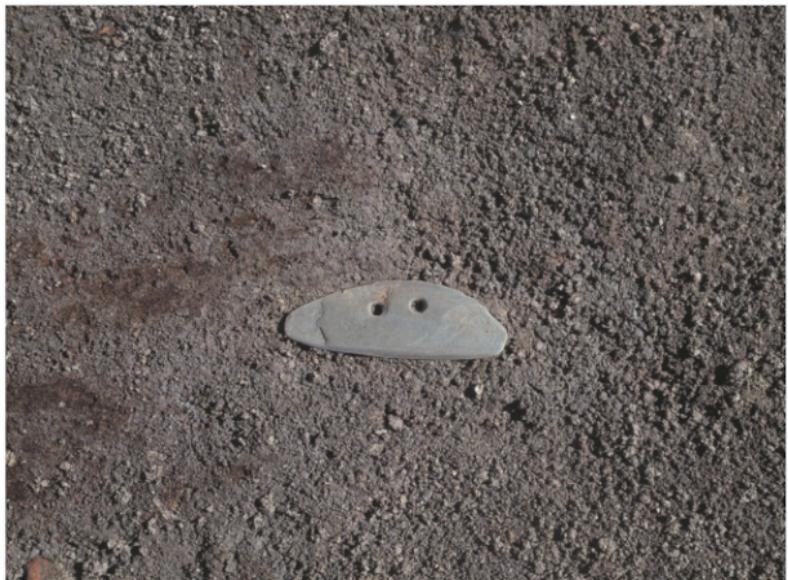
図版 28



SRO1 土層断面（南東から）



SRO1 底面 木製品出土状況（南東から。遺物No.157）



SRO1 石包丁出土状況（西から。遺物№ 137）



SRO1 土器出土状況（南から）

図版 30



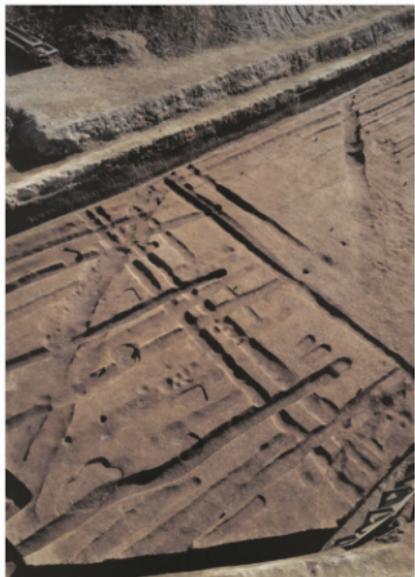
SX03 土器出土状況（東から）



SD111 検出状況（南南東から）



SD113 土層断面（北西から）



SD113・114 完撤状況（北西から）



SD114 土層断面（南東から）



SD113・114 完掘状況（南東から）

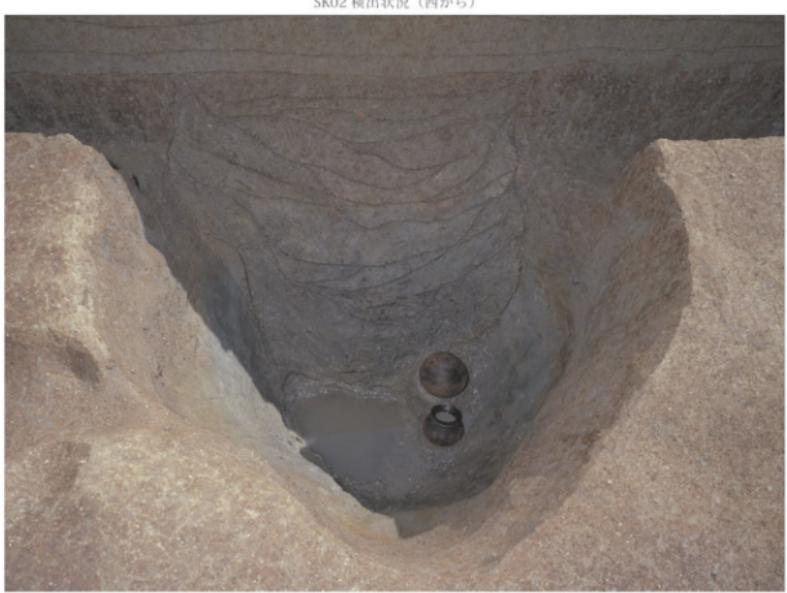
図版 32



調査区北半 下層遺構完掘状況（北東から）



SKO2 検出状況（西から）



SKO2 最下層 土師器出土状況（西から。遺物No 164・165）

図版 34



SK02 土堀断面（西から）



SK03 検出状況（南から）



SK03 完掘状況（北から）



SK03 下層 炭化物層検出状況（北から）

図版 36



調査区北壁 土層断面（南東から）



調査区北壁西端部 土層断面（南から）



調査区北壁東端部 土層断面（南から）



調査区全景 完掘状況（南から。V層上面検出）

図版 38



調査区南半 完掘状況（南から）



調査区南半 遺構面下断削土層断面（南西から）



調査区中央部 遺構面下断削土層断面（北西から）

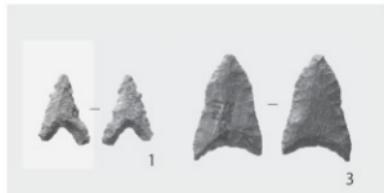


調査区南半 遺構面下断削土層断面（北西から）

図版 40



SRO2 出土 縄（遺物№127）



4



5

上層遺構（耕作溝）出土遺物



7



9

中層遺構 SK01 出土遺物



10



11

中層遺構 SK20 出土遺物



13

中層遺構 SP65 出土遺物

図版 42



下刷遺構 SR02 出土遺物①

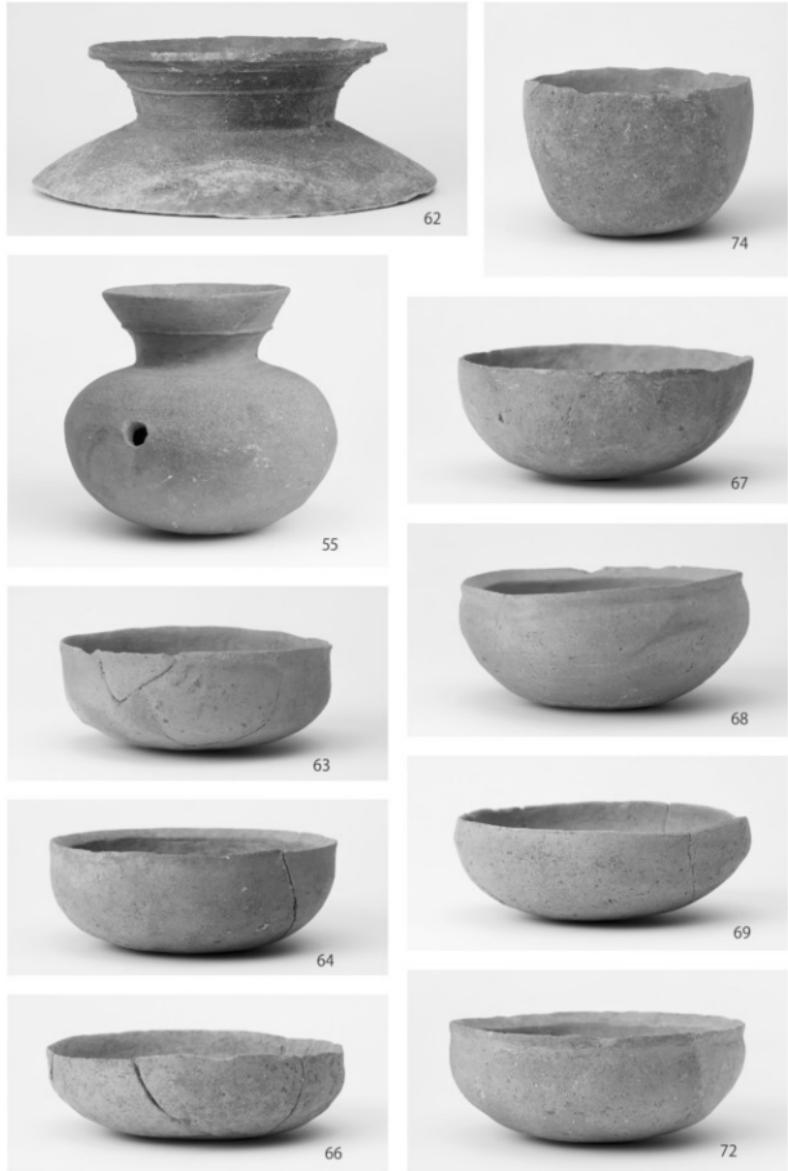


下層遺構 SR02 出土遺物②

図版 44



下層遺構 SR02 出土遺物③



下層遺構 SRO2 出土遺物④

図版 46



70



76



77



82



78



83



80



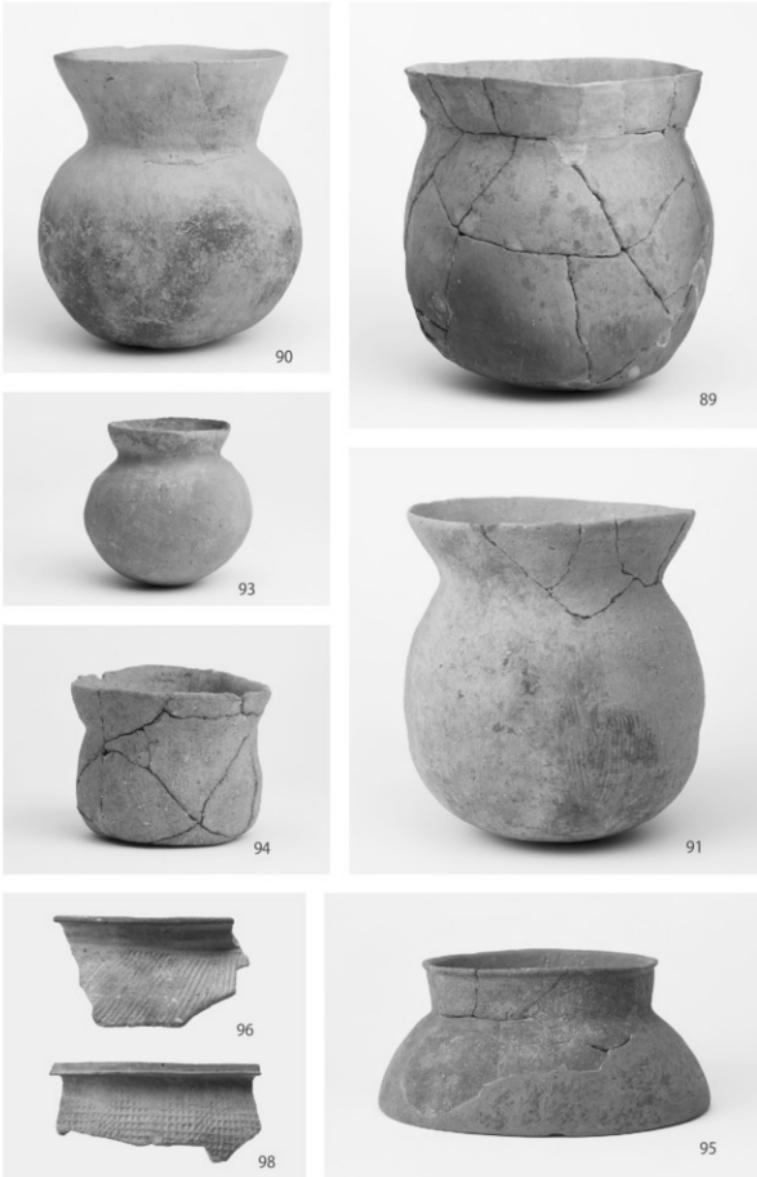
81



85



86



下層遺構 SR02 出土遺物⑥

図版 48



下層遺構 SR02 出土遺物⑦



111



118



120

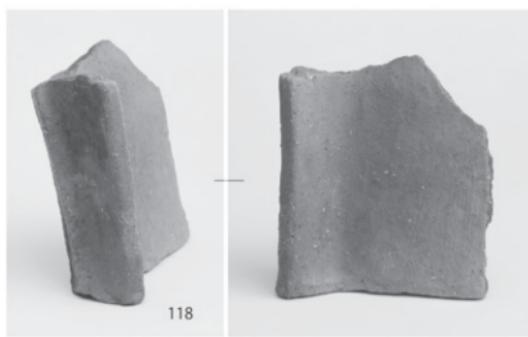
119



123

124

125



119



下層遺構 SR02 出土遺物⑧

図版 50

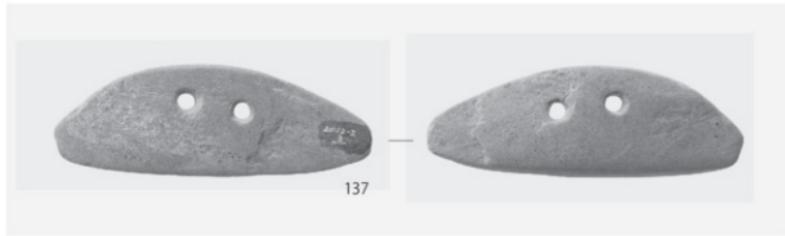


下層遺構 SRO2 出土遺物⑨



下層遺構 SRO1 出土遺物①

図版 52



下層遺構 SRO1 出土遺物②



162

下層遺構 SD120 出土遺物



166

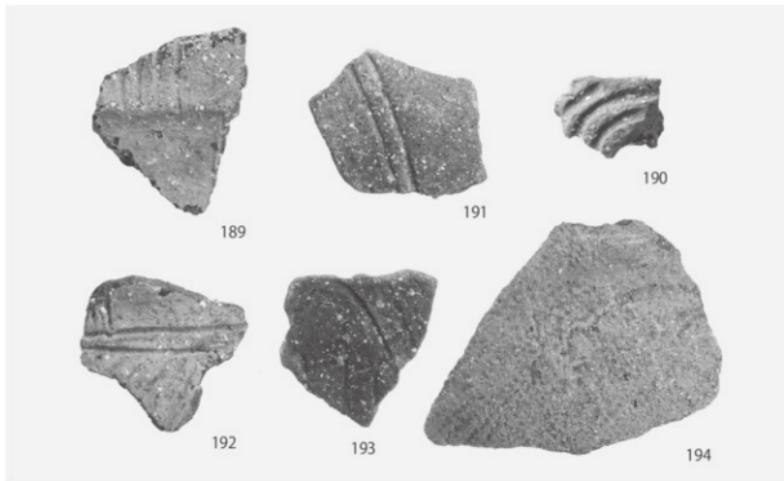


164



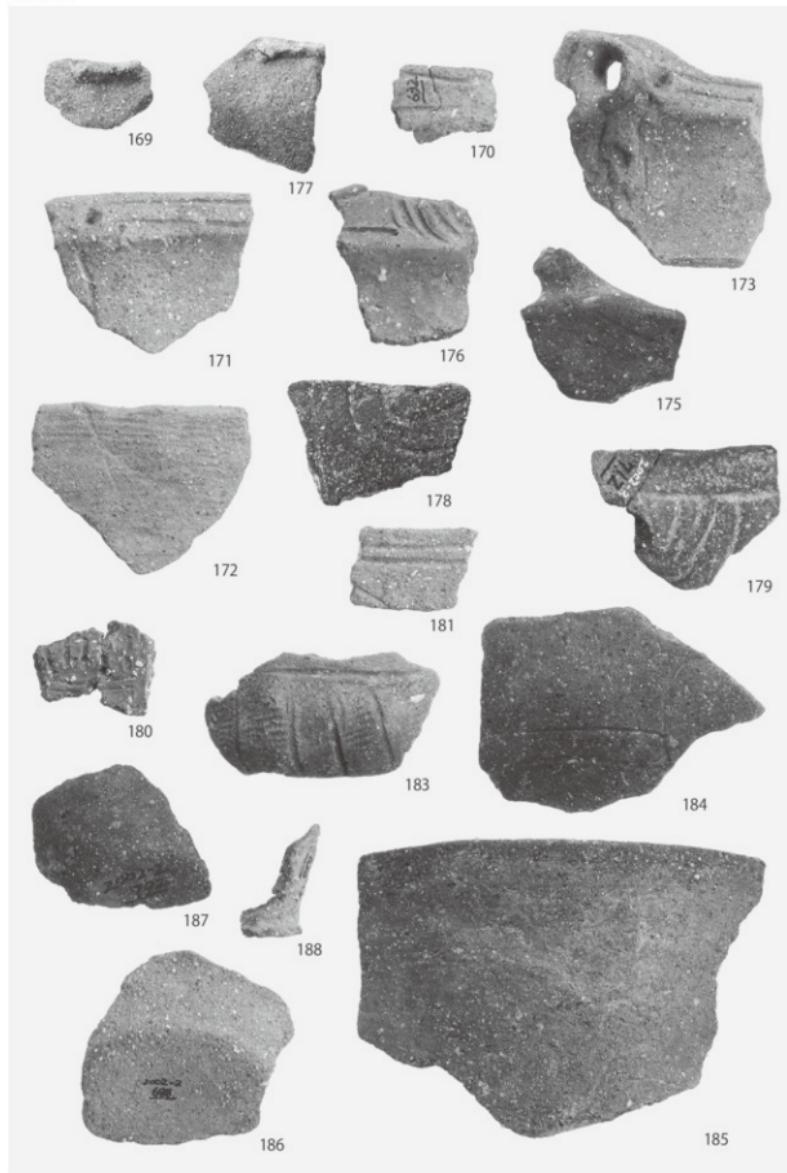
165

下層遺構 SK02 出土遺物

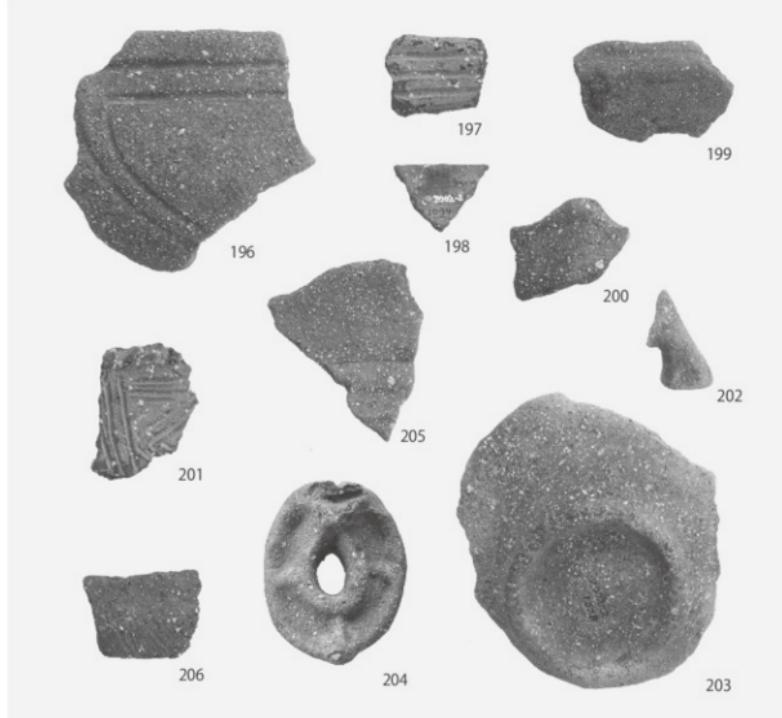


繩文時代包含層 IV-①層底面出土遺物

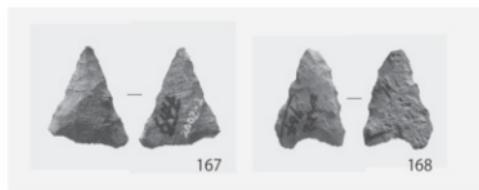
図版 54



縄文時代包含層 IV-①層出土遺物



縄文時代包含層 IV-②層出土遺物



縄文時代包含層 IV層出土石器

橿原市埋蔵文化財調査報告 第12冊

新堂遺跡

—京奈和自動車道「御所区間」建設に伴う発掘調査報告書—

発行年月日 平成27（2015）年9月30日

編集・発行 奈良県橿原市教育委員会

印 刷 株式会社 明新社

奈良市南京終町3丁目464番地